The National Association of Racing
地方競馬全国協会
畜産振興事業

令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会

《 第64回農林水産祭参加行事 》

令和６年11月28日

主　催　　公益社団法人中央畜産会
後　援　　農　林　水　産　省
　　地方競馬全国協会

はじめに

畜産会組織は、昭和30年の設立から69年にわたり、畜産経営に対する経営・技術の指導・助言（いわゆる畜産コンサルタント事業）を組織の中核的事業として実施してまいりました。

その間、多くの畜産経営が畜産会からの指導・助言により経営改善を果たしています。その中には、地域の中核的なリーダーとして活躍されている経営、先進的な技術や経営管理により全国のモデル的経営として評価されている経営、多額の負債を抱えながらも技術や財務管理の改善により健全経営として再建を果たし経営など多様な経営があり、地域の畜産振興に大きな役割を果たしてきました。

中央畜産会では、畜産会の指導により経営改善を図り、優秀な実績を収めている畜産経営、グループで課題解決に取り組んでいる事例などを広く求め、全国優良畜産経営管理技術発表会を開催してきました。この発表会において、優秀な事例を表彰するとともに、その経営成果とそれを支えた経営管理技術の普及拡大を図ることで、わが国の畜産の振興に資してきました。

本年度の発表会は第64回農林水産祭参加行事として開催しております。発表会で表彰した多くの経営が天皇杯をはじめ三賞受賞の栄誉に浴しており、わが国を代表する畜産経営を表彰する行事といえます。

今回、会員の方々からご推薦をいただいた事例は、いずれも優秀な実績を挙げている経営であり、それぞれさまざまな工夫や努力を積み重ねられた特徴のあるすばらしい経営ばかりです。

本資料は本年度の発表経営の取り組みをまとめたものであり、畜産経営、経営支援の現場で広く活用していただけると幸いです。

発表会の開催に当たり、多大なご協力をいただきました審査委員、会員団体・関係者の皆様、そして、後援いただいた農林水産省、地方競馬全国協会に厚くお礼申し上げます。

令和６年11月28日

公益社団法人　中央畜産会

令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会

第64回農林水産祭参加行事

主　　催　　公益社団法人中央畜産会

後　　援　　農　林　水　産　省
　　地 方 競 馬 全 国 協 会

開催日時　　令和６年11月28日（木）　13：00～17：00

開催場所　　都市センターホテル

＝ 次　第 ＝

13：00～　　開　　会

13：05～　　業績発表

15：40～　　審査講評

16：00～　　表 彰 式

17：00　　閉　　会

目次

はじめに

Ⅰ　令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会審査委員……2

Ⅱ　発表事例（最優秀賞・優秀賞候補）の概要……3

1　優れたリスクマネジメントによる高品質乳の安定生産
－人にも牛にも優しい酪農経営－
菅原　雅継・真美（酪農経営・岩手県一関市）……4

2　家族と関係者の協力で実現した安定的な肉用牛肥育経営
－30年にわたり辛抱強く取り組んだ経営再建－
兵藤　幸悦（肉用牛肥育経営・山形県酒田市）……10

3　祖父から孫へ、「愛」のバトンリレー
－地域に根差した耕畜連携・循環型農業の実現－
株式会社イソシンファーム（肉用牛肥育経営・栃木県大田原市）……16

4　持続可能な養鶏を追求する
－価値と魅力の再発見－
田辺　竜太（採卵鶏経営・山梨県忍野村）……22

5　自給飼料を軸に地域とともに、家族でやっていく
平野　耕平・博子（酪農経営・岡山県笠岡市）……28

6　外的要因に負けない肉用鶏を起点とした経営
－地鶏・循環・６次化で地域をリード－
有限会社長門アグリスト（肉用鶏経営・山口県長門市）……34

7　四国１位から全国１位肉用鶏に！
－誰でもできる飼育・管理をめざして－
株式会社ヤマニファーム（肉用鶏経営・高知県大月町）……40

8　地域を結束(丸)させ地域の幸福(福)を目指す『丸福』
－半世紀を超えて築き上げてきた「我が社のモットー　生産即消費の流通体系で地域を支える」－
(株)丸福・(有)荻町高原綜合農場（養豚経営・大分県竹田市荻町）…46

Ⅲ　特別賞の概要……53

9　畜産、耕種、行政がタッグを組んで飼料用米増産への調整機能を発揮
－循環型農業を進め水田を次世代に継承する－
旭市飼料用米生産者協議会・旭市飼料用米利用者協議会
（飼料生産組織・千葉県旭市）……54

Ⅳ　これまでの受賞事例……61

Ⅴ　令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会開催要領……81

協賛団体・企業一覧

Ⅰ 令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会審査委員

● 審査委員長

眞鍋　　昇	東京大学　名誉教授

● 審査委員（五十音順）

安藤　光義	東京大学大学院農学生命科学研究科　教授
叶　　拓斗	農林水産省畜産局企画課　課長補佐
栗原　伸一	千葉大学大学院園芸学研究院　教授
小迫　孝実	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター　研究開発監
齋藤　武至	湘北短期大学　講師
松田　二子	東京大学大学院農学生命科学研究科　准教授
近藤　康二	公益社団法人中央畜産会　専務理事

Ⅱ

発表事例の概要

優れたリスクマネジメントによる高品質乳の安定生産

－人にも牛にも優しい酪農経営－

菅原　雅継・真美（酪農経営・岩手県一関市）

地域の概況

菅原氏が酪農を営む大東町は、平成17年及び平成23年に１市５町２村が合併し一関市大東町となった。大東町は一関市の北東部に位置し、南東にそびえる室根山と北西の蓬莱山に挟まれた典型的な中山間地域であり、基幹産業は農業で、りんごやしいたけなどの他、県のブランド牛「いわて牛」の産地の一つとなっている。酪農は、昭和以降、稲作をやりながら、乳用牛を数頭飼養し、毎日の売上がある産業として盛んとなり、かつては旧町内

（写真１）家族写真（左から真美氏、子供４人、雅継氏）

（表１）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和27年	水稲、酪農	１頭	8.6ha	・祖父が酪農を始める
昭和47年	酪農専業	30頭	〃	・父が牛舎建設（30頭規模） ・サイロ建設、牧草地造成 ・酪農専業経営となる
平成 4年	〃	50頭	14.9ha	・牛舎建設（42頭規模）
平成22年	〃	〃	〃	・Uターン就農、I.W.G.Pに加入
平成23年	〃	〃	〃	・東日本大震災によりタワーサイロ損壊 ・ロールサイレージ体系に変更
平成24年	〃	〃	〃	・家族経営協定締結
平成26年	〃	〃	17.0ha	・雅継氏が経営主となる ・岩手県乳質共励会「乳質改善大賞」受賞、その後8回受賞
平成27年	〃	〃	18.4ha	・オンファームカルチャー開始 ・狩猟免許取得
令和元年	〃	〃	19.5ha	・家畜人工授精師免許取得
令和２年	〃	〃	〃	・いわて農林水産振興協議会会長表彰「意欲ある担い手賞」受賞 ・PAG検査開始
令和４年	〃	〃	〃	・ゲノム検査導入
令和５年	〃	53頭	〃	

で300戸以上あったが、令和2年には40戸まで減少している。

経営・活動の推移

昭和27年、当時水稲経営をしていた祖父が乳用牛１頭を導入し酪農を開始して以降、草地造成や牛舎の整備等を進め、現在の規模となった。

菅原雅継氏は、群馬大学工学部を卒業後、一般企業への５年間勤務を経て、平成22年に後継者として就農した。その後真美氏と結婚し、平成26年に父親から経営委譲を受け経営主となった。

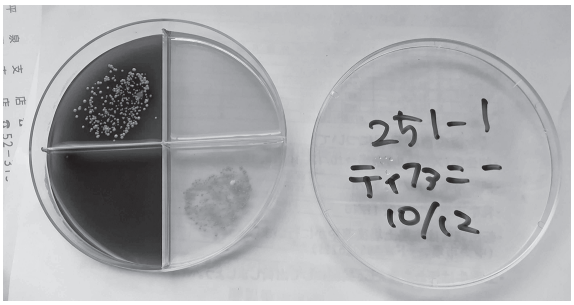
令和５年は、経産牛平均飼養頭数30.1頭、育成牛23.0頭を家族４名の労働力で飼養している。粗飼料は、ほぼ全量を自給し、堆肥を草地還元する循環型酪農を実践している。

畜産の経験はほぼ皆無であったため、地域で行われる多くの勉強会などには必ず夫婦で参加し、積極的に技術や知識を習得し、その結果、令和５年の平均成績は、個体乳量9,896kg、分娩間隔417日、体細胞数4.7万個/mlと極めて高品質な乳質と、優れた繁殖成績を達成し、地域を牽引する担い手となっている。

経営・技術の特色等

【オンファームカルチャーを活用した乳質改善】

就農当時や東日本大震災発生後、乳房炎の治療や対応等で苦慮し、廃棄乳の発生や治療費は莫大な金額となり、大きな損失となっていた。



（写真２）オンファームカルチャー用シャーレ

（表２）経営実績（令和５年）

経営概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）	家族・構成員	2.4人
		雇用・従業員	0.0人
	経産牛平均飼養頭数		30.1頭
	飼料生産	実面積	1,950a
	年間総販売乳量		297,880kg
	年間子牛販売頭数		16頭
	年間育成牛販売頭数		7頭
	年間経産牛販売頭数		0頭
収益性	所得率		29.7%
	経産牛１頭当たり生産費用		1,406,690円
生産性	牛乳生産	経産牛１頭当たり年間産乳量	9,896kg
		平均分娩間隔	13.7か月
		受胎に要した種付回数	2.2回
		平均産次数（期首）	2.9産
		平均産次数（期末）	2.7産
		牛乳１kg当たり平均価格	137.5円
		牛乳１kg当たり生産費用	142.1円
		乳脂率	3.95%
		乳蛋白質率	3.37%
		無脂乳固形分率	8.81%
		体細胞数	4.7万個/ml
		借入地依存率	56.4%
		飼料TDN自給率	37.2%
		乳飼比（育成・その他含む）	40.7%

このため牛舎・処理室の衛生管理や、搾乳機器のミルキングシステム診断を受診し定期的なメンテナンスを行う等、基本的な取り組みの徹底と、平成27年からオンファームカルチャーを始め、乳房炎の原因菌を早期に特定することにより、適切で迅速な治療と処置が可能となり、治療費や廃棄乳の削減につなげている。このような管理によって、乳房炎の発生は年間10件以下で、体細胞数はプラス乳価となる基準値を大きく下回り、乳価は県平均を約２円/kg上回っており、全農岩手県本部主催の乳質改善大賞を、平成26年以降８回受賞するなど、極めて高品質な乳質を維持している。

（写真３）良質な自給飼料生産

（写真４）繁殖管理板により繁殖状況を見える化

【良質な自給粗飼料の確保による経営安定化】

就農時の自給飼料の収穫は、タワーサイロへの詰込等、手作業による収穫作業に多大な時間を要していた。東日本大震災によるタワーサイロの損壊を契機に、ロールサイレージ体系に切り替え、19.5haの草地で粗飼料をほぼ100％自給している。

牧草は、早晩生の異なる品種を播種し、全ての圃場で適期に収穫できるよう工夫し、施肥は、土壌分析結果に基づく堆肥を中心とし、化学肥料の削減によって、収穫量の増と牧草成分の改善に繋げ、循環型酪農を実践している。

また、除草剤をスポット散布するとともに、草地周囲の法面も定期的に刈払うことで、雑草の侵入を防ぎ、収量を維持している。

令和５年は猛暑等の影響により収量が減少したことから、粗飼料の安定確保や更なる収量増に向け、簡易更新機を導入し、牧草の草種や品種の選定、より定着率の高い播種方法等、草地管理技術の見直しを計画的に進めている。

【分娩間隔短縮への対応】

牛舎の繁殖管理板は、繁殖状況を一目で分かるように工夫し、管理を効率化している。

また、令和元年に家畜人工授精師免許を取得し、発情兆候が弱い牛については、直腸検査を行い、授精適期を判断している。さらに、授精後28日目のPAG検査による妊娠確認（不受胎牛摘発）と、60日以降の直腸検査による妊娠確認を自ら行うことで、平均分娩間隔400日前後を維持している。育成牛は、強化哺乳の実践と自家配合飼料の利用により、初産分娩月齢20～21か月を達成し、育成費低減につなげている。

【牛を健康に保つための飼養管理】

牛を健康に保つ前提として、牧草摂取量を最大にするため、カッティングした自家産のロールサイレージ（栄養価の高い１番草は通年給与し、２・３番草を併用）を朝夕の２回給餌後、飼槽への掃き込みを１日８回実施し、個体ごとの摂取量を観察しながら粗飼料の過不足がないよう調整している。

乾乳牛には、低カルシウム血症対策として、

（写真５）自給粗飼料の飽食

カリウムの低い輸入乾草を一定量給与しているため、周産期疾病等による死亡・廃用がほとんどなく、初妊牛販売に加え経産牛の個体販売でも収入を上げている。

また、初乳が多く確保出来た場合には、必ず屈折糖度計を用い糖度（Brix）測定し、初乳中のIgG濃度（免疫抗体）を予測し凍結保存することで、初乳不足がなく、充分な量を給与でき、子牛の健康につながっている。

【作業の効率化、労働時間の削減によるゆとりの確保】

父親の代から現在まで飼養頭数はほぼ変化がなく、１棟の牛舎で集約管理を行うことで労働時間を短縮し、搾乳作業は１人でユニット５台を使い、40～50分で終了する。

牛床を清潔に保つことで、搾乳作業の短縮や乳房炎発症を減らす等、細やかな対応と日頃の徹底した飼養管理により労働時間の短縮を可能にしている。

【ゲノム検査を用いた高能力牛の保留】

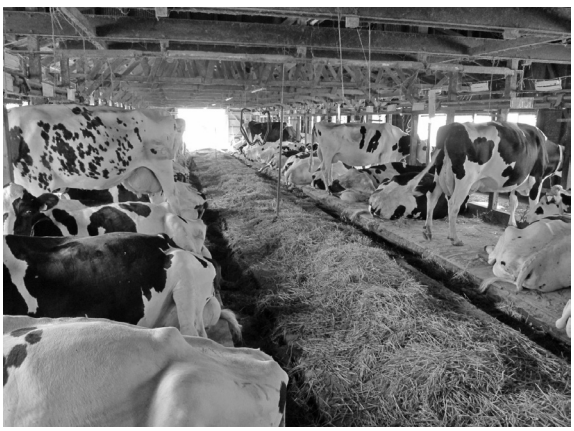
牛群成績の更なる向上を目指し、令和４年からゲノム検査を導入し、①飼料効率の向上②繁殖性の向上③健康性の向上の３点について重視し、遺伝的視点での牛群改良（後継牛の保留）を行っている。

【技術向上に向けた取り組み】

平成21年４月に結成した若手酪農家のグループ「I.W.G.P（Iwai Well-farm Guidance Project）」の会長として、定期的に勉強会と視察研修を行い、技術研鑽に努めている。牛群管理など、会員それぞれが課題や問題点を

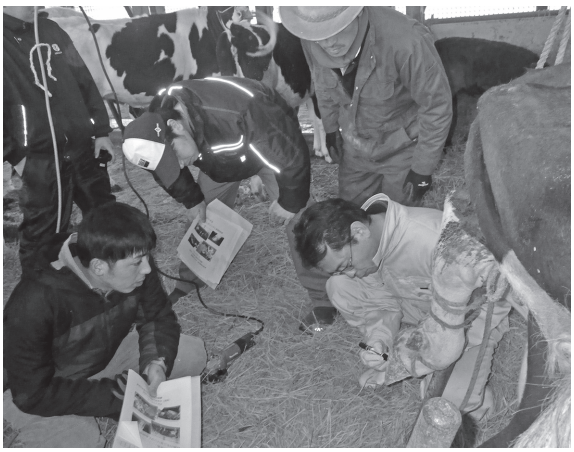
（写真６）飼槽への掃き込み

（写真８）乾いた牛床



（写真７）清潔に保たれた牛床

（写真９）清潔に管理されたミルキングシステム処理室



（写真10）若手酪農家グループI.W.G.P（削蹄勉強会の様子）

持ちより、普及センターや農協等関係団体の職員と連携し10年以上活動を継続している。また、他地域の酪農家の視察研修等も積極的に行い、情報交換やネットワーク構築の場を広げている。

地域に対する貢献

【獣害への対応】

草地等への、ニホンジカの食害が10年程前から見られるようになり、獣害対策の一端を担うため、平成27年に狩猟免許を取得し、一関市鳥獣被害対策実施隊員として、草地周辺の巻狩りを猟友会メンバーと共に実施している。

【堆肥処理と耕畜連携】

堆肥は19.5haの草地全面に、ほとんどの量を散布し、一部は稲作農家と稲わら交換を行うなど、耕畜連携にも貢献している。

【後進の育成】（再掲）

「I.W.G.P」の会長として、県内の若手酪農家を対象とした技術向上研修会の講師等を務め、悩み事などにも熱心に対応し、県内の若手酪農家にとって、目標とする経営体となっている。

また、農業大学校の視察研修を積極的に受け入れるなど後進の育成にも注力している。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

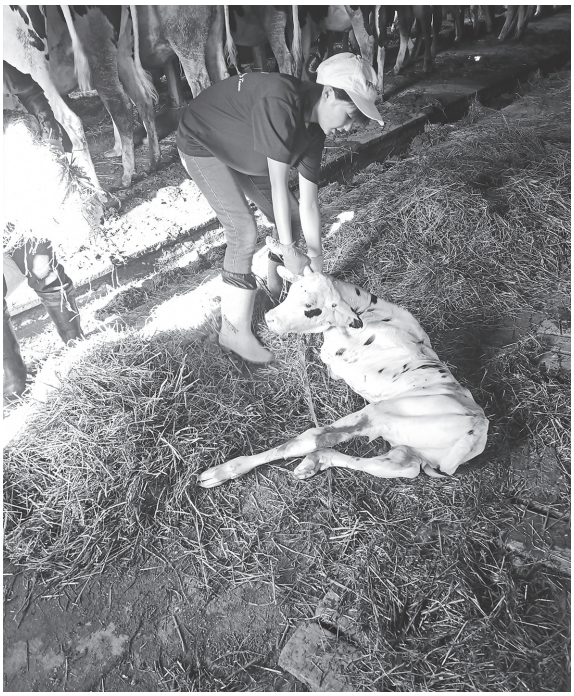
【女性の活躍】

妻の真美氏は非農家の出身で、雅継氏と結婚後、４人の育児を行いながら牛舎作業にも従事している。

また、５年前には大型特殊と牽引免許を取得し、飼養管理のほか、圃場作業も意欲的に行っており、今後は牧草収穫作業も含め、雅継氏と２人体制の作業体系に移行していく予定である。

４人の子供達も牛舎でよく遊んでおり、牛

（写真11）重機を操作する妻（真美氏）



（写真12）分娩を手伝う長女

との関わりも多い。中学一年の長女は将来獣医師になるのが夢で、牛舎作業は長女と雅継氏２人でもできるほどになっている。

【家族経営協定による良好な職場環境づくり】

平成26年に家族経営協定を締結し、役割分担を明確化している。

家計費はすべて専従者給与で賄い、事業資金管理は雅継氏、家計費管理は真美氏と明確に区別している。また、年間の経営状況を勘案しながら、給与の２～４か月分の賞与を支払っている。

今まで、妻は経理や家事・育児を主とし、飼養管理や粗飼料収穫作業は父母の手を借りて行ってきたが、今後は夫婦を中心とした体制に移行していく。

子供達も牛舎に入ることが多いため、家族で牛舎でのルールを作り安全を徹底している。

また、酪農ヘルパーを月１～２回利用し、ゆとりある経営を実践しており、現在は、親子でバドミントン大会出場を目標に、週３回の練習を楽しんでいる。

将来の方向性

【経営のビジョン】

経営継続の大前提は「ゆとりある、儲かる経営」と考えている。

妻と２人で現在の規模､労働時間を維持し、牛の個体能力を上げ、年間所得1,500万円を目標にしている。経営管理は、普及センターや中小企業診断士の協力により５か年の経営計画や資金計画を策定するとともに、PDCAにより、課題や行動計画を明確化し、目標達成に向けて取り組んでいる。

【今後の経営改善計画】

昨今は気候変動、世界情勢の変化など予想外の出来事への対応が迫られている。

牛の健康状態、経営状況の悪化等に即座に対応できるよう、さらに飼養管理技術を向上させ、トラブルの発生を未然に防げる経営を確固たるものにしたい。

特に、昨年は猛暑や日照りにより、牧草が減収したことから、暑さに強い草種や品種への転換を含め、草地の維持管理技術を見直している。

粗飼料については、現在、10か月分を備蓄しているが、常時12か月分を備蓄することを目標にし、引き続き飼料・資材価格の高騰、気候変動等にも対応できるよう備えていきたい。飼料分析、土壌分析を実施し、データに基づいた肥培管理の徹底や簡易更新機の活用により、追播技術を高精度化し、既存草地の生産力向上を図りたい。

雅継氏は就農時より、ニューヨークの酪農家フィル・ヘルフターの著書を愛読している。その本には、①快適性、乾いた牛床で腹一杯良質な粗飼料を食べさせる。②一貫性、毎日同じ時間に同じ作業をする。牛に急な変化を感じさせない。③継続性、それらを続ける。という牛を飼う上で大切な３つの指針があり、これらを牛と関わるときのモットーとし、今後も経営改善に意欲的に取り組んでいきたい。

家族と関係者の協力で実現した安定的な肉用牛肥育経営

―30年にわたり辛抱強く取り組んだ経営再建―

兵藤　幸悦（肉用牛肥育経営・山形県酒田市）

地域の概況

兵藤幸悦さんが居住する酒田市は、山形県の母なる最上川が注ぐ日本海沿岸の庄内地方の北部に位置する港湾都市である。気候は、寒暖差が少なく、夏季も比較的涼しい県内でも積雪が少ない温暖な地域である。

農業の状況は、水稲栽培が盛んで、野菜では無加温ハウスの軟白ネギや砂丘地でのメロン、果樹では庄内柿などが特産となっている。

畜産は、農業産出額が米、野菜に次ぐ第３位で、そのうち養豚が８割を占めており、畜産戸数は、肉用牛35戸、乳用牛５戸、豚13戸、鶏６戸となっている。

経営・活動の推移

【経営の規模拡大の推移】

幸悦さんは、地元の農業高校を昭和53年に卒業後、父親が営む水稲と肉用牛肥育（黒毛和種雌肥育）の複合経営に親元就農した。

就農に合せて前年に自己資金と農協の融資により畜舎に隣接する蔵の内部を改修及びもと牛導入等を行い、規模を70頭に拡大した。

【畜産経営の悪化とその改善の取り組み】

平成に入り牛肉自由化による枝肉相場の下落などの影響により、経営収支が悪化したことから、経営改善を図るため、平成３年に大家畜畜産経営体質強化資金（以下「畜特資金」という。）2,500万円を借入し、さらに負債が増加したため、翌年に1,090万円の畜特資金を借入した（第１・２回目借入）。

（写真１）経営主の兵藤幸悦さん

平成20年のリーマンショックによる枝肉相場の下落や飼料高騰等の影響で、負債が増加したことから、平成21年に畜特資金1,300万円を借入れた（第３回目借入）。

【経営改善のための取り組み】

〇第１・２回目の借入時の取り組み

山形県畜産協会が中心となり関係機関・団体からなる濃密指導チーム（以下「指導チーム」という。）を設置し、経営改善計画の作成、進捗状況のチェックと計画の見直しを行い、飼養密度を減らし、制限給餌をやめて給与量を増やすことで飼養環境及び枝肉重量の向上を図るなどにより畜産経営改善を進めた。また、稲作部門の収益性が良いことから、その収入と新たに水稲のヘリ防除等のオペレーター及び妻の農外収入で借入資金の確保に努めた。

〇第３回目の借入時の取り組み

リーマンショックによる枝肉相場の下落や飼料価格高騰等の影響で、負債が増加したことにより畜特資金を新たに借入れた。今後、米価の下落傾向から稲作部門の収入に期待できないことが考えられ、その後、東日本大震災による東京電力の福島原子力発電所の放射能事故による枝肉価格の暴落により、経営改善計画の達成が困難な状況となったため、従来の指導体制を一層強化し経営改善に取り組んだ。

〇経営改善を図るための課題整理とその対策

畜産経営改善を図るために、大きな３つの課題に対する対応策の整理を行った。

１つ目は、農作業場と蔵を改造したつなぎ飼い式牛舎で通気性や作業性が悪く、十分な増体が期待できない肥育方式になっていたこと、２つ目は、父親が畜産部門を担当し、但馬系の血統の肉質重視の飼養管理技術となっており、枝肉単価が下落した場合に影響が大きいこと、３つ目は、３回目の畜特資金の借入で返済はさらに長期間となり、返済資金の確保のためには家族の協力が必要と考えられた。

〇つなぎ飼い式から放し飼い式への変更

枝肉単価が下落時の収益の改善には、放し飼い式(群飼)に変更することが必要であった。

（表１）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和34年	肉用牛肥育 稲作	15頭 4.3ha	稲わら0.3ha	・父が肉用牛肥育経営（黒毛和種雌肥育15頭・つなぎ方式）を開始
昭和52年	肉用牛肥育 稲作	70頭 4.0ha	稲わら２ha えん麦0.3ha	・後継者の就農予定を契機に、自己資金及び農協融資により蔵を改修して70頭規模に拡大
昭和53年	肉用牛肥育 稲作	78頭 4.0ha	稲わら２ha えん麦0.3ha	・高校卒業後、就農し、主に稲作部門を担当 ・肥育牛規模を70頭から78頭に拡大
平成３年	肉用牛肥育 稲作・大豆	60頭 3.6ha・0.7ha	稲わら２ha	・牛肉自由化により枝肉相場が下落し、資金繰りが悪化し、大家畜畜産経営体質強化資金2,500万円を借入
平成４年	肉用牛肥育 稲作・大豆	60頭 3.6ha・0.7ha	稲わら２ha	・大家畜畜産経営体質強化資金1,090万円を借入
平成21年	肉用牛肥育 稲作・大豆	44頭 3.6ha・0.7ha	稲わら２ha	・リーマンショックにより枝肉相場が下落し、また、飼料価格高騰が重なり資金繰りが悪化し、大家畜緊急支援資金1,300万円を借入
平成25年	肉用牛肥育 稲作	44頭 3.6ha	稲わら２ha	・つなぎ飼い牛舎から放し飼い牛舎に移転 ・父は農業経営から引退
平成29年	肉用牛肥育 うち預託牛 稲作	43.9頭 12.5頭 3.4ha	飼料用米0.9ha	・肥育技術が評価され、畜産団地内の空き牛舎を活用し、11月から預託牛80頭増頭
令和３年	肉用牛肥育 うち預託牛	145.7頭 115.2頭		・自己資本率がプラスに転じる ・稲作部門を廃止し、肉用牛専業経営となる ・肉用牛ヘルパー月２回利用開始
令和４年	肉用牛肥育 うち預託牛	138.2頭 115.4頭		・畜特資金を完済 ・畜産団地内の空き牛舎を賃借し預託牛を120頭に拡大
令和５年	肉用牛肥育 うち預託牛	133.0頭 127.0頭		・自家所有肥育牛の全頭出荷終了後、預託経営に完全移行し、その牛舎に預託牛を導入し160頭に規模拡大
令和６年	肉用牛肥育 うち預託牛	160頭 160頭		・肉用牛ヘルパーを週１回以上の利用に拡大し、「ゆとりある、外的要因に影響されない安定的な持続可能な経営」を新たな目標に設定
令和７年	肉用牛肥育 うち預託牛	200頭 200頭		・畜産団地内の空き牛舎を賃借し預託牛を200頭に拡大予定

しかし、新たに牛舎を建設する資金がないため、空き牛舎の活用により飼養方式を変更することにし、関係者で空き牛舎の情報収集を行うことにした。平成25年に農協からの紹介により、自宅から車で10分ほどの畜産団地の空き牛舎を賃借できることになった。

畜産団地への移転を契機に父が農業経営から引退し、畜産経営も含めて本人主体で経営改善に取り組みができるようになった。

飼養方式の変更による飼養密度及び換気等の飼養環境や作業性が向上し、また、出荷月齢の短縮、事故率の低下、減価償却費の削減に向けた取り組みを行い、畜産経営改善が図られた。

〇生産コスト低減の取り組み

畜産機械は、新品での購入は行わず、必要な更新は優良な中古機械で対応するとともに、施設及び機械の修繕・修理はできるだけ自ら行い、減価償却費や修繕費を大幅に抑えた。また、敷料のもみ殻は、農協のカントリーエレベーターから無料で確保するなど、低コストに向けてあらゆる対応を行った。

〇家族からの理解と協力による経営改善

借入金の返済は、経営改善中の畜産部門と収益が低下傾向にある水稲部門を含めた農業部門での返済は厳しく、生活費まで賄うことは困難な状況であった。

このため、家族の理解と協力が必要と考え、家族会議を行い、現状と課題の話合いを行い、「畜特資金の返済は、自分が主体となり、畜産を含めた農業部門で行い、生活費は、妻及び子供たちの農外収入の協力をしてもらい確保する」ことにした。

【畜産情勢の変化への対応】

〇もと牛高騰への対応

平成26年から肥育もと牛価格の高騰で、高いもと牛の購入を控えたため、その後、出荷頭数が減少することが予想された。経営計画シミュレーションにより平成29年に経営収支

（表２）経営実績

経営の概要	労働力員数（畜産・2000hr）			家族・構成員	0.8人
				雇用・従業員	0.07人
	飼料生産				0ａ
	肥育牛平均飼養面積			肉用種	6.0（138.5）頭
	平均肥育牛販売頭数			肉用種	12（99）頭
収益性	所得率				24.6%
	出荷肥育牛１頭当たり生産費用				70,442円
生産性	肥育（品種・肥育タイプ）	（黒毛和種雌若齢）	肥育開始時	日齢	297（351）日
				体重	276.1（320.7）kg
			出荷時	日齢	889（876）日
				体重	692.1（667.2）kg
			平均肥育日数		594（586）日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重（DG）		0.70（0.65）kg
			対常時頭数事故率		0.0（2.2）%
			販売肉牛１頭当たり販売価格		1,251,445円
			販売肉牛生体１kg当たり販売価格		1,808円
			肉牛等級４以上格付率　※２		91.7（85.8）%
			もと牛１頭当たり導入価格		647,649円
			もと牛生体１kg当たり導入価格		2,346円
		（黒毛和種去勢若齢）	肥育開始時	日齢	（257）日
				体重	（302.1）kg
			出荷時	日齢	（849）日
				体重	（786.9）kg
			平均肥育日数		（592）日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重（DG）		（0.82）kg
			対常時頭数事故率		（4.8）%
			販売肉牛１頭当たり販売価格		（－）円
			販売肉牛生体１kg当たり販売価格		（－）円
			肉牛等級４以上格付率　※２		（95.0）%
			もと牛１頭当たり導入価格		（－）円
			もと牛生体１kg当たり導入価格		（－）円

※１：山形県畜産コンサルタント令和５年度平均値
※２：（　）は預託成績

が赤字になることが見込まれ、畜特資金の償還金の確保が厳しい状況になり、その対応が緊急を要する課題となっていた。

このような状況の中で、畜産団地に移転したことにより、肥育技術が向上し、枝肉成績が良好となり、このことが飼料会社から高く評価され、肥育受託（預託）事業の話があった。

肥育預託は、預託先から粗飼料、配合飼料及びもと牛の供給を受け、１日１頭当たり定額の飼養管理料をもらう内容となっている。

このため、稲わら収集、もと牛購入及び出荷の作業、削蹄及び除角等もしてもらう契約により、自家肥育に比べ約３倍の肥育頭数が肥育できること、もと牛及び配合飼料等の高騰に左右されず、畜産団地内の空き牛舎を賃借することで新たな投資が必要なく、収入が毎月かつ安定的に得られることから預託肥育を取り組むことにした。また、枝肉重量の大きな牛づくりができる技術を活かして、従来の雌肥育に加え、去勢の肥育も行うことにした。

〇新型コロナに伴う枝肉価格下落への対応

令和２年３月から国内で新型コロナウイルス感染症の拡大により外食やインバウンドの牛肉需要の大幅な需要低下に伴い枝肉価格が下落し、肥育もと牛高騰が続く中で、更なる経営改善対策が迫られた。

一方、稲作部門では、食用米の在庫が適正基準を上回り価格が下落し、また、稲作用機械の更新時期にも重なり、稲作での収益の確保が難しい状況になっていた。

預託肥育は、もと牛価格や枝肉価格に影響されず、収入が確保でき、収入増加の効果はすぐに現れる。また、水田を農地中間管理機構を通じて委託することで、機械を更新して自ら水稲栽培するより、収入が得られると判断した。

このため、令和３年から水稲部門を廃止し、余剰となった労働力で預託肥育牛を80頭から160頭まで拡大することにした。

【簿記記帳により畜産環境変化に対応】

簿記記帳は、消費税が始まった平成元年から行い、平成９年からパソコンによる記帳に切り替えて実施しており、同時に畜産協会による畜産コンサルテーションを同年から継続して毎年受けており、これを基に分析することで、経営の現状把握、将来の経営収支予想とそれに基づく計画作成や見直しを行ってきた。

畜産情勢の変化に迅速に対応できたのは、簿記記帳と畜産コンサルテーションを長年継続受診したことで、課題の把握が的確にできたこと、その対策として、畜舎賃借による飼養方法の変更や稲作部門廃止で余剰労力によ

（表３）畜産情勢の変化に対する対応状況

項目	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成29年	平成30年	令和２年	令和３年	令和４年	令和５年
畜産巡る情勢	平成23年３月 東日本大震災放射能事故							令和２年３月新型コロナ拡大 令和４年３月円安			
		平成24年10月 飼料価格高騰							令和３年１月 飼料・資材等価格の高止まり		
				平成26年10月 もと牛価格高騰						令和４年２月 ロシアウクライナ侵攻	
頭数	48.0	46.8	46.0	42.0	37.7	43.9	103.7	121.4	145.7	138.2	144.5
対策内容	つなぎ飼い式		平成25年９月 放し飼い式に移行			平成29年11月 預託肥育開始			令和３年から 稲作部門廃止		令和５年９月預託に移行

る預託肥育の規模拡大へと思い切った転換を実現したことがあげられ、畜特資金が完済できた大きな要因になったと考えている。畜特資金は借入から32年後の令和４年に完済した。

経営・技術の特色等

【高い経営管理技術を実現】

兵藤さんの経営改善の取り組みは、本県で特徴的な肉質重視の雌の若齢長期肥育にとらわれない早期出荷による回転率の向上及び事故率の低下を行いつつ、本県の平均を上回る高い上物率等の飼養管理技術や家族労働力１人で年間労働時間2,000時間以内で所得500万円以上で所得率24.6％と高い経営実績を上げている。

【労働力１人で肥育200頭飼養管理に挑戦】

経営再建を図るため、畜特資金の償還財源は、本人１人で水稲・畜産部門の収益で確保することにしていた。このため、労働力は基本的に１人しかいないことから、関係機関・団体の協力を得て省力化に取り組んだ。

平成25年９月に、畜産団地の空き牛舎に移転し、従来のつなぎ飼い式の個別給餌方式から放し飼い式に移行することで、群給餌方式に変更するとともに、ふん尿処理は畜産団地内にある農協の堆肥センターに委託して行うことができ、省力化と低コスト化が図られた。

平成29年には、規模拡大を図るため、稲わら収集をやめるとともに、もと牛導入、飼料生産等の作業を必要としない預託牛の肥育経営方式に取り組み、80頭で開始した。

令和２年に、米価の低下と機械の更新時期が重なったため、収支が赤字となる稲作部門を令和３年から廃止し、その余剰労働力で11月から120頭に拡大した。また、同時に全頭預託による肥育経営への転換を決定し、自己所有牛が全て出荷された牛舎を活用し、12月に預託牛を160頭に規模拡大した。

省力化の取り組みにより令和５年実績で１頭当たりの労働時間は13.4時間となっており、定期的な肉用牛ヘルパーの活用を含めて年間2,000時間で200頭までの飼養管理が可能と分析し、令和７年に団地内の空き牛舎１棟を賃借し、拡大を予定している。

【生産費の大幅削減を実現】

出荷月齢（令和５年）は、雌肥育で29.3か

（表４）経営・技術改善の状況

項　目			単位	平成23年	平成25年	平成26年	平成29年	令和元年	令和３年	令和４年	令和５年
経営改善の取り組み				つなぎ飼い式	放し飼い式に移行		預託肥育開始		自己資本率プラス	畜特資金完済	預託肥育に移行
経営	頭数規模		頭	46.0	46.0	42.0	43.9	117.3	110.5	142.8	144.5
	負債合計		千円	32,828	31,819	32,380	33,762	32,269	17,629	8,401	0
	自己資本率		%	－38.2	－19.5	－27.9	－12.8	－2.2	19.4	37.4	100.0
技術（雌肥育）	DG		kg	0.51	0.52	0.55	0.74	0.75	0.77	0.70	0.70
	出荷月齢		か月	31.4	31.2	30.9	26.5	26.9	28.2	28.0	29.3
	枝肉重量		kg	389.0	387.8	413.4	439.7	444.7	471.3	465.9	472.8
	枝肉販売価格		千円	601	759	851	1,079	1,086	1,201	1,214	1,251
	枝肉kg単価		kg	1,687	1,958	2,060	2,455	2,427	2,549	2,606	2,647
	１日当たり増加額		円	477	603	710	821	832	988	1,017	1,017
	肉質	５等級割合	%	8.3	15.4	22.2	4.3	16.0	33.3	56.2	83.3
		４等級割合	%	50.0	50.0	48.1	47.8	62.0	54.2	43.8	8.3
		上物率	%	58.3	65.4	70.3	52.1	78.0	87.5	100.0	91.7

月齢で、畜産コンサルテーション平均より３か月間以上早い早期出荷となっており、事故率と飼料費の削減を図っている。

【早期月齢出荷で高い肉質を実現】

肥育牛は、脂肪交雑を高めるビタミンコントロールを行わず、早期出荷に係わらず、山形県及び全国に比較して高い上物率（４等級以上）となっており、特に５等級の割合が非常に高く、高品質な牛肉を生産している。

また、去勢については、預託肥育として、平成29年11月から初めて取り組んだが、上物率は山形県平均レベル程度に達している。

【アニマルウェルフェアの取り組み】

１棟60頭飼養規模の牛舎（６頭×10牛房）を賃借しているが、１牛房当たり６頭基準のスペースに４頭を飼養することにより、飼養密度を下げて事故を防止するとともに、牛が並んで飼料を食べられるようにし発育の向上を図ることに加え、脂肪交雑を高めるためのビタミンコントロールは行わず、十分な飼料を給与し、アニマルウェルフェアに配慮した飼養環境としている。

預託委託先の協力を得て、肥育もと牛には鼻環を装着せず、導入前に除角を行ってもらい、削蹄は導入時と17か月齢頃に実施し、ストレス軽減や牛の健康に配慮している。

【持続可能な経営の取り組み】

令和４年に畜特資金の返済が終了し、今後は、枝肉価格、肥育もと牛及び配合飼料の高騰などの外部要因に影響される経営から脱却したいと考えている。

そのため、預託肥育経営を現在の160頭規模から令和７年に200頭に拡大することで、安定的で持続可能な経営に向けて準備をしている。

女性の活躍・働きやすい現場環境づくりの取り組み

妻には、畜産部門を含めた農業収入では、生活費を賄うことができないため、農外で生活費を確保するために働いてもらっている。

また、自家産の米や自給野菜の栽培や生活費の把握と見直しを行うことによりできるだけ生活費の節約に頑張ってもらい、側面から畜特資金の完済に大いに貢献してもらった。

将来の方向性

【次世代への継承】

後継者である息子は、農外からの収入を得るため、会社勤めをしながら、肥育牛の給餌等を手伝うことで、畜特資金の返済に協力してきた。

肥育経営の継承は、本人の意志を尊重するつもりでおり、それまでは、これまでどおりに一人で経営を維持していきたいと考えている。

【今後の経営計画】

これまでの肥育飼養管理技術の改善及び省力化の取り組みの成果により、令和４年に畜特資金を完済し、「家族労働力１人・年間労働時間2,000時間・所得500万円」を達成した。

今後の経営計画は、来年に畜産団地内の空き牛舎１棟を賃借し、預託牛200頭に拡大するとともに、肉用牛ヘルパーを利用して、現在の月２回から週１回以上の休みを取り、「ゆとりがあり、外的要因に影響されない安定的で持続可能な経営」を目指していきたいと考えている。

最後に、畜産経営を改善し、畜特資金を完済できたのは、32年間の長期間にわたる家族の協力と関係機関・団体の支援、特に、畜産協会からは畜産コンサルテーションを通じて経営及び技術指導や、常に寄り添って、励ましてもらったおかげであり、深く感謝する。

祖父から孫へ、「愛」のバトンリレー

ー地域に根差した耕畜連携・循環型農業の実現ー

株式会社イソシンファーム（肉用牛肥育経営・栃木県大田原市）

地域の概況

㈱イソシンファームが所在する大田原市は、那須野が原の扇状地に位置し、内陸性の気候に属する。市の中央を鮎の漁獲量日本一の清流・那珂川が流れ、市の東側は八溝山系山間部からの雪解け水が豊かな水源となっている。

大田原市の農業産出額は260億円と県内で

（写真１）右から社長の平久江利実さん、会長の磯進さん、取締役の平久江由美子さん

（表１）経営の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和45年	肉用牛肥育 （ホワイトヴィール）	子牛50頭		27歳で独立
昭和46年	肉用牛肥育 稲作	50頭		石油危機により原材料枯渇・高騰 ミルクの代替として自己調達の草を給与→循環型農業の基本形へ
平成18年	肉用牛肥育（交雑種） 稲作・アスパラガス	300頭		循環型農業の実現に向け、堆肥有効活用の観点からアスパラガス栽培開始（0.3ha）
平成22年	肉用牛肥育 （交雑種・ホルスタイン） 稲作・WCS・アスパラガス	380頭	WCS 10ha	将来の事業承継を見据え法人化 利実さん（現社長）が就農
平成25年	肉用牛肥育 （交雑種・ホルスタイン） 稲作・WCS・アスパラガス	400頭	WCS 30ha	廃業した肉牛農家から羽田農場（６ha）購入
平成28年	肉用牛肥育 （交雑種・ホルスタイン） 稲作・WCS・アスパラガス	550頭	WCS 50ha	廃業した大規模農場（栃木県大田原市、20,177坪）を取得
令和４年	肉用牛肥育 （交雑種・ホルスタイン） 稲作・WCS・アスパラガス	950頭	飼料用米10ha WCS 80ha	利実社長に経営移譲
令和６年	肉用牛肥育 （交雑種・ホルスタイン・黒毛和種） 稲作・WCS・アスパラガス	950頭	飼料用米10ha WCS 80ha	和牛の肥育を開始（月２頭のペースで導入）

も有数の規模だが、中でも水稲は県内第１位の生産量を誇る。畜産関係では上質の和牛や乳牛の飼育が盛んである。

経営・活動の推移

初代社長である磯進氏（現会長）は、16歳で親元就農し、当時は稲作を営んでいたが、親元から独立するにあたり肉用牛の肥育に着目し、昭和45年（当時27歳）に購入した肉用牛の子牛に代用乳のみを給与しホワイトヴィールとして子牛の肉を出荷する経営を開始した。

しかし、オイルショックの影響を受け代用乳の高騰や代用乳自体が市場に十分量出回らなくなったことにより、自給飼料を活用した肥育経営に切り替えることとなった。また、肉用牛の肥育とともに稲作も行っており、肉用牛飼養により得られる堆肥を水田に還元、代わりに米収穫後に得られる稲わらを飼料に、もみ殻を敷料に活用しながら徐々に頭数を増やしてきた。

平成22年には平久江利実氏（現社長）が就農し、将来的に事業継承することを考え法人化し、現在の㈱イソシンファームを設立した。

平成25年３月に廃業した肉牛農家から農場および農地を購入する（６ha）とともに、平成28年には廃業した大規模農場（栃木県大田原市、２万177坪）を購入するなど規模拡大を進めてきた。

経営・技術の特色等

【高い粗飼料自給率】

肥育牛に与える粗飼料は、育成当初に輸入乾牧草を与えるが、育成３か月を経過した後はWCSの給与、肥育後期は稲わらを食べさせ、粗飼料自給率は約95％となっている。

粗飼料となるWCSは、地域の農家からの受託も含めると81ha栽培している。濃厚飼料となる飼料用米も10.5ha栽培しており、出荷牛１頭当たり購入飼料費は48万4,000円と低コスト化が図られている。生産したWCSは、

（表２）経営実績（令和５年）

経営の概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）			家族・構成員	0.0人
				雇用・従業員	8.0人
	飼料生産	実面積			900a
	肥育牛平均飼養頭数	肉用種			0.0頭
		交雑種			845頭
		乳用種			140頭
	年間肥育牛販売頭数	肉用種			0頭
		交雑種			387頭
		乳用種			80頭
収益性	所得率				10.0％
	出荷肥育牛１頭当たり生産費用				922,206円
生産性	肥育（品種・肥育タイプ）	（交雑種・雌）	肥育開始時	日齢（月齢）	40日
				体重	60kg
			肥育牛１頭当たり	出荷時	859日
				出荷時生体重	800kg
			平均肥育日数		819日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重（DG）		0.903kg
			対常時頭数事故率		2.4％
			販売肉牛１頭当たり販売価格		715,233円
			販売肉牛生体１kg当たり販売価格		894円
			肉質等級３以上格付率		72.0％
			もと牛１頭当たり導入価格		169,615円
			もと牛生体１kg当たり導入価格		2,826円
	肥育（品種・肥育タイプ）	（乳用種・去勢）	肥育開始時	日齢（月齢）	40日
				体重	70kg
			肥育牛１頭当たり	出荷時	682日
				出荷時生体重	842kg
			平均肥育日数		642日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重（DG）		1.202kg
			対常時頭数事故率		2.4％
			販売肉牛１頭当たり販売価格		617,293円
			販売肉牛生体１kg当たり販売価格		733円
			肉質等級３以上格付率		1.0％
			もと牛１頭当たり導入価格		132,052円
			もと牛生体１kg当たり導入価格		1,894円

（写真２）WCS専用収獲機での刈り取り

自家消費のほか、地域の酪農家へも供給しており、地域一帯で耕畜連携を図っている。

また、濃厚飼料としてトウモロコシの代わりに飼料用米を平成22年から給与し、平成27年より利用比率を10％から20％に高めるなど新たな取り組みについて、意欲的に行っている。

【耕畜連携による循環型農業の実践】

自家生産の堆肥の利活用のため、地域の耕種農家34戸との耕畜連携（堆肥と稲わら交換）および自社農場で取り扱っている水田に堆肥散布を行っている（堆肥散布105ha）。また、耕種農家だけではなく近隣の果樹農家や家庭菜園など利用希望のある方すべてに堆肥を提供している。耕畜連携により堆肥を有効活用でき、また、いただいた稲わらは牛の飼料となるため、飼料コストの低減につながっている。

（写真３）堆肥散布

（写真４）WCSの給与

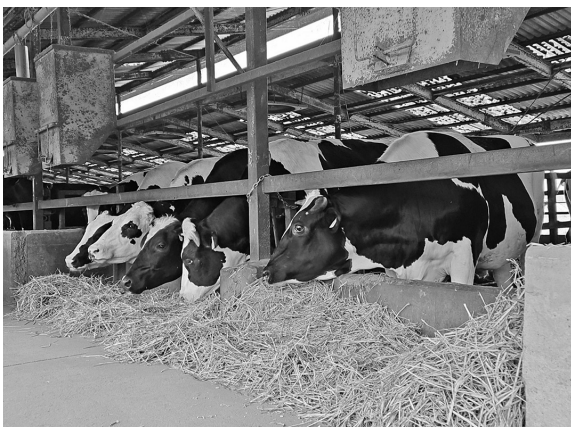
【アスパラガス栽培との複合経営】

堆肥を多く利用し土づくりをするということから、平成18年よりアスパラガスの栽培を始めた。一部を直接販売するなどの販路拡大やスーパーと連携した消費者交流会を実施するなど「食と農」の重要性のアピールも行い、環境保全の取り組み等と合わせて「安心安全な農畜産物の生産・資源循環型農業」を消費者視点も踏まえながら実践している。

【安心安全な牛肉生産への取り組み】

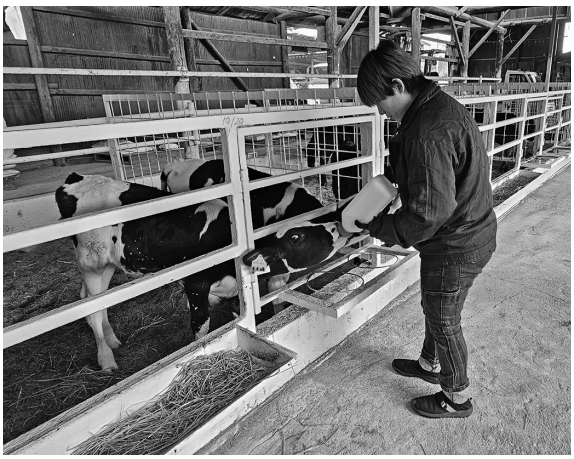
生活協同組合へ「栃木開拓牛（ホルスタイン雄）」、「ほうきね牛（交雑）」として販売しており、所属している栃木県開拓農業協同組合と那須篝根酪農業協同組合による地域内乳肉一貫生産を実施している。

生産される牛肉は、生まれてからと畜され



（写真５）豊富な稲わら

（写真６）ハッチの石灰塗布



（写真７）哺育の様子

るまで飼養状況を把握できる状態を維持し、生産履歴と生産情報が開示されている。また、NON-GMO穀物飼料、自家生産の稲わらやWCSを利用し、牛の健康的な飼育を実施している。さらに、独自に牛肉の放射性物質検査も実施しており、国の基準値である100Bq/kgの１/10である10Bq/kgを検出下限値として設定し、牛肉は検出下限値未満になっている。

【健康に育てるための哺育技術と肥育技術】

牛も「苗半作」という言葉と同様に、良い子牛を育てること、つまり哺育期の管理が後々の肥育牛の成績に大きく関わっているという考えを持っている。そのため、スモール（生後１か月齢未満）で導入した子牛もしっかり代用乳が飲めるように、観察・工夫をしながら成長を確認している。子牛の時期にしっかり（１日４ℓ）代用乳を飲ませ（２か月齢で断乳）、また、柔らかな乾牧草を給与することで、成長に必要な栄養の摂取と十分なフレーム作り・腹づくりを促している。

また、導入直後の子牛を入れるハッチは子牛を入れる前までにきれいに掃除し、石灰塗布をすることで、病気の侵入防止やまん延防止に力を入れている。さらに、朝の作業前や餌の給与後などの牛が落ち着いているタイミングでの巡回を頻繁に行っている。巡回で気がついた些細なことでも従業員の間で共有することにより、調子の悪い牛を早期に発見・対応することを心掛けている。

上記の取り組みなどにより、過去３年間で事故の割合は、対常時頭数事故率2.4％と低くなっている。

【先進機器の導入】

利実社長はドローン免許を取得し、水田への薬剤散布を効率的に行っている。また、GPSを活用した田植え機も導入しており、従業員の労働時間短縮と労働標準化に寄与している。

WCSの収穫機器は、本格的に栽培を開始した平成21年に細断型専用収穫機を購入しており、当時から効率的な作業と良好な品質のWCSの生産を目標に行ってきた。

（写真８）ドローンによる薬剤散布

地域に対する貢献

【農地の維持管理】

離農や後継者不足・高齢化により農地の利用に課題を抱える農家に対し、作業受託や農地の買い取りなどを行っている。地域農業の維持が重要であると考え、地域からの依頼は可能な限り引き受けている。

【堆肥供給や耕畜連携等による地域農業との共生への取り組み】

堆肥は２か月に一度のペースで切り返しを行うとともに脱臭剤の使用によって臭いの発生を抑制している。また、もみ殻堆肥で使用しやすいことから計50戸の農家に無償で配布している。肥料高が続く昨今において、近隣農家のコスト低減に貢献している。

また、粗飼料のWCS（2,148t）、飼料用米（65t）を生産していることから、耕種農家・畜産農家との利用計画や堆肥散布契約などを通して、離農・後継者不足・高齢化といった課題を抱える近隣農家に対し、地域の中核的な農家としての位置を確立している。

【食育の活動】

那須野農業協同組合の「なっちゃんくらぶ」の一環で、年に一度アスパラガスの収穫体験を実施している。また、特約販売先である生活クラブの交流会・産地説明会や、「まるごと栃木」のイベントなどを通して定期的に消費者団体との交流を図っている。

（写真９）消費者との交流

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

現在、役員３名のうち２名は女性である。利実社長は肉牛部門の責任者、進会長は水稲部門、由美子取締役はアスパラガス部門の責任者として経営を行っており、分業体制が確立している。

従業員13名のうち６名は女性であり、男女問わず作業に従事している。業務を行う上で必要な資格の取得については会社で費用を負担しており、社員のスキルアップに向けた積極的なサポートを行っている。

事前に休みの希望を聞いた上で利実社長がシフトを組んでおり、希望休は100％取得可能となっている。農閑期には毎年研修生も含め貸切バスで社員旅行に行っており、従業員のモチベーション向上に寄与している。また、研修生の住環境整備についても力を入れて取り組んでおり、男性用宿舎とは別に女性用宿

（写真10）研修生の宿舎

（写真11）社員旅行

（写真12）定期的に行う食事会

舎を設置している。

将来の方向性

【次世代への継承】

利実社長は会長の孫娘、由美子取締役は会長の娘であり、家族内での経営の継承が着実に行われている。なお、利実社長は32歳と若く農家の高齢化が進んでいる中、地域の担い手として期待されている。

令和５年度には、関係機関が連携し「担い手コンサルティング」を実施し、進会長が引退した後も経営規模を維持できるようコンサルティングを受けており、令和10年度を目安に実質的な事業承継、「バトンリレー」の完了を目指している。

【今後の事業継承】

事業承継完了までは現状の売上高４億7,500万円、飼養頭数988頭、経常利益率８％の維持を目指し、経営の安定化に重きを置いている。将来的には、規模拡大も視野に入れるとともにICT技術の導入による作業効率化の推進など、設備面でのさらなる充実を図っていく予定である。また、引き続き耕畜連携による循環型農業の実践によって、消費者に安心安全な牛肉を供給するとともに、近隣農家の作業受託や農地取得を通して地域農業の下支えに努めていきたい。

さらに、在籍していた従業員が技術を取得した後に自ら経営者として畜産業を営んでいることから、利実社長は「農業を学べる場としての役割を当社が担っていけたら良いと考えている。実践型の研修を行うことで地域の担い手になる人を育てていきたい」と考えている。牛、従業員、地域を愛する進会長の思いを引き継ぎ、これからも地域に貢献しながら、「創造」と「前進」を目指していく。

持続可能な養鶏を追求する

－価値と魅力の再発見－

田辺　竜太（採卵鶏経営・山梨県忍野村）

地域の概況

本経営が所在する富士・東部地域は、首都圏に近い立地条件と夏季の冷涼な気候・清涼な湧水等の自然条件に恵まれており、高原野菜をはじめ酪農や花き等、特色ある農業経営が行われている。

また、地域内には比較的規模が大きい養鶏経営が営まれており、県内の鶏卵供給地として、その役割を担っている。

忍野村は、標高約940mに位置し、避暑地として古くから親しまれ、毎年多くの観光客が訪れる。稲作のほか、スイートコーンなどの生産が盛んである。

経営・活動の推移

３代目経営者である竜太氏は就農以前、スポーツ業界に身を置いており、実家の採卵鶏経営を継承する予定ではなく、それは２代目経営者であった良一氏も同じ考えであった。

良一氏が平成28年８月に急逝した後、顧客や近所の方々から「養鶏場を続けてほしい」という声を受け、父の養鶏場が地域の人々から愛されていたことを改めて感じ、氏は経営継承を決意した。

同年12月に勤めていた会社を退職し、29年１月に就農開始、令和元年に当時代表を務めていた母親の幸子氏から事業継承することとなった。

（写真１）経営主（田辺竜太氏）

しかし、良一氏の経営時は継承する予定ではなかったため、鶏舎の老朽化、飼養規模の不足、販路の新規開拓、売掛金の累積など、問題は山積していた。

収益性を改善するため、経費削減、飼養規模の最適化など、経営の刷新を図った。そのうちの１つである平飼いへの転換が収益性向上の一因となった。

東京で開催されたマルシェに自身の生産物を出品した際、消費者から「この卵は平飼いか？」「餌はどのようなものか？」等の経営に対する具体的な質問を受け、消費者の食品安全に対する意識が想像より高いことに驚くとともに、大規模経営に対して価格競争で対峙せずとも、消費者の需要にあった高付加価値化を行うことで鶏卵の個性化が図れるのではないかと考えたことが、一部平飼への転換

（表１）経営の推移

年次	作目構成	飼養羽数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和45年	採卵鶏	10羽	２坪	竜太氏祖父（良氏）が忍野村内野で養鶏を開始
昭和52年	採卵鶏	4,000羽⇒36,000羽	1,600坪	竜太氏父（良一氏）が経営継承
平成29年	採卵鶏	12,000羽	1,600坪	竜太氏が経営継承
令和元年	採卵鶏			母親の実家（空き家）をリノベーションし、「たまご食堂」開店
令和４年	採卵鶏	15,000羽	1,600坪	旧ケージ鶏舎を平飼い鶏舎にリノベーション 平飼い集卵装置の導入 平飼いを開始 クラウドファンディングを立ち上げ、平飼いの規模拡大を図る
令和５年	採卵鶏			やまなしアニマルウエルフェア認証を取得 パルシステムとの販売契約

（表２）経営実績（令和５年度）

経営概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）	家族・構成員	2.4人
		雇用・従業員	8.1人
	採卵鶏平均飼養羽数		13,000羽
	年間鶏卵生産量		255,500kg
	年間鶏卵出荷量		230,000kg
収益性	所得率		16.1％
	採卵鶏100羽当たり売上原価		698,329円
生産性	採卵鶏100羽当たり年間鶏卵生産量		1,965.4kg
	採卵鶏100羽１日当たり産卵量		5.4kg
	鶏卵１kg当たり平均販売価格		470.0
		GP	200.0円
		産直	570.0円
	直販割合		50.0％
	採卵鶏100羽１日当たり飼料消費量		11.0kg
	飼料要求率	農場	－
		採卵鶏	－
	育成率（初生雛）		－％
	育成率（中大雛）		－％
	採卵鶏淘汰率		0.05％
	採卵鶏へい死率		0.05％
	採卵鶏補充率		－％
	鶏舎１m^2当たり年間鶏卵生産量		71.0kg
	鶏舎１m^2当たり採卵鶏飼養羽数		3.60羽

を図るきっかけとなった。

当時、県内で平飼いに先駆的に取り組んでいた農場があり、自ら訪ねた。

その農場が積極的に取り組んでいたアニマルウエルフェアの考え方に感銘を受け、現場で直接生産手法を学び、販売先についても紹介を受けることができた。

また、当時空き家となっていた実家を「たまご食堂」として週末限定で、規格外の卵等を加工して提供、自社のPRや地域イベントを開催するなど、経営において多くの役割を果たしている。

また、アニマルウエルフェアの考え方や、自身の経営に対する姿勢を多くの人たちに知っていただくため、令和４年の11月-12月にクラウドファンディングを立ち上げた。返礼対応として、田辺養鶏場の卵と五味醤油（甲府市）が開発した麹醤油を使った卵かけご飯を自宅で味わえるコース、養鶏場の見学、「たまご食堂」の卵料理を味わえる体験コースを設けたところ、全国から159名の支援者が参加し、466％の達成率と、目標を大きく上回る多くの方々から共感を得ることができた。

経営・技術の特色等

経営継承時は採卵鶏を約24,000羽飼養していたが、一部平飼いへシフトしたことで現在は14,800羽の飼養となっており、４分の１が平飼い、４分の３がケージ飼いとなっている。

夏場は鶏舎横のスペースでネットを設置の上放飼も実施しているが、鳥インフルエンザの発生を防ぐために、防疫上リスクの高い時

期には放飼せず、鶏舎内での平飼いに留めるほか、飼養衛生管理基準を順守し、従業員全員での衛生管理を徹底している。

飼料に関しては、先代からの餌づくりに対するこだわりを継承し、カキ殻や海藻粉末を加えた安全で質の高い飼料を、成長過程に合わせてメーカーで配合し給与している。また、パルシステム生活協同組合連合会と販売契約を締結するにあたり、国産飼料10％以上配合の規定があることから、国産米や地元忍野村の事業者から排出される大豆かすを活用するなど、地域資源を有効活用したエコフィードに取り組んだ。現在、卵質をより向上させるため、エコフィードの利用については一時休止し、ワイン粕、ホップ粕など、利用の誘引がある未利用資源の配合を検討している。また、現在の経営主となってから一部平飼いへ転向したことにより、新たな販売先開拓とアニマルウエルフェア飼養の高付加価値化を実現した。

【先進機器の導入】

平飼いにシフトするにあたり、国内では先進的な平飼い集卵装置（ベンコマチック社自動集卵ネストシステム）を県の機械導入補助事業を活用し導入、効率的な平飼い飼養を実施している。

平飼いを行うリスクの１つに圧死が挙げられるが、これは鶏が驚くとスペースの隅に集まる習性があり、先に隅へ集まった鶏が後から来た鶏につぶされるものである。田辺養鶏場ではこのリスクを分散するため、ネットで飼養スペースを細分化することで隅を多く作り、圧死のリスクを軽減している。平飼いを始めるにあたっては、圧死に加え、巣外卵の発生、産卵率低下、販売先開拓、疾病など多くの懸念があったが、技術提供いただいた経営のサポートもあり、可能な限り自然に近いレイアウトを心がけ、現在平飼いによる大きな問題はない。

【省力・低コスト化】

本来、平飼いはケージ飼養と比べ手間がかかるが、効率的な機器を導入したことにより、むしろ大幅な省力化を実現している。一部ケージ飼養だったものを平飼いへ転換したことで、ワクモの発生が抑制され、薬剤費が削減された。

また、本来売り物にするのが難しい卵（ヒビ卵など）を自社の食堂で利用することで、収益増加の取り組みを実施している。

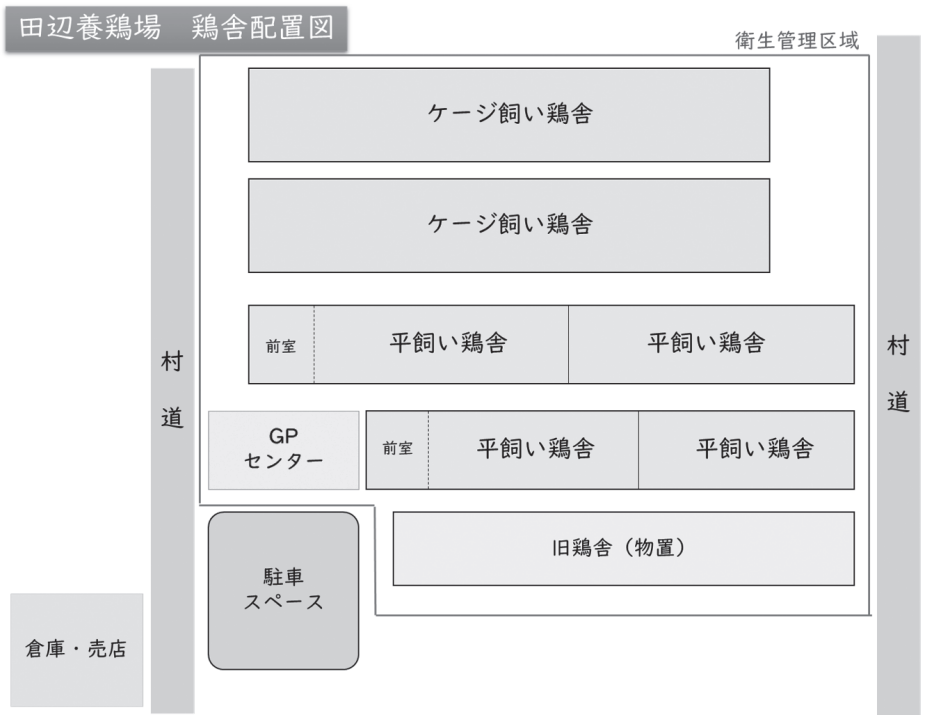
【高品質化】

山梨県で設立した「やまなしアニマルウエルフェア認証」で星３つの認証を受けており、その基準に準じた飼養により、鶏へのストレスを軽減するよう心がけている。またNON

（写真２）鶏舎外観

（写真３）平飼い放牧卵

（図１）鶏舎配置図



－GMOの飼料、富士山の伏流水を与える事により、高付加価値化の取り組みを実施している。

【環境保全の取り組み】

鶏ふんは、地域養鶏場との共同堆肥場（忍野村）で堆肥処理され、地域特産のスイートコーン等を栽培する地元の耕種農家に還元している。

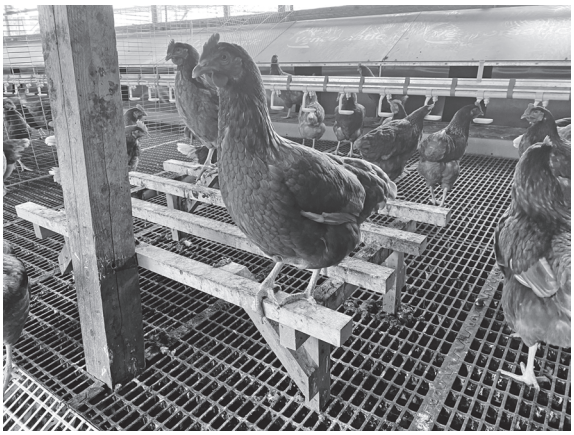
地域に対する貢献

【地域ブランドの創生】

忍野村は富士山の伏流水が湧水とする、忍野八海に代表される水に恵まれた村であり、氏は豊富な自然、おいしい水、美しい富士山こそがブランド力であると考えている。このブランドに、こだわりの飼料とアニマルウエルフェアの考え方を取り入れた、鶏にとって快適な飼育環境を組み合わせることで、さらなるブランド価値を構築することを目指している。

堆肥は前述の通り、地域からの苦情等もなく、円満に処理を行っている。一方で平飼い鶏舎の敷料として戻し堆肥を使用しているが、鶏ふんの高温処理とそこに含まれる放線菌が臭気を抑制していると考えている。

忍野村は財政的には豊かだが、限定的な財源に依存している状態であり、独自の財源を村としても創生したいと考えている。本経営の卵はふるさと納税の返礼品として採用され、「忍野の卵」として扱われており、村の



（写真４）鶏舎内の様子

（写真５）放餌の様子

（写真６）たまご食堂外観

返礼品ランキング２位となっている。氏は、自身の経営のみならず、忍野村の発展にも重きを置いており、村の伸びしろは観光事業と地域物産にあると考えていることから、ふるさと納税にも今後さらに注力していきたいと考えている。

【地域雇用・食育等への貢献】

本経営は６次産業化を進めるにあたり、地域労働力を積極的に活用し、生産から販売まで本経営における幅広い分野で活躍している。

また、氏自身がスポーツの世界に身を置いていた経験から、食の重要性を強く認識している。そのため、地域の方々に対しても食の重要性を考える場を提供したいと考え、地元のサッカー指導者として活動すると共に、「たまご食堂」で子供から大人まで参加する料理教室を開催している。また、年に３回、東京からシェフを招聘して「Coccoマルシェ」を開催し、カルボナーラやプリンなど、養鶏場の卵をふんだんに使った料理の試食を通じ、消費者に食の安全・安心や食の大切さについて考える場を提供している。

【地域農業及び経済への貢献】

地元耕種農家に対し別経営と合同で製造している堆肥を提供し持続可能な地域農業の確立に努めている。

また、地域企業から国産飼料及びエコフィードの供給及び加工について協力をいただき、共存共栄の原則で良好な関係を築き、地域経済に貢献している。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

氏の母親をはじめとして、従業員の半数が女性であり、ワークライフバランスを優先に考え、フレキシブルな勤務時間の提案等を行い、女性にとって働きやすい環境づくりにも配慮している。

このことが長期雇用、離職率の低減につながっていると考えている。

家族に対してもおよそ時給2,000円を目安に給料を支払い、シフト制にすることで業務の偏りを避けるようにしている。また、従業員同士の交流を目的として、有志で定期的に懇親会(仕事後の飲み会など)を開催している。

将来の方向性

現経営者である竜太氏が就農してから６年が経過した。当初は多くの課題に直面していたが、「持続可能性」をキーワードに経営を大きく変革し、地元に愛される農場へと成長した。今後の経営計画として、以下の４つの柱を中心に、地域に根差した優良経営を目指す。

（写真７）たまご食堂を訪れるお客さん

（写真８）たまご食堂で提供される食事

【アニマルウエルフェアを始めとする「持続可能性」への配慮】

氏の農場では、アニマルウエルフェアを重視し、鶏たちがストレスなく健康に過ごせる環境を整えている。これにより、消費者に対して「誰にでも見せられる農場」を実現し、透明性の高い経営を行っている。今後も持続可能な農業を追求し、環境負荷を最小限に抑えた生産方法を導入していく。

【卵の持つポテンシャルを活かしたさらなる６次化への試み】

農場で生産される卵の品質を最大限に活かし、加工品や新商品の開発に力を入れている。これにより、付加価値の高い製品を提供し、消費者の多様なニーズに応えることを目指し、農場の収益を向上させる取り組みを進めている。

【志を同じくする平飼い養鶏への普及・支援活動】

平飼い養鶏の普及と支援活動にも積極的に取り組んでいる。氏は、自身の経験を活かし、他の農家と協力して平飼い養鶏の技術や知識を共有し、地域全体の農業の質を向上させることを目指している。これにより、持続可能な農業の普及と地域の農業コミュニティの発展に貢献している。

【忍野村の発展に貢献できる地域振興活動】

地域社会との連携を強化し、忍野村の発展に寄与する活動を展開している。地元のイベントや教育プログラムに参加し、農業の魅力を発信することで、地域の活性化を図っている。また、地元の特産品を活かした商品開発や観光資源としての農場の活用など、地域経済の発展にも寄与する取り組みを進めている。

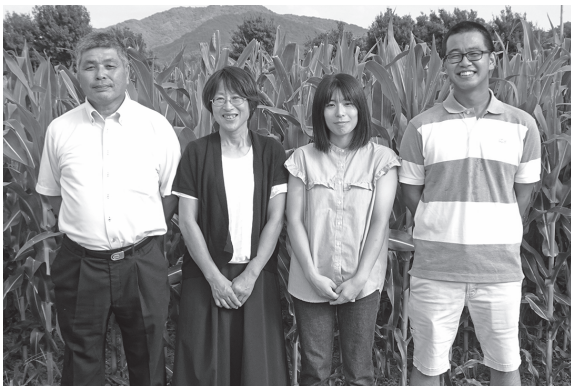
これらの取り組みを通じて、氏の農場は地域に根差した優良経営を実現し、持続可能な未来を築いていく。

自給飼料を軸に地域とともに、家族でやっていく

平野　耕平・博子（酪農経営・岡山県笠岡市）

地域の概況

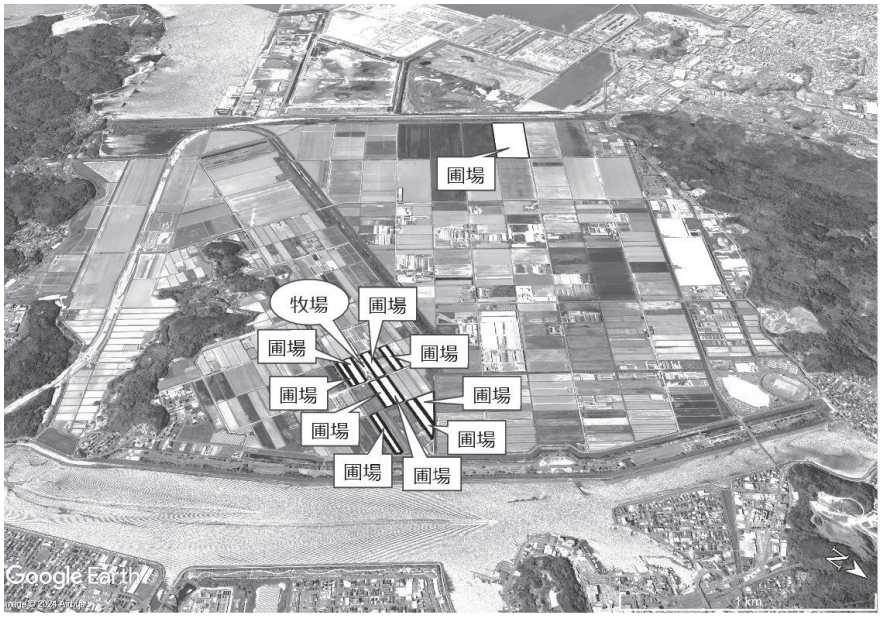
本牧場が所在する笠岡湾干拓地は、昭和41年に国営干拓事業により農用地造成が開始され、平成２年に完全竣工し、総面積は1,811ha、うち農業用地は1,191haである。干拓地は、県内屈指の畜産団地で、肉用牛７戸4,787頭、酪農10戸5,389頭の経営が行われており、県内における頭数割合は肉用牛14％、乳用牛32％である。



（写真１）家族写真（左から耕平さん、博子さん、政子さん、友博さん）

経営・活動の推移

本牧場は干拓地に移転する以前は、里庄町の自宅周辺でつなぎ牛舎による酪農経営を行っていた。昭和56年に、笠岡湾干拓地で飼料作物の試験栽培の募集があり、10戸の畜産農家が20haの農地で飼料生産を実施した。その後、平成２年に農地を取得、平成15年に牛舎を整



（写真２）平野牧場と飼料生産地

（表１）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積（実面積）	経営・活動の内容
昭和30年	酪農	経産牛　２頭（つなぎ）	－	経営主の父が平野家の婿となり、実家の牛を里庄町の平野家に持ってきて飼養開始
昭和53年	酪農	経産牛　20頭（つなぎ）	0.5ha（里庄町）	経営主が工業高校を卒業。労働力は両親
昭和55年	酪農	経産牛　25頭（つなぎ）	3.5ha（70筆）（里庄町）	経営主が中国四国酪農大学校を卒業し、後継者として就農。労働力は現経営主、両親
昭和56年～	酪農	経産牛　25～40頭（つなぎ）	２→15ha（笠岡市） 3.5ha→1.5ha（里庄町） タイトベーラによる乾草、スタックサイロによるデントコーン等の試験栽培	笠岡湾干拓地で飼料作物の試験栽培を開始。発電機の修理等のアルバイトや食用小麦生産の収入により、飼料生産用の機械を徐々に購入
昭和63年	酪農	経産牛　40頭（つなぎ）	15ha（笠岡市） 1.5ha（里庄町）	経営主と妻が結婚
平成２年	酪農	〃	〃	笠岡湾干拓地の農地を２ha借入金で購入
平成５年	酪農	〃	〃	妻が本格的に就農。労働力は両親、経営主夫婦
平成15年	酪農	経産牛　41頭（以下、フリーバーン）	〃	笠岡湾干拓地にフリーバーン牛舎を整備し、里庄町から拠点を移転
平成18年	酪農	経産牛　56頭	15～20ha（笠岡市） 1.5ha（里庄町）	現経営主が経営主になる
平成18年～20年	酪農	経産牛　56～64頭	〃	乳房炎対策及び臭気対策のため、微生物資材や撹拌方法等を試行錯誤し、コンポストバーン方式を導入
平成25年	酪農	経産牛　60頭	〃	大学で酪農を専攻した長女が就農
平成27年	酪農	経産牛　59頭	〃	長女と娘婿が結婚し、娘婿が平野牧場で勤務開始
平成28年	酪農	経産牛　58頭	〃	干拓ロール粗飼料生産供給利用組合で、粗飼料の共同生産・利用を開始。 畜産クラスター事業を活用して、飼料給与機械や飼料生産機械を導入し、飼料生産面積の拡大や増頭に取り組む
令和３年	酪農	経産牛　64頭	20ha（笠岡市） 1.5ha（里庄町）	ICT化等機械装置等導入事業を活用し、ヘリングボーンパーラーを８頭Ｓ（ミルカー８台、スイング式）から８頭Wに変更。 園芸農家（キャベツ、タマネギ等）の連作障害回避のため、牛舎周辺の園芸農家の農地で、飼料生産を開始
令和５年	酪農	経産牛　69頭	22ha（笠岡市）	園芸農家と農地のローテーションを開始

備し牧場を移転した。牛舎整備に当たっては、取得した農地が園芸用農地であり、周辺の園芸農家50戸の同意が必要であった。困難な状況ではあったが、飼料生産と併せ、周辺の園芸農家の農地管理や堆肥供給に協力していたことから、園芸農家から後押しがあり、無事牛舎整備に至った。以降、自家育成で増頭し、移転時の経産牛41頭から、計画の60頭規模に平成20年に達した。令和３年には園芸農家の農地での飼料生産、令和５年には園芸農家と農地のローテーションを開始した。

経営・技術の特色等

本経営は、資源循環型の粗飼料生産および自家育成、ならびに周囲の園芸農家等と協力関係の継続による、「経営面・地域面において持続性のある家族経営」を目標にしている。この目標のもと、家族で管理できる飼養規模

（表２）経営実績（令和５年）

経営概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）	家族・構成員	3.9人
		雇用・従業員	0.1人
	経産牛平均飼養頭数		69.3頭
	飼料生産実面積		2,148a
	年間総搾乳量		690,657kg
	年間総販売乳量		690,657kg
	年間子牛販売頭数		32頭
	年間育成牛販売頭数		5頭
	年間経産牛販売頭数		0頭
収益性	所得率		14.2%
	経産牛１頭当たり当期生産費用		1,539,448円
生産性	牛乳生産	経産牛１頭当たり年間産乳量	9,967kg
		平均分娩間隔	13.1ヵ月
		受胎に要した種付回数	2.0回
		平均産次数（期首）	2.3産
		平均産次数（期末）	2.5産
		牛乳１kg当たり平均価格	141.1円
		牛乳１kg当たり生産費用	154.5円
		乳脂率	3.85%
		乳蛋白質率	3.40%
		無脂乳固形分率	8.85%
		体細胞数	19.3万個/ml
		借入地依存率	95.2%
		飼料TDN自給率（販売分除く）	24.6%
		粗飼料TDN自給率（販売分除く）	81.7%
		乳飼比（育成・その他含む）	47.8%

で、地域と協力して、「自給飼料生産」、「自給飼料を用いた自家育成」、「カウコンフォート」により、低コスト・高品質生産を行っている。

【飼料生産】

実面積21.5haの農地で延べ39.0haの飼料生産を行っている。自給飼料で代替できない育成期のチモシーおよびタンパク源としてのアルファルファを除く粗飼料の自給率はほぼ100％を達成しており、粗飼料TDN自給率は81.7％で、販売分を含めると84.3％となっている。

【畜産農家との連携】

中小規模の畜産農家と設立した干拓ロール粗飼料生産供給利用組合で、飼料生産における協力や生産資材の共同購入に取り組んでいる。飼料生産を行っていない構成農家には余剰分を原価で融通している。大規模畜産農家からは、飼料生産で不足する堆肥の供給を受けており、資源循環に貢献している。

【園芸農家との連携】

園芸農家に堆肥の供給や散布、大型トラクターによる深耕作業で、野菜の収量増加に貢献している。一部、園芸農家では、市場価格より高価格での野菜販売に繋げている。また、

（表３）飼料生産面積の推移（ha）

	令和３年		令和４年		令和５年	
	①	②	①	②	①	②
カブト東町169 R５まで借地	ソルゴー 1.06	イタリアン 1.06	ソルゴー 1.06	イタリアン 1.06	ソルゴー 1.06	イタリアン 1.06
カブト東町176　借地	デントコーン 1.16	エンバク 1.16	デントコーン 1.16	デントコーン 1.16	デントコーン 1.16	デントコーン 1.16
カブト東町177　借地	ソルゴー 0.88	イタリアン 0.88	ソルゴー 0.88	イタリアン 0.88	ソルゴー 0.88	イタリアン 0.88
カブト東町183　借地	デントコーン 0.98	エンバク 0.98	デントコーン 0.98	デントコーン 0.98	デントコーン 0.98	デントコーン 0.98
カブト東町185　借地	デントコーン 0.98	エンバク 0.98	デントコーン 0.98	デントコーン 0.98	デントコーン 0.98	デントコーン 0.98
カブト東町189　自作地	デントコーン 0.74	エンバク 0.74	デントコーン 0.74	イタリアン 0.74	デントコーン 0.74	イタリアン 0.74
カブト東町190　自作地	デントコーン 0.97	エンバク 0.97	デントコーン 0.97	イタリアン 0.97	デントコーン 0.97	イタリアン 0.97
カブト東町192　自作地	デントコーン 0.98	エンバク 0.98	デントコーン 0.98	イタリアン 0.98	デントコーン 0.98	園芸農家
カブト東町195　借地	デントコーン 0.98	エンバク 0.98	デントコーン 0.98	イタリアン 0.98	デントコーン 0.98	園芸農家
カブト西町38　借地			ソルゴー 10.24	イタリアン 10.24	ソルゴー 10.24	イタリアン
※ロール組合のうち本経営分	ソルゴー 10.00	イタリアン 10.00				
園芸農家の土地	ソルゴー 1.00		デントコーン 1.00 ソルゴー 0.50	イタリアン 0.50	デントコーン 1.00 デントコーン 1.00 ソルゴー 0.50	イタリアン 0.50
計	19.74	18.74	20.48	19.48	21.48	17.52
	38.48		39.96		39.01	
借地 借地割合	17.04 86%		17.79 90%		18.79 95%	

（写真３）デントコーン作付地

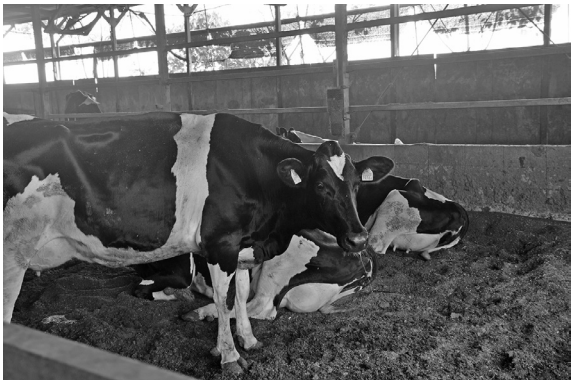
園芸農家の連作障害回避や地力回復のため、園芸農家と農地のローテーションを行っている。

【自給飼料を用いた自家育成】

「育成牛に粗飼料を飽食させれば、搾乳用のTMRの残飼も利用できる」との考えのもと、NOSAIの代謝プロファイルテストでチェックを入れながら、育成牛に飽食できる粗飼料と搾乳牛の残飼を給与している。このため、TMR調製は、安全率を高く設定し、搾乳牛に必要な量の120％としている。分娩前20日までの育成牛と乾乳牛は粗飼料自給率は100％である。

【コンポストバーン】

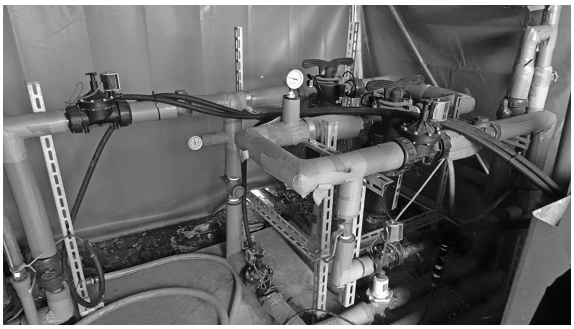
乳房炎対策や臭気対策のため、コンポストバーン方式を導入している。納豆菌培養液とVSバイオ（微生物衛生資材）を朝夕交互に散布し、毎日朝夕２回、木工会社から無償で提供されているオガクズを補給して撹拌している。こうすることで、発酵熱で乳房炎原因菌が減少するとともに、微生物で乳房炎原因菌の増殖を抑制、ふん尿の分解、良質な発酵を促すことができている。



（写真４）コンポストバーン

【水浄化システム】

農業用水を牛の飲用や洗浄に利用しており、水質浄化に取り組んでいる。企業との協力で水耕栽培用の浄化システムを応用し、0.03μmのフィルターで浄化している。加えて、白金触媒による水質浄化を行っており、飲水時の快適性や生乳の品質を高めている。



（写真５）水浄化システム

【牛舎冷房用ミスト装置】

暑熱対策のためミスト装置を設置しており、床が濡れないように10μmの細かなミストを噴霧している。このサイズのミストは、農業用水を利用する場合、通常はすぐに装置が詰まるが、本牧場の0.03μmのフィルターでの浄化により詰まることなく利用できている。

（写真６）ミスト装置

【電気・機械分野からの応用】

工業高校出身の経営主は、電気・機械分野の専門的な知識を有しており、企業との協力による水浄化システムの導入に繋がっている。また、精通しているアマチュア無線の知識を活用し、分娩アラームや牛舎の監視カメラは、普及以前に自作した。先進的機械以外については、安い中古品を利用し、点検・修理を自ら行い低コスト化に努めている。

【繁殖管理】

令和２年からPAGs検査を実施している。エコー前にPAGs検査を実施し、早期に不受胎牛を発見している。PAGs検査の実施開始後、分娩間隔は徐々に短縮し令和５年は400日である。

【省力化技術】

コンポストバーンにより牛舎内で堆肥化でき、ふん乾ハウスに入れる前の堆肥を持ち帰る園芸農家もあり、堆肥運搬時間を削減している。これにより、ふん乾ハウスでの堆肥処理量の削減にも繋がっている。令和３年には、ヘリングボーンパーラーを８頭Ｓ（ミルカー８台、スイング式）から８頭Wに変更し、搾乳時間を削減している。

【環境保全の取り組み】

コンポストバーンで匂いのない良質な堆肥を生産している。TMRには微生物を含むイーストカルチャーやビタコーゲンを添加し、ふんの匂いを減少するともに、堆肥の発酵を促進している。

（写真７）ふん乾ハウス処理後の堆肥

地域に対する貢献

【地域のブランド化への貢献】

洋菓子製造業者が本牧場の生乳を使用して製造したジェラートが、ふるさと納税に採用されており、地域の知名度向上等に貢献している。

コンポストバーンで使用しているオガクズの供給元の木工会社が、本牧場の堆肥を利用し野菜を生産している。この野菜は木工会社が運営するカフェで使用されている。また、カフェでは、本牧場の出荷先の乳業メーカーで生産される牛乳を使用しており、産業間での資源循環を実現している。

【地域の食育等への貢献】

妻の博子氏は、農業士を20年務めておりその一環として、農業高校の現場体験を受け入れている。また、ボランティアで、図書館で酪農や牛乳の紹介を行っている。おかやま酪農業協同組合の女性部では委員長を務めたこともあり、女性部の活動では、消費拡大のため、料理教室やイベントでの乳製品の紹介等、企画段階から積極的に取り組んできた。

娘婿は、他の酪農家とともに小学校で牛のふれ合い体験に参加している。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

【女性の活躍】

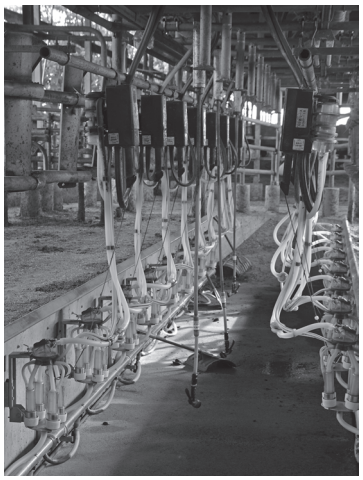
経営主夫婦と後継者夫婦の４人全員が作業全般を担っている。自給飼料生産での大型機械は、女性を含め、全員が操作できるよう経験を積んでいる。支援組織との検討会は、家族全員が参加しており、簿記・会計は家族全員が目を通すようにしており、男女関係なく酪農経営全般に関わっている。

長女は、大学で繁殖分野のゼミに所属していたこともあり人工授精師である。現在は、子育てをしながらの勤務であるが、女性部の活動には積極的に参加しており、仲間作りや消費拡大に取り組んでいる。

【働きやすい職場づくりの取り組み】

妻と長女は交代で休みを取っており、通常は３人体制である。子供の行事があるときは、酪農ヘルパーを利用し長女・娘婿が揃って休日を取り、牧場経営以外においても、家族の繋がりを大切にしている。

牧場が里庄町の住居と離れていることもあり、着替えができる部屋や個室のトイレを設置しており、労働環境を整備している。作業面では、パーラーのピットの高さを低くしており、女性が搾乳し易いよう工夫している。



（写真８）パーラー８頭W

将来の方向性

【次世代への継承】

当初、子を後継者としては考えておらず、65才で借金の返済を終えて、酪農を引退するつもりでいたが、長女が高校生のときに、「経営を継いで酪農をしたい」と伝えられ、酪農系の大学への進学を後押しした。その後、長女が大学を卒業し牧場勤務を開始したが、併せて、大学で知り合った人が婿に来た。

現在は、人工授精、精液の選別、飼料設計、TMR調製は娘婿が担っている。経営主は、本人がやりたいことの邪魔をせず尊重し、細かいことで意見を押し付けないようにしながら、乳量や頭数が大きく減少したときには原因を把握するよう促し、アドバイスするようにしている。

飼料生産については、まだ、経営主が作業の中心となっているが、徐々に周辺の園芸農家との付き合いも含めて、継承していく予定である。経営移譲については、法人化を含めて今年度中に実施予定である。

【今後の経営計画】

今後も地域と連携しながら自給飼料生産を軸とした経営を行っていく。今後は、タンパク源としてマメ科牧草のアルファルファ生産に取り組みたいと考えている。十分な灌漑を行うことで収量を確保し、他の飼料作物とローテーションすることで連作障害を回避する考えである。将来は、現在の飼料作物、園芸農家の野菜、アルファルファ、これらのローテーションで、自給飼料によるタンパク源の確保、連作障害回避による収量増加により更なる飼料費の削減に繋げる計画である。

将来、後継者２人が経営の中心となり、家族労働力の減少が見込まれるときには、搾乳ロボットの導入を検討し、資源循環型酪農が実施できる範囲での規模拡大を選択肢の一つとしている。

外的要因に負けない肉用鶏を起点とした経営

―地鶏・循環・６次化で地域をリード―

有限会社長門アグリスト（肉用鶏経営・山口県長門市）

地域の概況

（有）長門アグリスト（以下、「自社」という）が所在する山口県長門市は、県の北西部に位置する海と山に囲まれた自然豊かな地域で、昔から漁業や水産加工が盛んであり、それらの副産物である魚糟を餌に養鶏業が発展した。長門市の肉用鶏生産羽数は山口県の74.7％を占め、令和３年度長門市の農業産出額70億4,000万円のうち約50％を占める基幹産業となっている。

経営・活動の推移

【規模拡大から差別化経営へ】

自社（前身：末永養鶏場）は、日本で数少ない専門農協である深川養鶏農業協同組合の組合員として、昭和41年という早い段階での農業法人化した会社である。高度成長期には事業規模拡大を目指し、年間出荷羽数が県内最多の約100万羽を実現した。

平成24年から空き鶏舎を一部活用するなど、山口県が開発した地鶏生産に取り組み、ブロイラー事業を半減させ、市場価格に翻弄される経営から、品質・差別化を重視する経営へ転換した。また、肉用鶏は全期間無薬飼料を給与し、それを実現する独自の生産環境バイオセキュリティのコントロールを可能にすることで、差別化経営への道を決定づけた。

（写真１）中央が経営主（代表取締役）の末永裕治さん、左隣が後継者の将秀さん

【経営の多角化】

地鶏生産に取り組み始めたことを背景に、長州黒かしわ専用飼料の製造、素びな生産および堆肥製造を始めた。自社の堆肥を活用した山口県初のサトウキビ栽培をきっかけに加工への取り組みが始まり、６次産業化を取り入れた複合経営へとシフトした。併せて、企業間での業務補完を目的に地域の関係者と連携したネットワーク㈱63Dnetを設立し展開してきた。

（表１）経営の推移

年次	作目構成	飼養羽数	経営・活動の内容
昭和41年	肉用鶏	ブロイラー　43,000羽	有限会社末永養鶏場
昭和58年	肉用鶏	ブロイラー　88,000羽	油谷向津具農場（開放５棟）生産開始
平成10年	肉用鶏	ブロイラー　88,000羽	末永裕治　代表取締役就任
平成11年	肉用鶏	ブロイラー　103,000羽	三隅上ゲ農場（２棟）生産開始
平成12年	肉用鶏	ブロイラー　193,000羽	美祢持池農場（15棟）生産開始
平成20年	肉用鶏	ブロイラー　193,000羽	農業経営改善計画認定
平成22年	肉用鶏	ブロイラー　193,000羽	有限会社長門アグリストに社名変更 肥料製造販売事業開始・長州黒かしわ振興協議会設立
平成23年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　193,000羽	サトウキビ栽培開始・食品加工製造開始 長州黒かしわ専用飼料製造販売開始
平成24年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　103,000羽 地鶏　3,000羽	６次産業化総合計画認定 美祢持池農場（5,200m^2）生産移譲 黒かしわ日置生産農場（450m^2）生産開始
平成25年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　103,000羽 地鶏　5,000羽	長州黒かしわ生産農場ファンファーム 飼養規模1,800羽　200m^{2}生産開始
平成27年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　103,000羽 地鶏　5,000羽	「長門の恵」堆肥センター新設200m^2 株式会社63Dnet設立　創業促進補助採択 地元マルシェ「LaLaフラン」営業開始
平成29年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　103,000羽 地鶏　5,000羽	株式会社63Dnet　道の駅センザキッチン 海辺のパン屋LaLaベーカリー営業開始
令和元年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　103,000羽 地鶏　5,000羽	６次産業化支援施設「ながとラボ」事業継承 フリーズドライ・菓子製造施設整備
令和３年	肉用鶏 サトウキビ	ブロイラー　103,000羽 地鶏　5,000羽 黒かしわ素びな　4,000羽	後継者が取締役就任 長州黒かしわ育雛殿台農場生産開始 農場監視システム導入

（表２）経営実績（令和４年度）

経営概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）	家族・構成員	1.6人
		雇用・従業員	2.1人
	肉用鶏平均飼養羽数		69,401羽
	肉用鶏年間餌付羽数		533,600羽
	肉用鶏年間出荷羽数		531,497羽
	うち、ブロイラー		517,576羽
	うち、長州黒かしわ		13,921羽
収益性	所得率		5.6%
	肉用鶏100羽当たり生産費用		51,260円
生産性	出荷回転率		5.3回
	うち、ブロイラー		5.4回
	うち、長州黒かしわ		3.3回
	平均飼育日数		47.5日
	平均休室日数		21.0日
	平均出荷日齢		47.5日
	うち、ブロイラー		46.3日
	うち、長州黒かしわ		91.0日

生産性	肉用鶏出荷100羽当たり出荷時体重	308.6kg
	うち、ブロイラー	308.5kg
	うち、長州黒かしわ	313.9kg
	育成率	99.6%
	うち、ブロイラー	99.6%
	うち、長州黒かしわ	99.4%
	飼料要求率	1.67
	うち、ブロイラー	1.64
	うち、長州黒かしわ	2.80
	生体１kg当たり販売価格	177.3円
	うち、ブロイラー	172.0円
	うち、長州黒かしわ	370.0円
	鶏舎１m^{2}当たり年間出荷羽数	85.3羽
	うち、ブロイラー	91.8羽
	うち、長州黒かしわ	23.4羽
	肉用鶏出荷100羽当たり投下労働時間	1.42時間
	うち、ブロイラー	1.28時間
	うち、長州黒かしわ	6.68時間

経営・技術の特色等

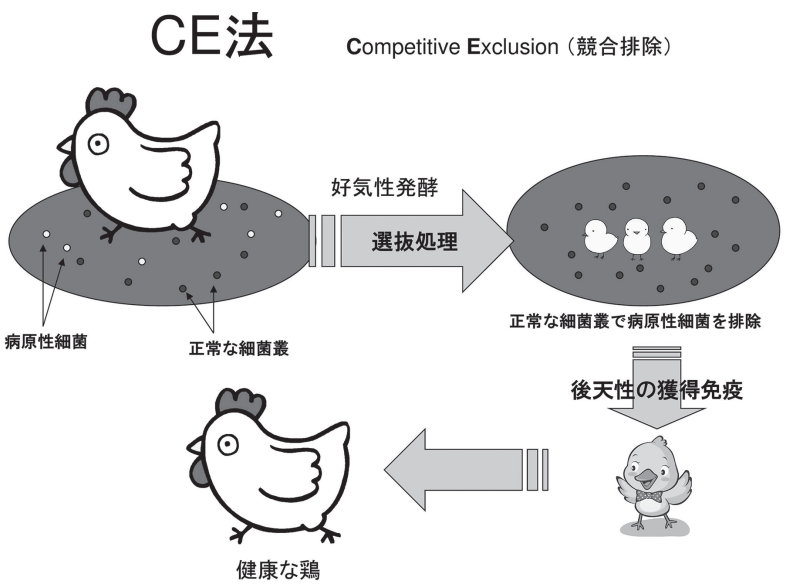
【独自の生産技術で差別化を実現】

自社では、平成８年から抗生物質・合成抗菌剤を使用しない無薬飼料で飼育を始めた。この取り組みは「食の安心安全」が取り上げられる時代の波に後押しされた形で、深川養鶏農業協同組合20戸全体に普及し、平成９年から全国に先駆けて無薬飼料により飼育した安心安全な鶏肉「長州どり」の生産につながった。当時の全国版の新聞にも取り上げられるほど注目され大きな転換となった。

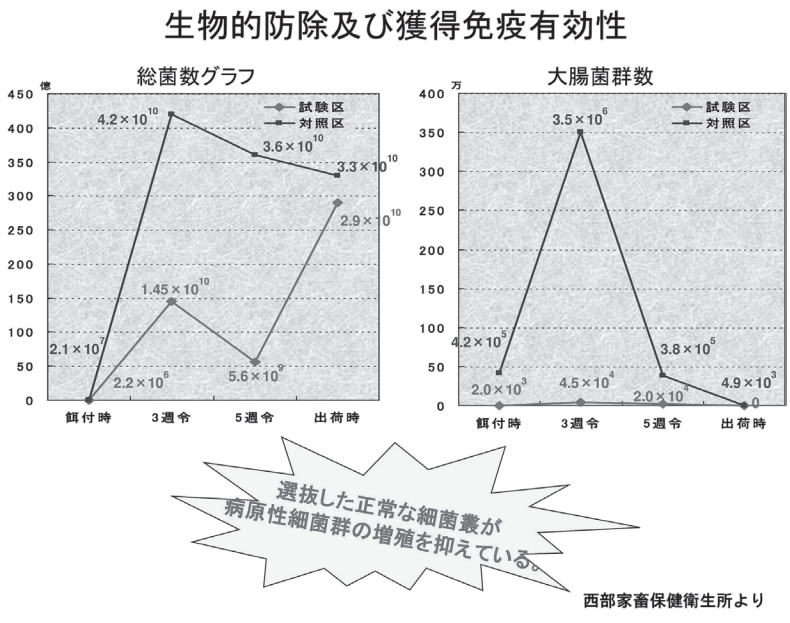
一方、自社におけるブロイラー事業の規模拡大は、徹底的な水洗・消毒に伴う生産コスト増加、回転数の増加につながり、空舎期間の確保や過重労働、鶏ふん処理の行き詰まりの問題が出てきた。

そこで、平成18年から鶏ふんの堆積飼育の

（図１）競合排除（CE）法イメージ



（図２）CE法と慣行法による大腸菌群等の比較



研究をはじめ、放線菌を使った強制好気性発酵によるバイオコントロールに成功し、鶏ふん処理費用、薬品費および光熱費の削減など出荷重量ベースで７円/kg（当時の70万羽出荷規模で1,500万円）コスト削減を可能とした。

この手法は古くから競合排除（CE）法と呼ばれ、最近では世界的にも注目され始めているマイクロバイオータ（微生物叢）による免疫獲得により疾病を抑制する方法である。

なお、無薬飼料での飼育から約30年、堆積飼育法を取り入れてから約15年経過しているが、全国有薬飼料飼育の成績と比較しても変わらない安定した成績を維持している。

地域に対する貢献

【地域ブランド創出】

「長州黒かしわ」は、山口県が約15年の歳月をかけ開発した天然記念物「黒柏鶏」を基に交配された鶏である。

ブロイラー生産技術を生かした飼育方法や専用飼料の配合等は約10年をかけ確立した。黒かしわ専用飼料を製造するとともに、孵化後28日間の育雛も手掛け、地鶏生産の一貫管理を実施して鶏肉品質の安定を担保した。

令和３年にはムネ肉に「イミダゾールジペプチド」が多く含まれる機能性表示食品として登録され、さらに令和６年度には「長州黒かしわ」がGI（地理的表示）登録された。

【耕畜連携の展開】

「長州黒かしわ専用飼料」は、これまでさまざまな試行錯誤を行ったものの、当初は栄養バランスが崩れ鶏同士による“つつき”が発生して死亡鶏が増える状況が連続して困難を極めた。そこで、栄養バランスの調整を図りつつ、生産コストの低減を両立させるため、地域で栽培される飼料用米と規格外等の食用に向かない麦・大豆を購入し配合率の検討を行った。その結果、令和３年度地域自給飼料率が約60％を実現するとともに、麦・大豆栽培生産者の収益の一助となった。

しかし、令和４年度以降は、天候等による麦、大豆の不作に伴い飼料原料の供給が不安定となり自給率が下がった。この課題に対応するため、飼料作物栽培に取り組むことを計画したところ、地元農業法人が水田利用の困

（図３）長州黒かしわのPR資料

（表３）配合飼料表　　単位：％

年	配合飼料等	自給飼料					自給飼料計
		籾米	裸麦	大豆	米ぬか	ふすま	
H24	70.0	20.0			10.0		30.0
H26	69.0	10.3			10.3	10.3	31.0
H27	52.7	26.3	10.5		10.5		47.3
R３	39.6	23.5	25.1	7.9	3.9		60.4
R５	46.9	27.9	14.9	4.7	5.6		53.1

難な農地で作目を決めかねている現状を知り、農業法人へ栽培を働きかけ協力を受けることとなり、令和６年に試験栽培を開始した。また、自社の遊休農地でも大豆栽培を開始し耕作放棄地の活用と飼料原料調達の両立を図り、飼料自給率70％を目指す。

【地域との連携・循環と環境保全】

飼料用作物栽培で必要な肥料は、堆積発酵させた有機肥料「長州の恵」などの利用を推奨している。なお、この有機肥料に含まれる放線菌が、土壌中の有機物を分解するため、柔らかな土壌となる他、植物の根腐れも起きにくい特徴がある。

また、堆積発酵させた鶏ふんは「長州どり」、「長州黒かしわ」を飼育する際の敷料として利用される。本手法による堆積発酵は強制的な発酵によりGHG（温室効果ガス）排出量の削減にもつながっている。さらに堆積発酵させる場合、出荷後の水洗時に排出される汚水を発酵に必要な水分として利用することで、農場からの汚水流出を抑える効果がある他、飼育期間中も好気性発酵が進むことにより鶏舎内の水分量も減少し、悪臭発生も抑制できることから、農場周辺地域への環境負荷軽減に貢献している。

【地域ブランド化の貢献】

地域連携で設立した㈱63Dnetが運営する６次産業化支援施設「ながとラボ」では、施設開放や専門家による開発支援を実施している。また、小ロットでの製造が可能であることから、OEM（委託製造）依頼も増加している。

【地域に根差した商品開発】

山口県のソウルフード「チキンチキンごぼう」、「名物瓦そば」などをフリーズドライした惣菜菓子という新しい分類の商品や、「地産備蓄」を提案するレトルト食品「まさかの長門メシ」を開発した。いずれも地域性差別化ができる商品として、インバウンドのお土産や災害時の非常食としても貢献できるコンセプトである。主原料に地域食材を使用することが多く、生産者の所得向上につながっている。

（写真２）広報担当と開発した商品

（写真３）地元農業高校との産学連携協定

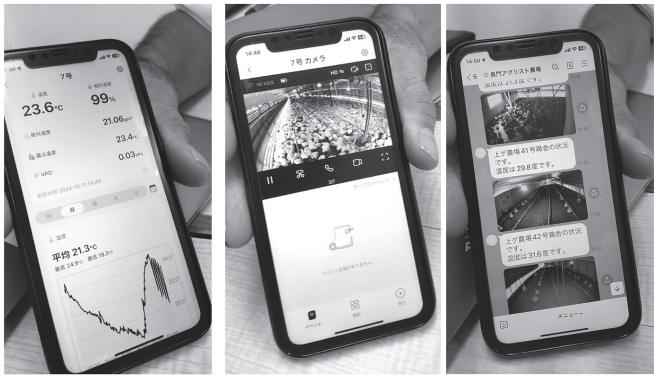
【地元小中高校生との連携】

毎年、地元小中高校のインターンシップや授業を積極的に受け入れている。特に地元農業高校とは令和４年度から産学連携協定を締結し、加工品の開発・技術の指導助言を定期開催している。また授業の際には６次産業化や食料自給率、命を守る食の維持や農業の魅力と将来性について話すことを心掛け、地域の就農へつながるように種まきをしている。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

自社の社員のうち女性の比率は約43％となっている。養鶏事業では機械や体力を使う作業が多いため、トラクターやフォークリフトなどの農業機械の操作方法を講習や研修等に

（写真４）フォークリフトに乗る女性社員



（写真５）スマホで確認できる鶏舎内環境

より女性でも容易に扱いやすい環境を整えるとともに、省力化に資する設備等の導入を進めている。

また、㈱63Dnetは社員のうち女性の比率は78％となっており、平成30年に就業規則を作成し、働きやすい環境を整備している。ワーク・ライフ・バランスを考慮し、シフトも社員が働きやすい時間設定にも取り組んだ。これまでに産休・育休を取得し復職した社員が３名おり、環境が整ってきている。今後は女性管理職の登用を期待して女性が活躍できる組織構成にしたい。

将来の方向性

【次世代への継承】

平成30年に長男が自社に入社し養鶏事業に携わっており、令和２年には父である取締役会長が退任したことを機に長男を取締役に就任させた。現在は飼育技術のDX化に取り組むことやマイクロバイオータ（微生物叢）の研究に力を入れさせている。

また、令和元年には営業担当を採用し、直接販売も開始した。令和５年度からはIT導入補助金を活用し、長州黒かしわ専門ECサイトを立ち上げ、生産者と消費者がつながる販売方法も取り入れている。若い担い手が生産と販売を二人三脚で取り組める経営組織を目指すとともに、若手の雇用も積極的に受け入れる求人活動や高校生のインターン受け入れ、体験授業の開催などを通じて種をまく活動にも力を入れていきたい。

【今後の経営計画】

長門市の畜産振興計画である畜産団地構想が令和６年度から具体的に動き始め、この計画に寄り添った立ち位置で、鶏舎の建設や改修に安価な建設方法を取り入れ、最新の飼育技術を集約したハードとDXを活用したモニタリング方法や制御方法を融合した施設の立地を大手通信会社と連携して開発を進めていく。また、太陽光を活用した自然エネルギーによる自家消費型発電などGXも積極的に取り入れていきたい。

さらに、地域オリジナル有機肥料に関して自社の持つ発酵技術を長門市に提案していき、この堆肥を使用した地域農産物をブランディングするため、㈱63Dnetが一元的に青果を販売・加工を行うとともに、物流を統合するためハブ的な拠点として「ながとラボ」を利用することにより、地域生産者の所得向上に貢献していきたい。

まずは養鶏がオシャレにタブレットで管理できるよう、スマートなイメージを作り上げ、若い担い手が養鶏をしたいと思ってくれるビジネスへと進化させ、直接消費者とつなぐ販売をセットにした農業モデルに仕上げていきたい。

四国１位から全国１位肉用鶏に！

―誰でもできる飼育・管理をめざして―

株式会社ヤマニファーム（肉用鶏経営・高知県大月町）

地域の概況

株式会社ヤマニファームは、高知県南西部の幡多地域の大月町に位置している。大月町は、年間を通じて温暖で多雨、風が強く変化に富んだ気候が特徴である。海岸部は「足摺宇和海国立公園」に指定されている。農業は、稲作のほか、葉タバコ栽培や施設園芸（なす）が盛んである。畜産農家は５戸あり、酪農が１戸、肉用牛が２戸、養豚が１戸、肉用鶏１戸である。

経営・活動の推移

【高知県に移住して挑戦】

～実家手伝いから独立就農～

大学中退後、平成10年に養鶏業を営む愛媛県の実家でブロイラー飼育管理、生鳥運搬および飼料運搬を開始した。しかし、平成11年に高知県大月町の養鶏場が経営中止することを知り、単身で大月町に移住した。平成12年にスーパーＬ資金の融資を受け、農場を借りて、飼育羽数１万羽規模でブロイラー経営を開始した。

【法人の設立】

～四国１位を目指して～

景気動向や原材料価格の変動、需要の増加に対応するため、スーパーＬ資金を活用して土地、建物、開放鶏舎、飼料運搬車、鶏ふんボイラーを取得した。その後、平成19年に実家の屋号を受け継ぎ、「株式会社ヤマニファーム」を設立した。さらに、スーパーＬ資金を活用して四国初のシステム鶏舎を導入した。平成26年にはオランダで開催された畜産展示会で最新のシステム畜舎を視察し、その飼育管理技術の高さに刺激を受けた。これをきっかけに、計画的にスーパーＬ資金や国の畜産クラスター事業を活用し、合計４回の規模拡大を行った。現在、木造鶏舎８棟、鉄骨鶏舎10棟の合計18棟を有し、常時飼育羽数は254千羽、年間出荷羽数は1,463千羽である。創業24年で、年間飼育羽数は四国第１位を達成した。

（写真１）従業員集合写真（後列中央：経営主の井上孝秀さん、右端：妻ののり子さん）

経営・技術の特徴等

【生産性の高い経営】

～だれでも高品質な肉用鶏を生産管理できるシステムづくり～

生産技術は、平均出荷日齢45.6日、出荷回

（表１）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養羽数	経営・活動の内容
平成10年	肉用鶏		大学中退後、愛媛県の実家でブロイラー飼育管理・生鳥運搬および飼料運搬開始
平成11年	肉用鶏		昭和51年から操業していた農場が高齢化で経営中止するのを機に、単身で高知県大月町へ移住
平成12年	肉用鶏	ブロイラー 20万羽	Ｌ資金を活用して、鶏舎修繕・改築後、借地にて１万羽飼育を開始 認定農業者に認定
平成13年	肉用鶏	ブロイラー 20万羽	高知西南豪雨の被害に遭う（農場進入路被害で３日間孤立状態となり、１週間給餌ができない状況に陥る）
平成16年	肉用鶏	ブロイラー 20万羽	Ｌ資金を活用して土地・建物を取得
平成17年	肉用鶏	ブロイラー 31万羽	Ｌ資金を活用して開放鶏舎 ３棟11万羽増 飼料運搬12t車導入（中古車）
平成19年	肉用鶏	ブロイラー 31万羽	株式会社ヤマニファーム設立 鶏ふんボイラー導入 ブロイラー管理作業員１名増 飼料運搬員１名増
平成20年	肉用鶏	ブロイラー 53.5万羽	Ｌ資金を活用して四国初となる新築システム鶏舎２棟22.5万羽増 ブロイラー管理作業員１名増
平成23年	肉用鶏	ブロイラー 88万羽	Ｌ資金を活用して３棟34.5万羽増 飼料運搬車12t導入 ブロイラー管理作業員１名増
平成24年	肉用鶏	ブロイラー 88万羽	８月台風11号の被害に遭う（約5,000羽死亡・新築１棟半壊・他２棟屋根損壊など）
平成26年	肉用鶏	ブロイラー 88万羽	オランダVIV畜産展示会・最新システム鶏舎視察　１棟5.5万羽７回転に刺激を受ける
平成27年	肉用鶏	ブロイラー 108.7万羽	年間６回転へ
平成28年	肉用鶏	ブロイラー 108.7万羽	ブロイラー作業員１名増 障害者雇用開始
令和２年	肉用鶏	ブロイラー 148.3万羽	クラスター事業を活用してシステム鶏舎３棟40.8万羽増 ロータリー攪拌式堆肥舎 袋詰め機　導入 飼料運搬車25t　導入 飼料ストック基地新築 鶏ふん堆肥を集落営農・町内耕種農家に配布
令和３年	肉用鶏	ブロイラー 148.3万羽	自社ブランド「よさこい尾鶏」商標登録
令和４年	肉用鶏 レモン	ブロイラー 148.3万羽	Ｌ資金を活用して葉タバコ耕作跡地6.8ha購入 飼料運搬車８t　導入
		レモン400本	レモン苗木400本植樹 障がい者２人目　雇用開始
令和５年	肉用鶏 レモン 河内晩柑	ブロイラー 148.3万羽 レモン1,100本 河内晩柑300本	レモン苗木700本植樹 河内晩柑苗木300本植樹 自社生産レモン使用バスソルト販売 ブロイラー・レモン作業員１名増

転率６回、平均出荷体重3.1kg、飼料要求率1.57、育成率96.1％と高い成績である。大型システム鶏舎８棟の建物サイズおよび制御機能等の規格を統一した。管理者が誰でも飼育できるように、システム鶏舎、開放鶏舎ともに温度センサーと加熱器との位置関係を共通化し、管理者全員が温度管理の状況を共有している。併せて、入雛準備作業・ガード広げなどの管理作業手順を統一した。

（表２）経営実績（令和５年度）

経営概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）	家族・構成員	1.3人
		雇用・従業員	8.6人
	肉用鶏平均飼養羽数		253,741羽
	肉用鶏年間餌付羽数		1,522,443羽
	肉用鶏年間出荷羽数		1,487,392羽
収益性	所得率		12.0％
	肉用鶏100羽当たり生産費用		12,173円
生産性	出荷回転率		6.0回
	平均飼育日数		45.6日
	平均休室日数		15.2日
	平均出荷日齢		45.6日
	肉用鶏出荷100羽当たり出荷時体重		313.7kg
	育成率		96.1％
	飼料要求率		1.57
	生体１kg当たり販売価格		177.7円
	鶏舎１m^2当たり年間出荷羽数		90.4羽
	肉用鶏出荷100羽当たり投下労働時間		1.33時間

【SDGsへの取り組み】

～地域資源を活用した高品質で安全・安心の鶏肉生産・販売～

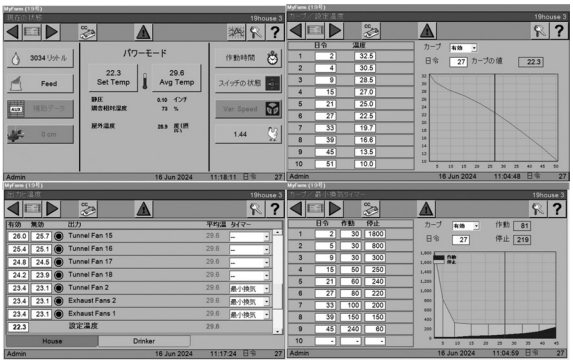
鶏肉の生産拡大と雇用の創出を目指し、鶏ふん堆肥を施用して地域で生産された飼料用米を活用し、高品質で安全・安心な地域産品の鶏肉を生産、販売することを目的として、耕種農家、JA、飼料会社、大月町ふるさと振興公社、大月町および県で構成する大月町畜産クラスター協議会を設立した。

【飼料用米利用と鶏ふん堆肥利用】

～付加価値の高い特殊肥料で耕種農家と連携～

平成19年に、鶏舎加温用の鶏ふんボイラーをリースで導入後、令和２年にロータリー攪拌式堆肥舎、肥料袋詰め機および鶏ふんボイラーを導入した。鶏ふんボイラーで生産する焼却灰317tを鶏ふん堆肥と混合し、リン酸、カリ成分を強化した鶏ふん堆肥を特殊肥料として、飼料用米を生産する集落営農組織、ブロッコリー、芋、菜花などの野菜農家およびゆずや晩柑などの果樹農家に年間1,817tを供給している。

（写真２）規格を統一した鶏舎

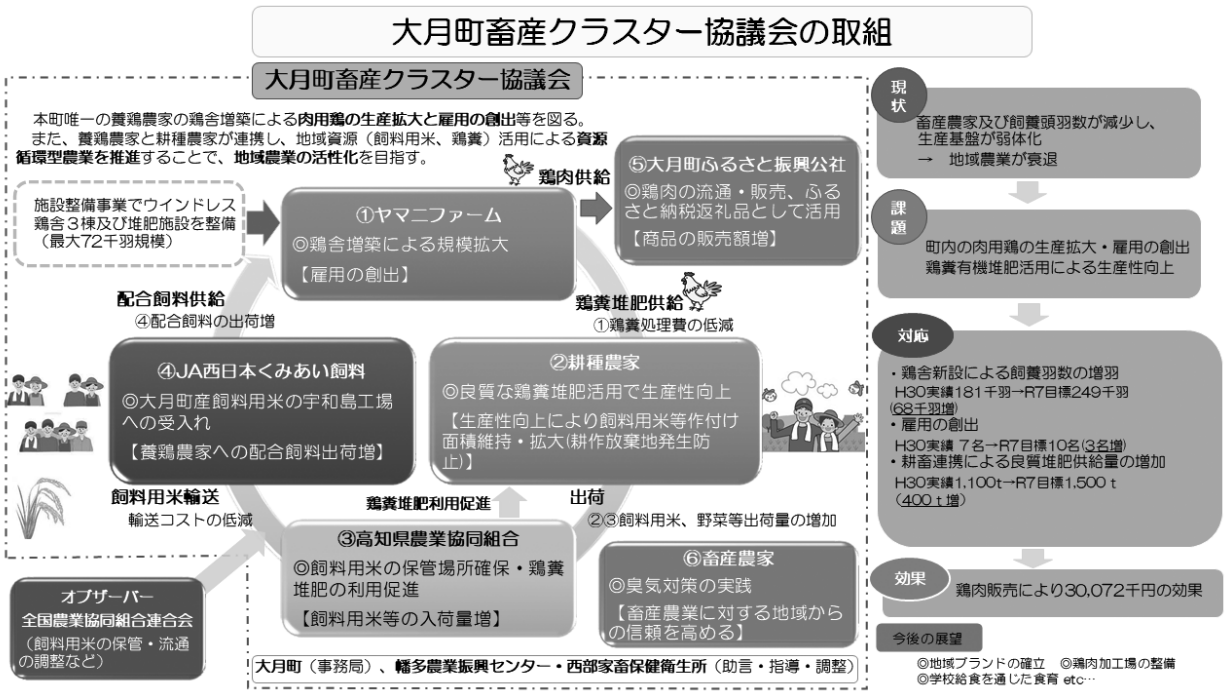


（写真３）デジタル化したマニュアル

【自社生産ブロイラーのブランド化】

～高品質＋SDGs＋アニマルウエルフェア＋おいしさ～

高知県から全国に拡がった「よさこい鳴子踊り」のように、多くの消費者の皆様にご賞味いただきたいとの思いを込めて、令和３年に「よさこい尾鶏」を商標登録した。飼料用米を給与して生産した鶏を、処理前にストレスを与えないように炭酸ガス麻酔で眠らせて、国内で初めて導入された空気冷却方式（エアチラー）と水冷式を併用して解体したものを「よさこい尾鶏」として出荷している。鶏に与えるストレスが少ないため、肉質が柔らかく、水っぽさがなく、鮮度を高く保った鶏肉を提供している。全国の百貨店、小売店、レストラン、通信販売および大月町ふるさと振興公社（道の駅大月）で取り扱われており、大月町のふるさと納税の返礼品にも採用されている。



（写真４）大月町畜産クラスター計画

（写真５）よさこい尾鶏の登録商標

（写真６）よさこい尾鶏の製品（一部）

【新しい試み】

～レモン栽培・新商品への挑戦～

令和３年に、大月町の主要産業の１つであった葉タバコの廃作が増えたことをきっかけに、「よさこい尾鶏」の唐揚げとレモン果実を一緒にご賞味いただけないかと考えた。葉タバコ農家10戸から農地6.8haを取得し、令和４年から合計1,100本を定植し、レモン栽培を開始した。令和５年に「こじゃんとレモン」

（写真７）レモン果実と入浴剤

を商標登録後、大月町のブランド商品として、大月町ふるさと振興公社で販売している。また、令和５年から松田医薬品株式会社と提携して、レモン果肉入りの入浴剤の販売を開始した。

【配合飼料価格高騰への対応】

～運送コスト低減と災害対応～

飼料コストを削減するため、平成17年に飼料運搬車を導入し、飼料運搬を開始した。以降、規模拡大に合わせて飼料運搬車を増車している。これにより、県内の他農家と比較して、１tあたり（年間375万円/年）以上のコスト削減を実現している。また、災害時の対応として、飼料ストック基地を設置している。

地域に対する貢献

【耕畜連携による地域農業への貢献】

～循環型農業への貢献～

令和２年から、大月町畜産クラスター協議会は、畜産クラスター計画に基づき、大月町、JAおよび県と連携し、集落営農や飼料用米農家などに、鶏ふん堆肥を無償で2,000袋および230tを配布した。耕種農家が継続的に鶏ふん堆肥を利用することで、収穫された飼料用米を配合した飼料を鶏に給与し、資源の地域内循環を達成した。

【地域の雇用への貢献】

～地元雇用と農福連携～

地元町民６名と障がい者２名を常時雇用している。また、近隣町民４名、出荷時のアルバイトとして延べ2,498人（８名×312日/年）を雇用し、地域の雇用創出に貢献している。

【食育への貢献】

～食の大切さと畜産への理解醸成～

平成28年から、大月町の小・中学校給食の給食メニューに自社生産の鶏肉を食材として提供している。また、地元中学校で食育をテーマとした講義を行った。自社生産の鶏肉とレモンを組み合わせたメニューは、生徒からリクエストが出るなど、好評を得ている。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

【重要な女性の活躍】

～会社の成長に欠かせない存在～

女性が働きやすい環境を整えるために、令和２年に女性専用のトイレ、休憩室、更衣室

（写真８）飼料運搬車と飼料ストック基地

（写真９）地元中学校での講義

およびシャワールームを備えた管理棟を設置した。また、女性の視点を活かした「よさこい尾鶏」や「こじゃんとレモン」のブランド戦略を構築するため、女性消費者に訴求する商品企画やデザイン制作に女性を登用した。レモンの入浴剤など、女性目線の社会的ニーズやトレンドを反映した商品開発に取り組み、令和５年に販売を開始した。顧客開拓については、女性が中心となって商談会に参加し、女性らしさをいかした営業トークやプレゼンテーションを展開した。高いコミュニケーション能力で、新規顧客の獲得や強い信頼関係を構築しており、自社の販売戦略に欠かせない存在となっている。

将来の方向性

【次世代への継承および今後の経営計画】

～四国１位から日本１位へ～

家族に限定せず、経営継承候補者の中から経営者としての適性がある後継者を選定する予定である。充実した教育や訓練を実施して、経営継承計画を策定する。経営継承後も持続的なサポートやアドバイスを行う。

さらに、ブロイラー産地の九州・東北へ進出することを目標に、大規模化に対応した経営と生産技術を組み合わせたいと考えている。

また、仲間づくりのために、「生産技術指導・アドバイザー業務」を開始した。市場動向の把握とイノベーションの推進、組織の強化を通じて、時代に乗り遅れない経営を目指している。

地域を結束（丸）させ
地域の幸福（福）を目指す『丸福』

－半世紀を超えて築き上げてきた「我が社のモットー　生産即消費の流通体系で地域を支える」－

（株）丸福・（有）荻町高原綜合農場（養豚経営・大分県竹田市荻町）

地域の概況

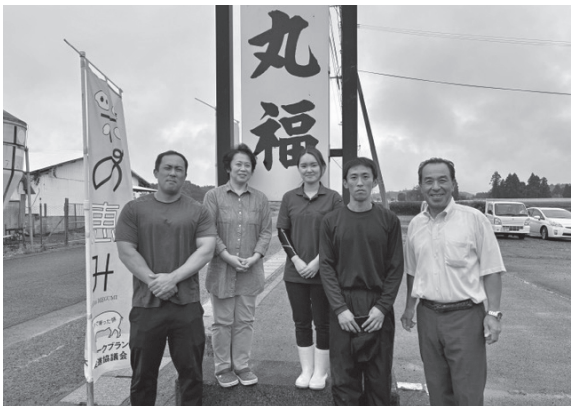
（株）丸福のある竹田市荻町は、西は熊本県、南は宮崎県の２県と隣接しており、標高500ｍで寒暖差の大きな内陸性気候の地域である。農業の概要は、令和４年度において、農業産出額は218億円で、そのうち養豚が45億円と市の農業産出額の約21％を占めており、県内で最も養豚の盛んな地域である。農業としては米中心に、大分県の特産品である、かぼす、椎茸、トマトやスィートコーンといった野菜、サフランをはじめとする花き、肉用牛などを生産している。

経営・活動の推移

創業は昭和35年、祖父一熊が発起人となり他５名で西福寺共同養鶏場を設立したことに始まる。昭和41年に（株）丸福養鶏場を設立し、直ぐに『（株）丸福』として法人の移行を行った。

創業当時から『我が社のモットー　生産即消費の流通体系の構築』として、地域を支える経営体として今日がある。『社の利益はみんなで配分しよう』との経営理念の下、地域雇用の促進に向けて経営の規模を拡大してきた。

当初の20年間は、ブロイラーを中心に最大45万羽飼養し、県内でも有名な『丸福のからあげ』や直営の加工場で製造された『鶏・豚のくんせい』等、鶏卵販売も含め直販店９店



（写真１）後継者と共に〔４代目の後継者兄弟〕

（写真２）農場全景〔肥育・繁殖（奥）〕

（写真３）肥育豚舎〔おが屑方式〕

（図１）生産即消費の流通体系概略

（表１）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭（羽）数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和35年	採卵鶏 水稲	500羽	米1.2ha	・祖父、工藤一熊が発起人となり西福寺共同養鶏場を５名と設立
昭和41年	採卵鶏 ブロイラー 水稲	6,000羽 10,000羽	米1.2ha	・(株)丸福養鶏農場として、農業生産法人を設立 ・翌４月幅広い事業展開実施のため、社名を『(株)丸福』に変更 ・13,000羽収容のブロイラー鶏舎を建設し開始
昭和50年 ～52年	採卵鶏 ブロイラー 養豚 水稲	12,000羽 400,000羽 母豚240頭	米1.2ha	・50年３月(有)荻町高原綜合農場を設立 ・(株)丸福の直販店は本社含めて10ヶ所に拡大 ・52年５月、養豚団地育成パイロット事業で豚舎を新設し母豚400頭規模に拡大
平成11年	採卵鶏 養豚 水稲	10,000羽 母豚1,700頭		・平成３年の『オーエスキー病』は県家畜保健衛生所等の指導の下衛生対策に取り組み清浄化届を11月１日に提出し、12月に終息宣言が出された
平成13年	採卵鶏 養豚 水稲	10,000羽 母豚1,800頭		・環境保全対策強化のため、汚水処理施設〔連続式活性汚泥法〕を建設
平成22年 ～24年	採卵鶏 養豚 水稲	10,000羽 母豚2,650頭	米12ha	・産子数増のため、種豚『ハイポー』を導入した ・県が推進する『凍結精液技術』も活用した ・災害時の電気水道対策として、農場に自家発電装置と井戸の掘削を行い緊急時の対策を実施した ・平成24年６月、大分県養豚協会会長就任
令和３年 ～４年	採卵鶏 養豚 水稲	8,000羽 母豚2,900頭	米20ha	・環境保全対策として、堆肥の流通の効率化を図るべく、令和４年11月、コンポスト、ペレットマシン等の導入を行った 〔耕畜連携堆肥活用推進事業　県補助率　２／３〕 ・創業以来、売上高が40億を超える決算となった
令和５年	採卵鶏 養豚 水稲	8,000羽 母豚2,900頭	米13ha 飼料用米 ７ha	・店舗販売部門では、大分市、豊後大野市に開店し、８店舗目となった ・(株)丸福の総売上高が45億近い決算となった ・現在飼料用米を７ha作付しており、来年度は地域内外の耕種農家に依頼をし、28.5haを確保する計画としている

舗〔現在〕を展開し地域支援として従業員の雇用や食の提供に努めてきた。

養豚は、昭和43年に肉豚肥育として開始したのが始まりで、これまでに(有)荻町高原綜合農場を設立し養豚団地育成パイロット事業等を活用し規模の拡大を行ってきた。現在は母豚3,000頭規模の一貫経営となっている。

大分県の銘柄である『米の恵み』として、出荷先別に『奥豊後豚』等の産地銘柄として飲食店や食卓等に届いている。

(有)荻町高原綜合農場は現在48名で、(株)丸福は、従業員103名〔パート50名を含む〕を雇用し、多くの従業員を竹田市内から雇用することで地域貢献につなげている。両社併せて従業員数は151名となっており、年商45億をあげる丸福グループとなった。

(写真４) 地元大手スーパー食肉コーナーの奥豊後豚

(写真５) チームワークの良い従業員

(写真６) 飼料用米作付〔本社周辺〕

(写真７) しげのや食堂の奥豊後豚ロース勝

経営・技術の特色等

(有)荻町高原綜合農場の養豚部門では、母豚数がGP母豚併せて計2,957頭〔R5〕となり、県内トップの飼養規模となっている。種豚の自家生産では、防疫対策と産子数の向上を目的に、『ハイポー』に切り替え、凍結精液技術も併用し産子数の増を図った。種雌豚１頭の平均分娩回数も令和５年実績で2.37回、年間分娩頭数も32.8頭と向上しており、収益性の確保につながっている。

配合飼料価格の高騰対策では、生産現場でのコスト低減に限界があるため、大分県養豚協会長として、国・県行政へ支援の要請を重ねると共に、当該経営は令和５年度より飼料用米７haの作付けを開始し６年度は28.5haに拡大を予定している。また、「大分県飼料用米活用プロジェクト」協議会の代表も務めており、需要・供給の情報提供を活用すると共に、生産コストの低減に向けて取り組んでいる。

(株)丸福から出荷された肉豚は、『米の恵み』として、出荷先別の産地銘柄として流通しており、オレイン酸測定値含有率が42%以上のものを『米の恵みプレミアム』としており、発生率は52.0%と他の出荷者の約1.5倍となっており、販売先のレストラン等からは『甘くておいしい豚肉』として高い評価を得ている。

経営の安全性としては、農場内に90棟を超える飼養管理等の施設があり、その中で豚舎等含む約１／３は、改修を続け耐用年数を経過して使用しており、生産コストの低減による収益向上につなげている。このような中で種雌豚１頭当たりの売上に対する借入金償還負担率は令和５年度で2.68%と低く、大規模経営のスケールメリットとコスト削減の取り

（写真８）子豚への予防注射

組みとの相乗効果により、安定した強い経営体質となっている。

【直面した課題と対策・経営改善対策】

養豚経営は疾病との戦いであり、平成３年に発生したオーエスキー病対策では、長い年月を要したが清浄化することができた。これまでに、サーコウィルスやPRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）対策、PEDと豚丹毒の対策として、家畜保健衛生所の指導の下ワクチン等での衛生管理体制の更なる徹底を図り対応してきた。

平成30年、国内で26年ぶりに発生した豚熱対策として、防鳥ネットや飼養衛生管理区域に防護柵を設置する等衛生管理対策の徹底を図った。

また、平成16年８月・９月の台風や平成24年の九州北部豪雨による災害が経営に大きく影響し、その対策として農場に自家発電装置の設置や井戸の掘削による水の確保も実施してきた。

販売戦略は、国内外の経済情勢等の見極めが難しい中で、丸福グループの売上げを向上させるため、販売部門の強化に向けて直営店を最大で14店舗まで拡大し、消費者へ直接生産物を届ける事業展開を行ってきたが、厳しい経済環境を乗り越えるため、経営資源の集中化を図ることとし、現在は、竹田市内に５店舗、大分市に２店舗、豊後大野市に１店舗、本社を含めて９店舗を展開している。

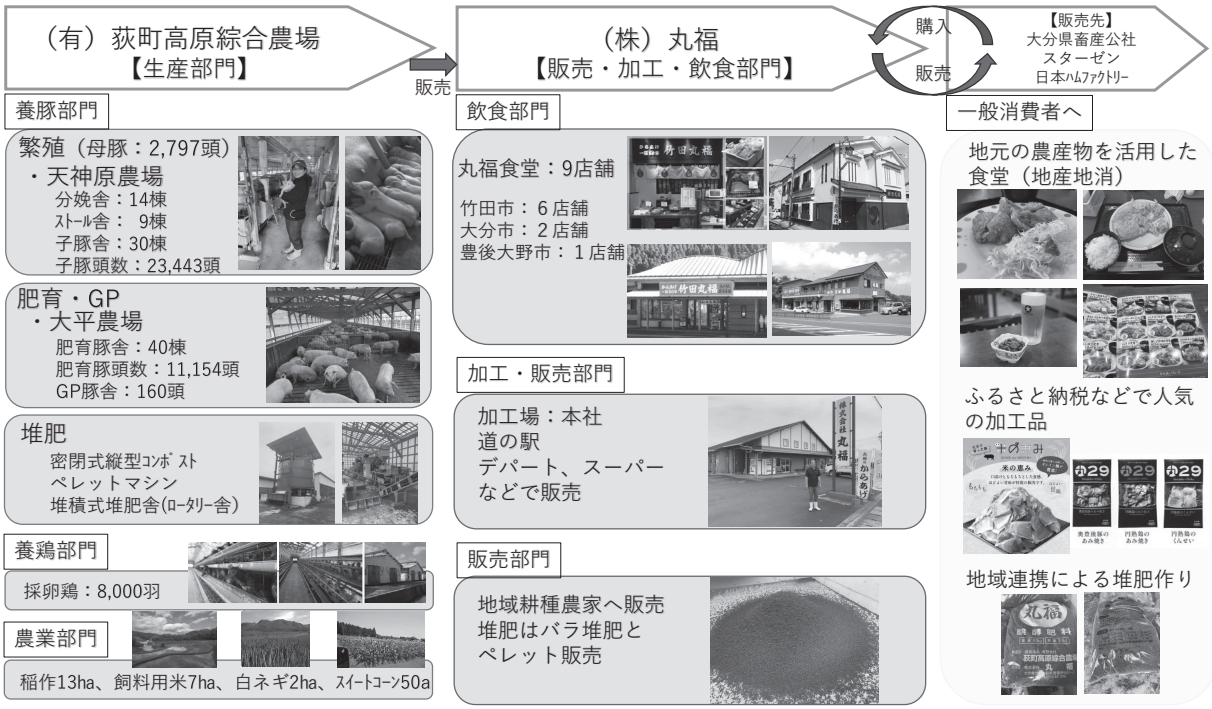
（表２）経営実績（令和５年度）

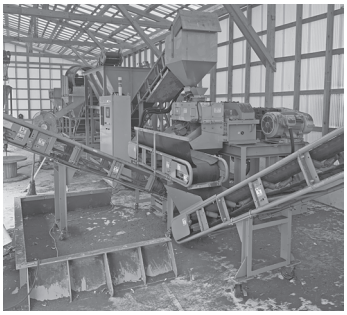
経営の概況	労働力員数（畜産・2000hr換算）		従業員	47.0人
	種雌豚平均飼養頭数			2,797.0頭
	肥育豚平均飼養頭数			25,948.0頭
	年間子豚出荷頭数			0頭
	年間肉豚出荷頭数			59,162頭
収益性	所得率			6.5％
	種雌豚１頭当たり生産費用			763,170円
生産性	繁殖	種雌豚１頭当たり年間平均分娩回数		2.37回
		１腹当たり分娩子豚頭数		13.9頭
		種雌豚１頭当たり年間分娩子豚頭数		32.8頭
		１腹当たり哺乳開始子豚頭数		10.8頭
		種雌豚１頭当たり年間哺乳開始子豚頭数		25.6頭
		１腹当たり離乳子豚頭数		10.7頭
		種雌豚１頭当たり年間離乳子豚頭数		25.3頭
	肥育	種雌豚１頭当たり年間出荷頭数（肉豚）		21.2頭
		肥育豚事故率（離乳時からの事故率）		10.5％
		肥育開始時	日齢	90.0日
			体重	65.0kg
		肉豚出荷時	日齢	170日
			体重	116.6kg
		平均肥育日数		80.0日
		出荷肉豚１頭１日当たり増体重		0.645kg
		トータル飼料要求率		－
		肥育豚飼料要求率		－
		枝肉重量		73.6kg
		販売価格	肉豚１頭当たり平均価格	37,757円
			枝肉１kg当たり平均価格	513.0円
		枝肉規格「上」以上適合率		66.9％

地域に対する貢献

環境保全対策として、昭和55年に町の支援を受け『荻町環境保全衛生組合』を設立し、堆肥の流通対策として地域との連携を強めてきた。直近では堆肥流通の更なる対策が必要となり、令和４年11月に縦型コンポストやペレットマシンの導入を行い、竹田市内の野菜農家を中心に、約90戸の耕種農家に堆肥を供

（図２）丸福グループの関係図





（写真９）ペレットマシン

（写真10）食育活動〔竹田市内小学校〕

（写真11）児童養護施設への県産豚肉無償提供

給し、一部には実費で散布も行っている。

繁殖部門は、平成13年に連続式活性汚泥法による処理施設を建設し対策を講じてきた。

現在は、回分式活性汚泥法による新処理施設を令和６年度内に建設する予定としており、これまでに環境に係る問題は起きていない。

また、地域雇用を中心に創業当初から我が社のモットー『生産即消費の流通体系の構築』で、今日まで半世紀以上にわたって歩み続けてきた。

『社の利益はみんなで配分しよう』との経営理念の下、地域雇用の拡大も視野に経営規模が拡大されて、(株)丸福ならびに(有)荻町高原綜合農場併せて〔丸福グループ〕計151名の従業員〔外国人研修生含む〕を雇用している。ちなみに、従業員の半数は市内からの雇用となっている。また、永年継続勤務の従業員が多いのも特徴的である。

地域への食育活動として、竹田市内の幼稚園、小中学校の給食に県産豚肉を毎年11月に県産豚肉のロース75kgを贈呈し、食育活動として18年程続け令和６年11月３日竹田市より功労表彰を受けている。さらに、県産豚肉のブランド強化に向けて、大分県養豚協会長として、『米の恵み』の普及促進を図る組織である、大分米ポークブランド普及促進協議会の

（写真12）宿舎／休憩所・更衣室・食堂

（写真13）勤続10年の沖縄旅行

（写真14）工藤社長と奥様

副会長も務め、県産豚肉の認知度向上の取り組みを幅広く行っている。

その他、工藤代表取締役は県内及び竹田市内の他組織の多くの要職や、大分県養豚協会会長を12年にわたり務めており、大分県内11か所の児童養護施設への県産豚肉の無償提供を実施するなど、県内生産者の牽引役となっている。他の役職として、公益社団法人大分県畜産協会の理事を12年、大分県配合飼料価格安定基金協会理事長・大分県飼料用米活用プロジェクト代表・県南地域豚病対策協議会長を12年間歴任している。畜産関係以外では、金融機関の理事・警察・消防関連団体の長、観光関連や商工会議所、土地改良区の長も歴任している。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

丸福グループの女性従業員は57％で、（有）荻町高原綜合農場の女性の雇用は11名で割合は23％となっており、農場では特に分娩舎の飼養管理について細やかな目配り、気配りのできる女性を配置しており、成績の向上につながっている。

（株）丸福の女性の雇用は75名で72%を占めており、直営店舗９店舗のうち１店舗では女性の管理職店長が誕生している。

労働環境としては、育児休暇・介護休暇等や就業規則の整備により働きやすい環境整備や生産現場では休日の確保として、土曜・日曜のいずれかに休日が確保できる体制を取っている。また、農場内に従業員向けの社宅も完備しており、更衣室・休憩室も設け働きやすい環境整備に努めている。

さらに、勤続10年の従業員には福利厚生として、東京や沖縄などへの社員旅行を昭和52年より２年に一度程度実施してきている。中でも生産部門の（有）荻町高原綜合農場の従業員数は48名で、そのうち、勤続10年以上の従業員は24名と半分以上が永年勤続社員となっている。

将来の方向性

今後の計画として、令和10年に向けて経営継承を予定しており、特例承認等県への手続きも始めている。また、現状高値で推移している飼料価格対策として、飼料用米の作付け拡大を計画しており、最終目標は2,000tの確保としている。

また、大分県飼料用米活用プロジェクトの代表として県内の利用促進にも努めて行きたい。

現在労働力の確保が難しい中、飼養規模の維持のため老朽化してきている豚舎等の施設の改修・新設やICT等を活用した省力管理を進めて行き、適正な労務管理を行うと共に、社名のとおり、地域を結束『丸』させ地域の幸福『福』を目指すため（株）丸福として、更に努力を重ね後継者に継承していきたい。

Ⅲ

特別賞の概要

畜産、耕種、行政がタッグを組んで飼料用米増産への調整機能を発揮

－循環型農業を進め水田を次世代に継承する－

旭市飼料用米生産者協議会・旭市飼料用米利用者協議会（飼料生産組織・千葉県旭市）

地域の概況

千葉県旭市は県北東部に位置し、人口６万２千人のまちである。産業では、温暖な気候を利用した農業が盛んで、令和４年の市町村別農業産出額では全国８位（県内１位）となっている。水稲・果樹・施設園芸・露地野菜および畜産がバランスよく営まれ、首都圏の食料供給基地として重要な役割を果たしている。

とりわけ畜産は養豚が全国２位、鶏卵が県内２位と盛んで、水稲も県内２位の生産規模となっている。こうした条件から、需要に応じた米生産として、飼料用米の取り組みが広がった。

当市における飼料用米の取り組みの特徴として、生産量の約９割が畜産・耕種農家と行政が連携した組織的なマッチングを通じ、市内の畜産農家で利用されていることにある。

経営・活動の推移

【取り組みの理念】

飼料用米は国際情勢に左右されない、安定した国産自給飼料の増産に寄与することはもちろん、旭市にとって水田を次世代に継承していく要であり、耕種と畜産を結び付ける循環型農業の要でもある。畜産、耕種、行政の結びつきを強め、連携が深まるほどに双方にメリットが生じるよう、各協議会の持つ調整機能を最大限に発揮し、事務局である行政は積極的にこれをサポートしている。

（写真１）旭市の水田風景

【取り組みに至った背景】

市内の水田の多くは、強湿田で、麦・大豆などの畑作物の生産に不向きな地域となっており、生産調整の目標達成が困難な状況にあったが、国は生産調整を確実に実施するため、平成20年産からは目標未達成の場合には、補助金交付で不利な扱いとなることが示された。

もともと畜産が盛んな地域であることに加え、地域の代表的な養豚業者である(有)ブライトピック千葉の志澤会長が中心となり、「地域の循環型農業の確立のためには耕種農家との接点が必要」という理念のもと、地域畜産農家がコスト増を覚悟し、地域貢献として飼料用米を受け入れたことから、生産調整目標達成を目指し、畜産・耕種・行政が連携して、旭市飼料用米利用者協議会を立ち上げ、飼料

（表１）協議会の概要

名称	旭市飼料用米利用者協議会	旭市飼料用米生産者協議会
設立	平成20年２月８日	平成31年４月１日
目的	生産調整の取り組みの一つである飼料用米の市内での受入体制の調整を図り、飼料生産の振興を図ることを目的とする	会員自らが率先して飼料用米に取り組むとともに、地域において飼料用米の取り組みに対して中心的な役割を担い、飼料用米生産者の所得安定を図ることを目的とする
会員数	10（令和６年７月１日現在） 養豚農家５、養鶏農家５	52（令和６年７月１日現在） 市内で飼料用米を生産する耕種農家で、旭市飼料用米利用者協議会への５年間の出荷を誓約した者
役員	４名（会長、副会長、会計、監事）	４名（会長、副会長、会計、監事）
受入（生産）量	令和５年産受入量：4,464t	令和５年産生産量：3,656t ※市全体での生産量の70%
主な活動	・耕種農家の契約事務の代行 ・会員間での飼料用米の配分調整 ・飼料用米のPR活動	・飼料用米専用品種の種子やフレキシブルコンテナバック等の農業資材の購入支援 ・飼料用米のPR活動

（表２）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼料作付面積 （　）内は協議会受入	経営・活動の内容
平成19年	飼料用米	0	・生産調整未達成の地域は、補助金の交付等で不利な扱いとなることが国から示された ・飼料としての可能性を探るべく、刈り遅れた圃場の生もみ（200kg）を実験的に豚に給餌（結果は良好）
平成20年	飼料用米	40.2ha（40.2ha）	・生産目標達成のため、畜産・耕種農家と行政が連携し飼料用米推進の取り組みを開始 ・旭市飼料用米利用者協議会を設立し契約事務等を代行（事務局は旭市）
平成26年	飼料用米	210.1ha（207.7ha）	・米価暴落（対前年12%安） ・収量に応じて補助金が変動するようになり、飼料用米へのインセンティブが働くようになる ・収量を正確に把握するために農産物検査が必要となり、畜産側の負担が増加（受入れを見送る会員が発生）
平成27年	飼料用米	342.3ha（326.6ha）	前年の米価暴落の影響で作付けは急増したものの、翌年から米価が一部回復し作付けは鈍化
平成28年	飼料用米	396.7ha（382.7ha）	作付け推進のため、県と市で耕種農家への戸別訪問を実施（H30まで）
平成31年	飼料用米	442.9ha（413.5ha）	飼料用米生産の効率化や環境改善のため、旭市飼料用米生産者協議会を設立し、以降はPR活動等を共同で実施
令和２年	飼料用米	428.0ha（398.6ha）	医療従事者支援のため、飼料用米を給餌した豚肉と卵を旭中央病院に寄付（R4まで）
令和３年	飼料用米	597.6ha（526.8ha）	コロナ禍で米価が下落し作付け急増
令和４年	飼料用米	753.6ha（635.0ha）	会員の(有)ブライトピック千葉がペレット堆肥の製造開始、水田への散布を実施
令和５年	飼料用米	783.9 ha（661.5ha）	・利用者協議会に養豚農家新規加入 ・旭市がペレット堆肥への補助事業を実施（10円/kg）

用米の取り組みが始まった。

耕種農家にとっては、高齢化や担い手不足により農地が担い手に集まっていく中、飼料用米の生産を経営に組み入れることで、短期間に集中していた主食用米の収穫作業を、長期間に分散できるようになった。このことで、担い手への農地集積や地域農業の担い手の確保、遊休農地の解消などに繋がっている。

当市の飼料用米の拡大と地域内流通を支えた最大の特徴は、畜産・耕種・行政が連携した「組織的なマッチング」である。利用者協議会の発足当初は、構成員として畜産農家と全ての飼料用米生産農家を含んでいたことから、マッチングを行う必要性はほとんどなかったが、取り組みが広がっていくにつれて、新規参入する耕種農家とのマッチングを考慮する必要性が強まっていった。

減反政策が終了し、需要に応じた米の生産と販売を行えるようになったこともあり、耕種農家間での連携を強化して生産性を高め、畜産農家との搬入調整や価格協議を進めるため、平成31年４月に耕種農家から成る飼料用米生産者協議会が設立された。

現在、両協議会の事務局である市が中心となり、畜産・耕種・行政が連携して、受付、配分、価格決定などを行っている。

経営・技術の特色等

【技術の特色（組織的なマッチング）】

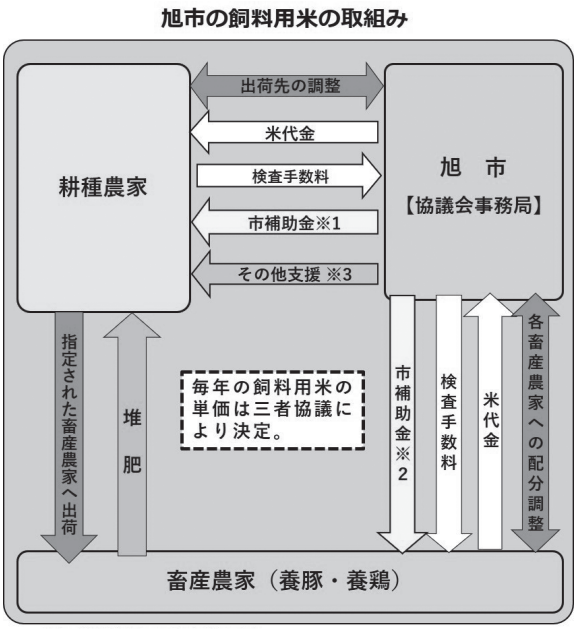
第１の機能は飼料用米制度の周知である。説明会、市広報誌やイベント等を通じて制度の周知を図っている。当初、助成金の手続き等に関するものであったが、その後、飼料用米の定着と本作化を促進するため、水田の持つ多面的な機能、食料自給率の向上等の社会的な意義、飼料用米を活用した畜産物のPRを含めた活動を三者が連携して実施している。これまで、飼料用米を活用した豚・卵と市内産の米を使ったカツ丼を提供するイベント等を実施してきた。

第２の機能は受付・相談である。助成金制度が複雑であるため、取り組み拡大のために農家の事務負担を軽減する必要があった。そこで、市の窓口において、利用者協議会との契約申し込みから助成金の申請手続きをワンストップ化することで対応している。このことで耕種農家は、指定された畜産農家に飼料用米を搬入するだけとなり、負担が大きく減った。令和３年に米価が急落した際は、飼料用米の作付けが大きく増えたが、この仕組みにより、取り組み拡大に対応できたことで、多くの耕種農家の経営安定に資することができた。

第３の機能は数量配分と価格決定である。毎年５月に利用者協議会と生産者協議会が協議し、畜産農家への配分量と価格を決定している。

第４の機能は主体間の調整機能である。主体間の意見交換は、利用者協議会の総会に生産者協議会役員と市が参加することによって行われており、両協議会の事務局である市が、随時意見の集約と共有を行っている。また、この調整機能により、協議会のメンバーが連携した堆肥利用の協議会が立ち上がったことで、補助事業を活用したペレット堆肥の生

（図１）組織的なマッチング（飼料用米の取り組み相関図）



※1 出荷数量1kgあたり20円
※2 受入数量1kgあたり2円
※3 申請・契約書類の作成、専用品種種子の配付など

（表３）協議会の設立による効果

種別	設立前	設立後
畜産農家	・飼料用米を出荷してくれる耕種農家を探すことが困難 ・堆肥を受け入れてくれる農家を探すことが困難 ・飼料用米の補助金申請に必要な書類の作成などの事務負担が大きい	・耕種農家の探索は協議会が担うため、負担は無くなった ・飼料用米は耕種農家が直接搬入するため、このことをきっかけに堆肥散布のマッチングが進んだ ・契約書類の作成は協議会が代行するため、事務負担は大幅に減った
耕種農家	・飼料用米を受け入れてくれる畜産農家を探すことが困難 ・飼料用米の補助金申請に必要な書類の作成などの事務負担が大きい ・主食用米の収穫作業は短期間に集中するため、面積拡大や野菜等の生産を含めた複合経営への取り組みが困難 ・飼料用米を生産しても、中間マージン等があり、主食用米から転換する魅力が少ない	・畜産農家の探索は協議会が担うため、負担は無くなった ・契約書類の作成は協議会が代行するため、事務負担は大幅に減った ・主食用米よりも作業効率に優れた飼料用米の受け入れが担保されたことで、担い手への農地の集積、遊休農地の解消に繋がったほか、複合経営の幅が広がる等の効果が見られる ・耕種農家の受け取る額は、販売価格から検査手数料を控除した額とし、平等性と明確さが担保された
行政	・湿田地帯で麦・大豆などの生産に不向きなため、主食用米からの転作が思うように進まない ・WCS用稲は収穫機械が高額で取り組みのハードルが高く取り組みが広がらない ・畜産も稲作も盛んなのに、両者をマッチングする組織がない	・協議会の事務局を担うことで、マッチングが容易になったほか、畜産と耕種の両方の要望と課題を擦り合わせすることが可能となり、誰でも取り組みやすい受付の体制を整えることができた ・行政が先行して受け取る、制度の変更や補助事業に関する情報などを周知できる環境が整った

産・流通の取り組みが始まった。

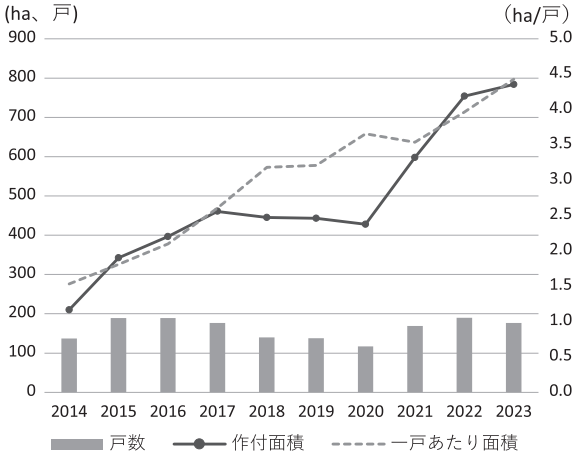
地域に対する貢献

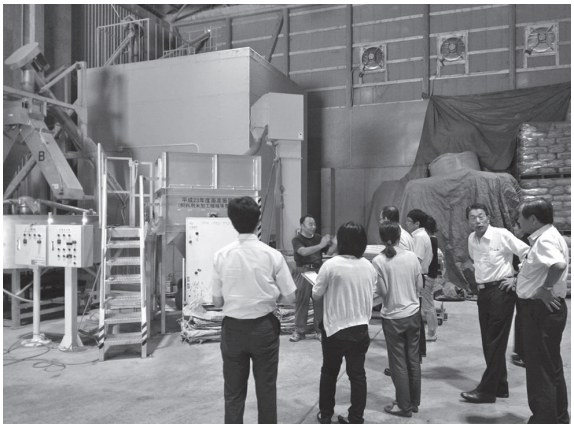
飼料用米やWCS用稲には、わら収集や堆肥利用に対して国の補助があるため、水田を通じた環境にやさしい資源循環型農業が広がっている。

耕種農家にとっては、高齢化や担い手不足により農地が担い手に集まっていく中、飼料用米の生産を経営に組み入れることで、時期が集中していた主食用米の収穫作業を分散できるようになったことで、担い手への農地集積の進展や地域農業の担い手の確保、遊休農地の解消、将来への農地継承などに繋がっている。

また、両協議会はこれまでも地域医療機関への寄付活動などを通じて地域への貢献を行ってきた。令和６年７月には、市と利用者協議会は、子供たちの地域農業への理解の醸成や地産地消の推進に取り組んでいくため、旭市

（図２）旭市における飼料用米作付け状況





（写真２）飼料用米加工設備

産飼料用米を活用した畜産物の学校給食への利用に関する協定を締結した。

将来の方向性

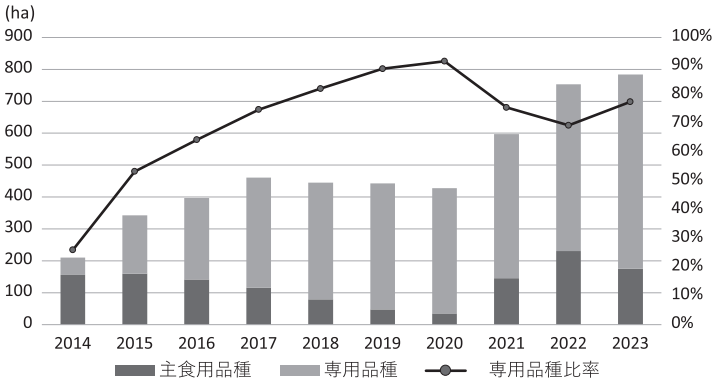
【次世代への継承（経営の継続性）】

飼料用米は、海外相場に左右されない安定的な濃厚飼料であり、給与した生産物の差別化にも有用である。利用者協議会メンバー内では、飼料用米を活用した畜産物を「志澤豚－米仕上げ－」や「たまごのある暮らし」としてブランド化を図り、食味や栄養価による訴求力を高めているが、ブランドを維持するためには、飼料用米の安定的な生産が不可欠である。一方、耕種農家にとっては、飼料用米から主食用米への回帰は容易で、毎年の作付けは常に米価の変動に左右されることになる。

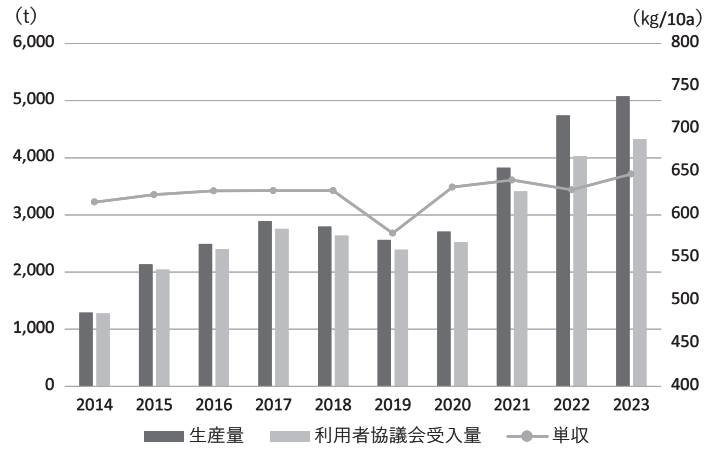
当市の傾向として、専用品種で飼料用米に取り組んでいる人はその面積を年々拡大し、飼料用米の本作化が進展している一方で、主食用品種で取り組んでいた人は、昨今の米価の高騰と助成金の削減等により飼料用米離れの兆しが見えてきている。すでに、複数年出荷を誓約した耕種農家からの買い取り単価を上げるなどの手法をとっているが、飼料用米の安定供給に向けて、転作の継続と本作化を促す取り組みを考えていく必要がある。

飼料用米の本作化を推進するためには、経営判断の結果として飼料用米に取り組むような環境を整備していくことが必要で、生産性の向上（専用品種・団地化・堆肥利用）に対する支援、助成金のさらなる有効活用に向けた行政の継続的なサポート体制の充実が必要である。

（図３）旭市における飼料用米専用品種の作付け状況



（図４）旭市における飼料用米生産状況



（写真３）飼料用米PRイベントで提供した厚切りかつ丼

【今後の経営計画】

飼料用米への補助金支出に一般から理解を得るためには、生産・流通・利用の各段階での低コスト化の取り組みが必要である。特に飼料用米の単収向上のために専用品種による作付けが不可欠である。生産者協議会では、市と連携して農家からの注文を取りまとめ、

種もみの一括購入によるコスト削減を図っている。また、会員については飼料用米の販売金額の一部を共同貯蓄して、種もみやフレコンバックの購入費用に充てている。この結果、令和５年産では専用品種が占める割合は県内平均の49%を大きく上回る78%となった。

生産コストについては、海外に原料を依存する化学肥料の高騰などにより厳しい状況が続いており、耕畜連携による堆肥の生産・利用に注目が集まっている。

しかしながら、旭市は養豚が全国２位の生産規模であることから、堆肥を撒かせてもらえる耕種農家を探すことが大変で、利用者協議会の会員である(有)ブライトピックは、堆肥が山のように残ってしまう状況であった。一方、耕種農家からは、堆肥が粉になって飛散したり、臭気に関するクレームを受けることから、作業性が良く、臭いの少ないペレット堆肥の生産を求める声があった。

これらのことから、両協議会のメンバーが連携して「旭市飼料用米堆肥利用者協議会」を立ち上げ、令和３年度に補助事業を活用したペレット堆肥の生産・流通の取り組みが始まった。

令和５年度の生産量は1,373tで、主な流通先は、飼料用米生産者と業者を通じた広域流通で、北海道にも出荷されている。「地域の循環型農業の確立」は協議会の当初からの目的で、畜産農家に直接搬入する、顔の見える取引をきっかけとした堆肥利用が進んでいる。行政としては、令和５年度に国の化学肥料低減定着対策事業を活用して、ペレット堆肥20kg当たり200円の補助を実施した。今後も利用者協議会及び生産者協議会と連携して推進していく。

（写真４）ペレット堆肥散布作業

（写真５）飼料用米の搬入

飼料用米に対する助成金は、本体部分の戦略作物助成（5.5～10.5万円/10a）のほか、地域の特色に応じて配分される産地交付金があり、稲わら利用や二毛作などが対象になっている。地域に畜産農家が多く、稲わらや二毛作での飼料作物に需要があることから、これらを活用して耕種農家の所得安定を図っていくことが必要である。稲わらについては、現在、飼料用米ほ場の約６割で収集が行われており、水田を通じた耕畜連携が進展している。今後は二毛作についても取り組みを推進するため、周知を図っていく予定である。

Ⅳ

これまでの受賞事例（昭和61年度～令和５年度）

全国優良畜産経営管理技術発表会　これまでの受賞事例

※昭和６１年度～平成５年度までは「全国優良畜産経営技術発表会」として開催。
　平成６年度以降は「全国優良畜産経営管理技術発表会」として開催。

〔昭和６１年度〕
開催期日：昭和６１年７月２８日
開催場所：東京都千代田区一番町　全国町村議員会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	花岡　信重	香川県仲多度郡琴平町	肉用牛	肥育経営の精密経営を目指して
優秀賞	和田八十三	長野県諏訪郡富士見町	酪　農	我が家の経営改善と地域の酪農発展を目指して
	入沢　三郎	岡山県真庭郡八束村	酪　農	ジャージー牛にかけるわが家の酪農経営
	上田　快晴	高知県高岡郡窪川町	肉用牛	野シバ草地による繁殖牛経営
	山下　正人	長崎県南松浦郡三井楽町	肉用牛	肉用牛専業経営を目ざして
	坂上　光芳	新潟県岩船群神林村	養　豚	低豚価時代に対応する私の養豚経営の取り組み
	石田　勝彦	広島県広島市	養　豚	父から引き継いだ私の養豚経営
	多田　菊久	京都府宇治市	養　鶏	都市近郊における私の採卵養鶏経営の歩み

〔昭和６２年度〕
開催期日：昭和６２年７月２１日
開催場所：東京都千代田区九段南　九段会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	矢田　栄蔵	島根県出雲市	肉用牛	未利用資源活用による肉用牛繁殖経営の確立（蚕糞、蚕渣、残桑）
優秀賞	渡辺　　昿	岩手県胆沢郡金ヶ崎町	酪　農	低コスト健全酪農の実践
	木口　源己	大分県大野郡野津町	酪　農	低コスト生産を目指した私の酪農
	上路　光男	青森県下北郡東通村	肉用牛	林間放牧による肉用牛の低コスト生産
	山城　善彦	沖縄県国頭郡伊江村	肉用牛	私の肉用牛繁殖経営
	納田　伸春	徳島県板野郡上板町	養　豚	養豚経営と地域のコミュニケーション
	末吉　広美	鹿児島県鹿屋市	養　豚	養豚一貫経営の安定を目指して
	北川　富藏	滋賀県神崎郡五個荘町	養　鶏	簿記記帳を生かした養鶏経営について

※　矢田　栄蔵氏は第２６回農林水産祭日本農林漁業振興会長賞（畜産部門）を受賞。

〔昭和６３年度〕
開催期日：昭和６３年６月３０日
開催場所：東京都千代田区二番町　番町グリーンパレス

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	宮良　當成	沖縄県八重山郡竹富町	肉用牛	離島における低コスト生産をめざした私の肉用牛経営
優秀賞	工藤　一幸	青森県東津軽郡平内町	酪　農	苦悩１５年、そして明日へ（良質粗飼料生産に伴うコスト低減）
	大平賢一郎	新潟県南魚沼郡六日町	酪　農	安定した酪農経営をめざして
	伊藤　　幸	宮城県桃生郡桃生町	肉用牛	地域とともに歩む和牛繁殖経営
	若山　　巌	岐阜県高山市	肉用牛	私の和牛繁殖経営
	荒牧　弘幸	熊本県阿蘇郡高森町	肉用牛	試練から立直り肉用牛一貫経営（地域・経営内）への挑戦
	小林　秀雄	群馬県前橋市	養　豚	基本に忠実な我が家の養豚経営
	中西　嘉幸	和歌山県有田郡広川町	養　鶏	グループ活動と私のブロイラー経営

※　宮良　當成氏は第２７回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞。

〔平成元年度〕
開催期日：平成元年７月１２日
開催場所：東京都千代田区九段南　九段会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	鈴木　孝則	宮崎県児湯郡新富町	肉用牛	肉用牛の専業農家を目ざして
優秀賞	南　　雄司	群馬県渋川市	酪　農	経営向上を目指す乳肉複合
	伊東　誠一	大分県宇佐郡安心院町	酪　農	兄弟で築くゆとりある酪農経営をめざして
	冨田　重正	滋賀県東浅井郡浅井町	肉用牛	低コスト生産による収益性の向上
	植田　光隆	兵庫県美方郡温泉町	肉用牛	低コストを目指した肉用牛経営に取り組んで
	野尻　健一	熊本県阿蘇郡高森町	肉用牛	肉用牛の共同放牧と投資抑制による低コスト生産への挑戦
	昆野　雅敏	岩手県北上市	養　豚	種雌豚１頭当たり肉豚出荷２４頭をめざして
	木村　勝芳	奈良県北葛城郡當麻町	養　鶏	一代できずいた採卵養鶏経営

※　鈴木　孝則氏は第２８回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞。

〔平成２年度〕
開催期日：平成２年６月２９日
開催場所：東京都千代田区永田町　全国町村会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	明見孝一郎	香川県綾歌郡飯山町	肉用牛	合理的な肉用牛肥育経営を目指して
優秀賞	佐久間貴弓	千葉県君津市	酪　農	低コストによる経営の安定を目指して
	高野　守康	群馬県佐波郡東村	酪　農	堅実な向上を目指す酪農経営
	星　　正喜	宮城県登米郡迫町	肉用牛	肉用牛一貫経営の確立をめざして
	原田　道明	宮崎県西諸県郡高原町	肉用牛	粗飼料完全自給の肉用牛専業経営実現を目指して
	森本　芳雄	滋賀県蒲生郡安土町	養　豚	精密養豚に取り組んで２５年
	中村　正則	岩手県上閉伊郡宮守村	養　鶏	開放鶏舎による山間寒冷地帯のブロイラー生産
	小林　倉雄	神奈川県津久井郡城山町	養　鶏	私の鉄分強化「もみじ卵」の生産販売について

※　明見　孝一郎氏は第２９回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞。

〔平成３年度〕
開催期日：平成３年７月３日
開催場所：東東京都千代田区麹町　麹町会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	川村　千里	島根県大田市	肉用牛	自由化に打ち勝つための「川村家の戦略」－牛に学びながら－
優秀賞	泰藤　孝次	広島県賀茂郡福富町	酪　農	飼料作物の共同生産による安定経営をめざして
	山下　英雄	熊本県菊池郡七城町	酪　農	魅力ある酪農経営をめざして
	小松　久平	秋田県由利郡鳥海町	肉用牛	肉用牛一貫経営の定着・安定をめざし奮闘
	中西垣富夫	兵庫県豊岡市	肉用牛	ゆとりある農業を目指して
	阿部　茂昭	山形県酒田市	養　豚	ゆとりある養豚経営を目指して
	上原　章男	埼玉県秩父市	養　豚	魅力の農家養豚を継承して
	講殿　城明	滋賀県高島郡安曇川町	養　鶏	消費者ニーズを重視した私の養鶏経営

※　川村　千里氏は第３０回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞。

〔平成４年度〕
開催期日：平成４年７月１日
開催場所：東京都港区赤坂　三会堂ビル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	平岡　平一	石川県加賀市	養　鶏	アイデアを生かした堅実な養鶏経営
優秀賞	田中　久一	青森県東津軽郡平内町	酪　農	酪農生産技術の向上と経営安定に取り組んで－牛群検定成績を利用して－
	森島　定彦	岐阜県海津郡平田町	酪　農	河川敷草地を有効活用した酪農経営
	藤原　隆博	香川県観音寺市	肉用牛	一貫肥育経営で肉質向上をめざして
	甲斐　知博	大分県大野郡野津町	肉用牛	肉用牛の繁殖専業経営にかける
	平沢　良治	茨城県結城市	養　豚	規模拡大による養豚経営の安定を目指して
	斉藤　春敏	新潟県西蒲原郡巻町	養　豚	経営診断と共に歩む我家の経営
	葉山　義高	奈良県香芝市	養　鶏	産地直送による採卵経営

※　平岡　平一氏は第３１回農林水産祭日本農林漁業振興会長賞（畜産部門）を受賞。

〔平成５年度〕
開催期日：平成５年７月６日
開催場所：東京都千代田区九段南　九段会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	万庭　正勝	岡山県真庭郡八束村	酪　農	ジャージーに夫婦の夢とゆとりを求めて－脱サラ、３３歳からの出発－
優秀賞	小関　徳男	宮城県柴田郡川崎町	酪　農	魅力ある「楽農」を目指して！
	内田　清文	三重県三重郡菰野町	酪　農	草作りで酪農経営の安定を目指して
	松田　典房	熊本県菊池郡合志町	酪　農	激動期を勝ち抜く－一貫した堅実酪農経営を通して－
	薮内千恵子	兵庫県洲本市	肉用牛	繁殖和牛にロマンを託した女性の多頭経営
	山岡　正美	広島県高田郡美土里町	肉用牛	繁殖地域の中で取り組む肥育経営
	昆野　先男	岩手県北上市	養　豚	手づくりハム・ソーセージ加工を取り入れた農家養豚経営－家族労働力主体による地場産品化への挑戦－
	桜井富佐子	新潟県北魚沼郡広神村	養　豚	養豚後継者の道を選んで

〔平成６年度〕

開催期日：平成６年７月６日

開催場所：東京都千代田区九段南　九段会館

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	河合　将夫	岐阜県武儀郡上之保村	肉用牛	肉用牛一貫経営の定着、安定を目指して
優秀賞	纐纈　成喜	北海道野付郡別海町	酪　農	放牧新技術の導入による高収益経営の確立
	大上　浩也	広島県佐伯郡湯来町	酪　農	週休２日のゆうゆう酪農
	江藤　　務	大分県宇佐郡安心院町	肉用牛	自由化の中「築きあげた夢の農業経営」を家族で守りぬくために

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	福元　和典	鹿児島県肝属郡高山町	養　豚	家族でささえるわが家の養豚経営
優秀賞	塩月　哲司	大分県南海部郡蒲江町	養　豚	ゆとりある養豚経営をめざして
	原　　秀治	滋賀県彦根市	養　鶏	生産から販売まで地域密着型の経営
	笠原　勢一	徳島県名西郡神山町	養　鶏	山間傾斜地を利用したブロイラー専業経営の確立

※　河合　将夫は第３３回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞

〔平成７年度〕

開催期日：平成７年７月６日

開催場所：東京都目黒区大橋　こまばエミナース

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	東　　義秋	熊本県阿蘇郡西原村	肉用牛	農業は面白い！－あか牛で豊かな生活－
優秀賞	樋口　一彦	山形県西置賜郡白鷹町	酪　農	創意工夫、発想の転換で築いた酪農専業経営
	興　　勝幸	鹿児島県熊毛郡中種子町	酪　農	寄いらいき（相互扶助の心）で支える酪農経営の展開
	志賀チヨ子	大分県直入郡久住町	肉用牛	豊かな地域資源を生かした低コスト子牛生産

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	影山　和夫	栃木県下都賀郡藤岡町	養　豚	低コスト化と省力化へのチャレンジ
優秀賞	佐々木章一	宮城県登米郡豊里町	養　豚	系統豚「ミヤギノ」利用をした銘柄化に取り組んで
	金城　　栄	沖縄県浦添市	養　豚	飼育基本を忠実に守り高所得を目指す養豚経営
	山田　　衛	滋賀県大津市	養　鶏	地域周辺の宅地化に適合した採卵経営

〔平成８年度〕

開催期日：平成８年７月３日

開催場所：東京都目黒区大橋　こまばエミナース

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	小松　正幸	高知県香美郡野市町	酪　農	住宅化が進行する中での効率的酪農経営を目指して
優秀賞	吉沢　和幸	長野県南佐久郡南牧村	酪　農	開拓地にはばたく、酪農親子鷹（親子三代にわたる酪農経営）
	落合　雄二	広島県比婆郡高野町	肉用牛	地域に根ざした和牛繁殖経営
	和気　　修	愛媛県東宇和郡野村町	肉用牛	国際化に対応できる肉用牛経営の確立をめざして

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	有限会社清水養鶏場 清水　　茂	静岡県静岡市遠藤新田	養　鶏	ブランド卵『美黄卵』で２．５倍の売上げ－直売所を養鶏場の顔として－
優秀賞	立崎　明彦	青森県上北郡上北町	養　豚	夢はふくらむ－自立養豚を目指して２０年－
	松沢　武弘	秋田県平鹿郡平鹿町	養　豚	地域農業と一体となって推める養豚複合経営
	村上　義満	高知県宿毛市橋上町	養　豚	生きのこりをかけての養豚経営

※　有限会社清水養鶏場は第３５回農林水産祭日本農林漁業振興会長賞（畜産部門）を受賞

〔平成９年度〕

開催期日：平成９年７月２日

開催場所：東京都目黒区大橋　こまばエミナース

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	中島　　薫	佐賀県武雄市	酪　農	１万kgへの道のり
優 秀 賞	河又　　潤	栃木県芳賀郡茂木町	酪　農	改良に夢をのせて
	中曽　譲二	広島県三次市	肉用牛	脱サラを決め農畜産業へ
	黒木　　誠	宮崎県児湯郡都農町	肉用牛	生産性を重視した低コスト肉用牛一貫経営

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	芦沢　益彦	山梨県南巨摩郡増穂町	養　鶏	消費者と共に歩む採卵養鶏
優 秀 賞	高畑　孝市	石川県能美郡根上町	養　豚	地域との調和をめざすわが経営
	佐藤　弘子	長野県飯山市	養　豚	無我夢中で進んだ私の養豚経営－水害を乗り越えて－
	掛川銘柄豚振興協議会	静岡県掛川市	養　豚	ひと味ちがったおいしさ自慢！銘柄豚「かけがわフレッシュポーク」

※　大家畜部門最優秀賞　中島　薫　氏は平成１０年度畜産大賞経営部門特別賞を受賞。

〔平成１０年度〕

開催期日：平成１０年９月２５日

開催場所：東京都目黒区大橋　こまばエミナース

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	島仲　治伸	沖縄県八重山郡竹富町	肉用牛	親から受け継いだ牛飼いの道－放牧による低コスト経営を目指して－
優 秀 賞	千葉　正勝	岩手県下閉伊郡岩泉町	酪　農	草作り、牛作りで低コスト生産
	村田　信雄	富山県富山市	肉用牛	粗飼料自給率１００％を達成している大型肉用牛肥育経営
	瓜生　貞之	福岡県嘉穂郡筑穂町	肉用牛	自給飼料利用による良質牛肉の生産

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	山口　一広	愛知県宝飯郡御津町	養　豚	地域に融合した持続的養豚経営
優 秀 賞	山本　郁夫	群馬県吾妻郡中之条町	養　豚	土壌菌を利用し、悪臭防止と良質堆肥の生産を図り、地域密着型養豚経営を目指す
	原　　幸雄	滋賀県彦根市	養　鶏	家族で築いた小規模企業型養鶏
	池端　武一	奈良県北葛城郡広陵町	養　鶏	消費者との対面販売を主体に精密管理を実践した採卵鶏経営

※　大家畜部門最優秀賞　嶋中　治伸　氏は第 38 回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）、平成 11 年度畜産大賞経営部門最優秀賞を受賞。

〔平成１１年度〕

開催期日：平成１１年１０月１５日

開催場所：東京都千代田区九段南　九段会館

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	前田　美雪	宮崎県都城市	肉用牛	女性でもやれる肉用牛繁殖１００頭経営－合理的経営で若者の夢を実現－
優 秀 賞	柳沢　明義	長野県木曽郡木祖村	酪　農	私の酪農人生－やればできる粗飼料１００％の山間地酪農－
	川合　省吾	岡山県真庭郡八束村	酪　農	自給飼料の高位生産利用による酪農安定経営の確立
	北崎　敏文	大分県豊後高田市	肉用牛	集落営農の中核的農家の肉用牛繁殖経営

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	七尾　久美	北海道北広島市	養　豚	ゆとりある生活をエンジョイする養豚経営
優 秀 賞	相馬　政春	新潟県新発田市	養　豚	夫婦で築く精密養豚経営
	川満　一郎	沖縄県沖縄市	養　豚	地道に築いてきた養豚経営
	清水　　洋	大阪府茨木市	養　鶏	小規模でも工夫次第－企画と実践で儲かる養鶏経営－

※　大家畜部門最優秀賞　前田　美雪　氏は平成１２年度畜産大賞経営部門優秀賞を受賞。

〔平成１２年度〕

開催期日：平成１２年１０月１３日

開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	川名　正幸	千葉県館山市	酪　農	循環型酪農をめざして －自給飼料生産基盤拡大、環境保全、計数管理のトータルマネージメント－
優秀賞	峯野　　孝	静岡県引佐群引佐町	肉用牛	牛を通じて人と自然の調和した経営を目指して －経営に携わる人々が畜産によって潤い、発展することを理想とする－
	渕上　吉隆	佐賀県杵島郡江北町	肉用牛	Ｆ１肥育で高品質牛肉生産がもたらす高所得・安定経営
	黒木　輝也	宮崎県西都市	肉用牛	“計り”と“パソコン”により、飛躍した肥育経営 －夫婦２人の経営努力の経緯－

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	北栄産業有限会社 市村　栄宗	石川県羽咋郡押水町	養　鶏	衛生管理と生産性向上を追求する環境保全型養鶏
優秀賞	生越　利男	新潟県十日町市	養　豚	夫婦で築く低コスト養豚経営
	有限会社協和養豚 黒藪　光廣	岡山県勝田郡奈義町	養　豚	地域との連携による養豚繁殖・肥育一貫経営の安定化
	有限会社三田鶏園 三田　悌二	栃木県足利市	養　鶏	嘘のないおいしい卵を生産（直売歴１８年、売れる量だけ生産すること）

※　大家畜部門最優秀賞　川名　正幸　氏は第 40 回農林水産祭日本農林漁業振興会長賞（畜産部門）、平成 13 年度畜産大賞経営部門優秀賞を受賞。

※　中小家畜部門最優秀賞　北栄産業有限会社 市村栄宗　氏は第４０回農林水産祭天皇杯(畜産部門)、平成１３年度畜産大賞および経営部門最優秀賞を受賞。

〔平成１３年度〕

開催期日：平成１３年１０月１９日

開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	小　原　春　美 美　鈴	大分県速見郡山香町	酪農	三代続く本物の酪農経営
優秀賞	青　木　雄　治 佐知子	埼玉県大里郡妻沼町	酪農	「牛づくり、草づくり、土づくり」日本一の酪農経営を目指して
	山　下　芳　明 広　子	鳥取県東伯郡大栄町	酪農	地域と共に歩む酪農経営
	池　田　　寛 富美子	岡山県津山市	肉用牛繁殖	水田基盤に立脚した肉用繁殖雌牛１００頭規模経営の確立を目指して

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	有限会社畠中育雛場 畠　中　兼　雄	福岡県嘉穂郡穎田町	育雛 採卵	経営を育雛から採卵・直売と多角化し、高付加価値化商品の開発とインターネットなどを活用した販売の取り組み
優秀賞	農事組合法人三沢農場 山　崎　　伸	青森県三沢市	養豚	地元食肉処理センターを核としたセーフティーポークの安定生産と流通を システム化した大規模経営
	黒　木　章　夫	宮崎県日向市	養豚	生産技術の確立により高所得経営へ！～負債農家からの脱却～
	有限会社杉山養鶏場 杉　山　哲　朗	静岡県御殿場市	採卵鶏	親しまれて、こだわりの「小さなタマゴやさん」 －安全・安心・愛情一杯・もう一度行きたい店を目指した２３年の軌跡－

※　大家畜部門最優秀賞　小原　春美・美鈴　氏は第４１回農林水産祭天皇杯(畜産部門)、平成１４年度畜産大賞経営部門最優秀賞を受賞。

※　中小家畜部門最優秀賞　有限会社畠中育雛場　畠中　兼雄氏は平成１４年度畜産大賞経営部門優秀賞を受賞。

〔平成１４年度〕

開催期日：平成１４年１１月１８日

開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

（大家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	藤　岡　数　雄 藤　岡　美江子	鹿児島県曽於郡大崎町	肉用牛繁殖	「低コスト化」追求で安定経営を築く子牛生産 －楽しい牛飼い人生を息子たちに－
優秀賞	木　戸　卓　仁 木　戸　和　子	兵庫県宝塚市	酪農・肉用牛肥育	20年後も、酪農家であり続けるために －地域ブランドに支えられ、都市近郊で展開する乳肉複合メガファーム－
	奥　野　吉　雄 奥　野　アキエ	宮崎県小林市	酪農	西南暖地に根付かせた堅実な酪農経営 －自家育成の改良と自給粗飼料の確保－
	白　岩　　修	愛媛県北宇和郡三間町	肉用牛肥育	家族経営を核とした地域一貫経営体制によるＦ1生産への挑戦

（中小家畜部門）

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	有限会社小林ファーム 小　林　勝　彦	三重県亀山市	養豚	消費者との交流と声が育てる養豚経営
優秀賞	長崎県開拓農協南部種豚改良組合「紅葉会」	長崎県西彼杵郡多良見町	養豚グループ活動	″雲仙うまか豚「紅葉」″小さな養豚集団が成し遂げた地場消費の拡大と銘柄定着
	農業生産法人黒富士農場 向山　茂徳	山梨県中巨摩郡敷島町	養鶏	消費者と環境保全を重視する採卵養鶏

※　大家畜部門最優秀賞　藤岡　数雄・藤岡　美江子　氏は第４２回農林水産祭天皇杯(畜産部門)、平成１５年度畜産大賞経営部門最優秀賞を受賞。

〔平成１５年度〕

開催期日：平成１５年１１月７日

開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	大矢根　督	北海道網走郡津別町	酪農	放牧等自給飼料の高度利用による高収益家族酪農経営 －土づくり・草づくりを基本としたゆとりある中規模酪農経営－
	長友　　明 長友　真理子	宮崎県宮崎市	肉用牛繁殖	遊休地を活用し経営規模拡大を目指す都市近郊肉用牛経営 －「頭と体を使うと肉用牛経営は儲かる」を夢に－
	有限会社 大窪養豚	鹿児島県肝属郡高山町	養豚	自信と責任もてるブランド「かごしま黒豚」の生産をめざして
	株式会社 地主共和商会	三重県多気郡勢和村	採卵鶏	常に新しい夢にチャレンジ －若者に魅力のある自作農家になりたいと願って－
優秀賞	山之内　浩一	新潟県北魚沼郡広神村	酪農	親子2代で築いた豪雪地域に根ざす安定酪農経営
	高橋　英雄 高橋　ナミ	大分県玖珠郡玖珠町	肉用牛繁殖	夢がかなった肉用牛繁殖経営 －増頭の道しるべとなる－
	菅原　健一 菅原　宏子	新潟県村上市	肉用牛肥育	妻と二人で築いた「村上牛」と「岩船米」作りの複合農業
	桜井　富佐子	新潟県北魚沼郡広神村	養豚	名物かあちゃんと家族で築く低コスト養豚経営
	日野出畜産 有限会社	愛媛県八幡浜市	養豚	“こだわり”の豚肉生産を目指して
	有限会社 北群ファーム	群馬県利根郡新治村	採卵鶏	規模拡大を山間地に求め創意工夫で難局を克服
	森長　克忠 森長　真弓	徳島県名西郡神山町	肉用鶏	地域と調和した山間地域での養鶏経営
	有限会社オコッペフィードサービス	北海道紋別郡興部町	酪農グループ活動	生産現場の知恵と意志が家族経営の限界をやぶった －有限会社オコッペフィードサービスの実践－

※　大矢根　督　氏は第４３回農林水産祭内閣総理大臣賞(畜産部門)を受賞。

※　長友　明・長友　真理子　氏は第４３回農林水産祭日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）、平成１６年度畜産大賞経営部門優秀賞を受賞。

〔平成１６年度〕

開催期日：平成１６年１０月２９日

開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	遠藤　昭男 遠藤 美智子	北海道標津郡中標津町	酪農	フリーストール方式の効率的な自給飼料活用によるゆとりある高収益経営
	石賀 博和 石賀 恵子	岡山県真庭郡川上村	肉用牛繁殖	地域資源を生かした低コスト肉用牛繁殖経営
	有限会社 大隅ポーク	鹿児島県曽於郡大隅町	養豚	高い生産性・収益性を生む養豚経営の実践
	有限会社 旭養鶏舎	島根県大田市	養鶏	採卵養鶏一途に３５年 －コスト削減より安心安全な鶏卵生産を目指して－
優秀賞	有限会社フジタファーム	新潟県西蒲原郡岩室村	酪農	耕畜連携による地域一体型農業の推進で食の安全と本物の味を消費者へ ～水田探索地域における酪農経営への展開方策～
	原澤　典雄 原澤かよ子	群馬県利根郡新治村	肉用牛繁殖	夏山・冬里方式の導入で「ゆとりある繁殖複合経営」の実現 ～放牧で得られた余剰労力を他部門に活かした和牛繁殖経営～
	手塚　　正 手塚　優子	栃木県塩谷郡氏家町	肉用牛肥育	安心、安全な牛肉を低コストで消費者へ
	酒井　和昭 酒井　陽子	埼玉県大里郡岡部町	肉用牛肥育	兄弟で取り組む地域農業循環型肉用牛肥育経営
	村田　信雄 村田　秋美	富山県富山市	肉用牛肥育	大規模稲作との複合を目指す肉用牛経営
	有限会社ゲズント農場	北海道虻田郡豊浦町	養豚	ゲズント！―おいしさと安全への熱い想い 法人化、SPF化、そして、緻密な飼養管理と徹底した計数分析による、高位生産性と安定経営の実現、さらに、「ゲズンド農場産SPFポーク」の実現
	横田　清廣 横田サチ子	長崎県南高来郡深江町	肉用鶏	家族経営によるゆとりある肉用鶏専業経営 ～家族経営協定でサラリーマンを超える所得の実現～
	はぐくみ農業協同組合 国府酪農部	群馬県群馬郡群馬町	組織 グループ活動	完全協業システムを取り入れた自給飼料生産と合理的分配方式 ～地域に根づいた都市近郊畑作地帯の自給飼料給与型酪農の実践～

※　石賀 博和・石賀 恵子　氏は第４４回農林水産祭天皇杯(畜産部門)、平成１７年度畜産大賞経営部門最優秀賞を受賞。

※　遠藤　昭男・遠藤 美智子　氏は第４４回農林水産祭内閣総理大臣賞(畜産部門)を受賞。

※　有限会社　大隅ポーク　は第４４回農林水産祭日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）、平成１７年度畜産大賞経営部門優秀賞を受賞。

〔平成１７年度〕

開催期日：平成１７年１０月２０日

開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	柴田　輝男 柴田　誠子	秋田県由利本荘市	酪農	地域社会と調和しながら確立した草地型酪農
	佐藤　貢 佐藤　雪子	北海道沙流郡平取町	肉用牛一貫	自給飼料を最大限に生かし、省力管理によって黒毛和種の大規模一貫経営を確立した家族経営
	三留　武	神奈川県三浦郡葉山町	肉用牛肥育	資源循環型環境にやさしい高級牛肉生産！
	有限会社　横山養豚	神奈川県横浜市	養豚	都市と共存できる養豚経営の確立
優秀賞	農事組合法人　箸荷牧場	兵庫県多可郡加美町	酪農	農村活性の町、「加美町」の中心で“農業振興”をさけぶ！！ ～地域農業の担い手のリーダーとして～
	有限会社　小野田牧場	愛媛県西予市	酪農	地域農業とともに歩む放牧を利用した酪農経営
	農業生産法人 有限会社　大海	沖縄県宮古島市	肉用牛繁殖	宮古地域の肉用牛振興を担う、先進的肉用牛繁殖経営
	漆間　　平 漆間　マリ子	新潟県村上市	肉用牛肥育	和牛を肥育して32年・最愛の人にありがとう
	本宮　　環 本宮　章加	愛媛県今治市	肉用牛肥育	地域と密着した肉用牛一貫経営の取組み ～酪農家・耕種農家との連携～
	有限会社 ブラウンエッグファーム	長野県佐久市	採卵鶏	日本で一番笑顔のあふれるたまご屋をめざして
	山下　　盛通 山下　恵美子	三重県松阪市	採卵鶏	地域と共に歩む養鶏経営
	農事組合法人 尾鈴豚友会	宮崎県児湯郡川南町	養豚 グループ活動	飼料事業の共同化をバネに高生産性・安定経営に成長した尾鈴豚友会グループ

※　柴田　輝男・柴田　誠子　氏は第４５回農林水産祭天皇杯(畜産部門)を受賞。

※　佐藤　貢・佐藤　雪子　氏は第４５回農林水産祭日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）を受賞。

〔平成１８年度〕
開催期日：平成１８年１１月２日
開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	佐藤　智好 佐藤 さくら	北海道足寄郡足寄町	酪農	多額負債からの脱却と「ゆとり」経営の確立
	田口　正一	新潟県長岡市	肉用牛肥育	借入金ゼロに向かって努力を続けてきた和牛肥育経営
	有限会社 中村牧場	佐賀県唐津市	肉用牛肥育	「佐賀牛」の低コスト生産プロジェクト
	有限会社 冨田養鶏場	愛知県豊橋市	採卵鶏	One & Only のたまごを目指して －ＨＡＣＣＰに基づいた生産・販売一貫システムの確立－
優秀賞	松原　久美 松原 たみえ	岩手県岩手郡雫石町	酪農	持続的酪農と６次産業化プランで高位安定経営を実現
	土屋　貴志	長野県上水内郡信濃町	酪農	私の酪農経営 －楽で自由でおもしろい酪農経営をめざして－
	久保　峰夫 久保 富士子	広島県広島市	酪農	量より質を －プライベート・ブランド「久保峰夫牛乳」の生産－
	藤原　久義	徳島県三好市	肉用牛繁殖	山地の急傾斜地を放牧利用した和牛繁殖経営
	齋藤農園	群馬県前橋市	養豚	混住化地域で環境に配慮した黒豚生産と地域に根ざした養豚経営
	有限会社 臼井農産	神奈川県厚木市	養豚	安心して美味しく食べられる豚肉生産
	中条　　健	新潟県燕市	養豚	地域の若手リーダーとして魅力ある養豚経営と活性化を目指して
	冨永　　治 冨永　悦子	愛知県喜多郡内子町	養豚	家族で行う地域と一体化したＳＰＦ養豚経営

※　有限会社　冨田養鶏場は第４６回農林水産祭日本農林漁業振興会長賞（畜産部門）を受賞。

〔平成１９年度〕
開催期日：平成１９年１１月２日
開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラルホテル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	小林　治雄 小林 富士子	北海道中川郡中川町	酪農	家族で楽しむ酪農生活　－持続可能なシンプル経営－
	増田　純一 増田　哉枝	宮崎県宮崎郡清武町	肉用牛繁殖	33 年をかけ多頭経営を築き上げたモデル的肉用牛繁殖経営 ～極めて堅実な経営方針こそ着実な増頭につながる～
	農事組合法人 松永牧場	島根県益田市種村町	肉用牛一貫	国内食品残渣を活かした大型畜産経営の確立
	有限会社石井養豚センター	徳島県名西郡石井町	養豚経営	生産効率よりも品質にこだわった養豚一貫経営
優秀賞	戸辺　久夫 戸辺 まちよ	茨城県久慈郡大子町	酪農	夢を求めて
	新海 益二郎 新海　尚子	長野県南佐久郡南牧村	酪農	私の酪農経営　～ 家族を愛し、乳牛と共に歩む ～
	弓削牧場	兵庫県神戸市北区山田町	酪農	「論より食！　農場で人を癒す、都会の牧場を現代の桃源郷に!!」 チーズづくりで切り開いた市街地の酪農経営
	有限会社 グリーンストック八幡	大分県玖珠郡玖珠町	肉用牛繁殖	コントラクターで地域を支え飼料の完全自給を目指す肉用牛経営
	山城畜産組合	沖縄県国頭郡伊江村	肉用牛繁殖	親子三代で築いた、肉用牛繁殖経営 ～地域特性に根ざした経営を目指して～
	有限会社　江原養豚	群馬県高崎市上滝町	養豚	The 無投薬豚へのチャレンジ《抗生物質・合成抗菌剤完全不使用》 －「次世代に贈ります」健やかなライフスタイルと信頼を！－
	吉澤 博文	新潟県南蒲原郡田上町	養豚	高い生産技術と営業努力が実を結んだ養豚経営
	村田　重則 村田　里枝	石川県七尾市能登島別所町	養豚	地域ぐるみで耕畜連携を推進する養豚経営

※　農事組合法人 松永牧場は第４７回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞。

〔平成２０年度〕
開催期日：平成２０年１１月７日
開催場所：東京都港区虎ノ門　虎ノ門パストラルホテル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	鷲頭　栄治 鷲頭　洋子	大分県玖珠郡	肉用牛 繁殖	経営条件を活かした肉用牛から６次産業への展開 〔肉用牛を基盤とした農家レストランなどの取り組み〕
	有限会社　藤原牧場	宮崎県児湯郡	肉用牛 肥育	地域資源活用型／低コスト肉用牛肥育経営 ～飼料価格高騰に対応するモデル的な取り組み～
	株式会社　南勢養鶏	三重県度会郡	採卵鶏	地域に根ざした採卵経営の実践 ～地元で生まれ育った信頼の経営～
	有限会社　熊野養鶏	愛媛県四国中央市	採卵鶏	「元気な鶏から最高のたまごが生まれる」をモットーに直販の実践
優秀賞	菊地　光男 菊地　イチ	北海道厚岸郡	酪農	大好きな牛飼いを次世代へとつなぐ ～パートナーと牛たちにやさしい酪農をめざして～
	細越　真利雄	長野県南佐久郡南牧村	酪農	酪農経営の高位安定へ向けた取り組み
	二若　信彦	岡山県真庭市	酪農	遊休農地を活用したジャージー牛経営　―高品質牛乳生産―
	八木山草地利用組合 渡辺　徹	新潟県東蒲原郡	肉用牛 繁殖	共同作業を基盤とした畜産基地入植者の和牛繁殖経営 ～地域農業活性化に向けた大きな役割を担って～
	大坪　　操 大坪　秀子	佐賀県佐賀市	肉用牛 繁殖	酪農経営からの肉用牛経営への転換　～「か・き・く・け・こ」の実践～
	ＵＫＵカーフクラブ	長崎県佐世保市	肉用牛 繁殖	牛が主人公の島づくり 人口哺乳による多頭化と発育の向上を目指して
	有限会社マルナガファーム	島根県江津市	養豚	生産性（繁殖成績）向上で堅実な養豚一貫経営 ～適材適所でモチベーションアップ～
	株式会社　オクノ	兵庫県加古川市	採卵鶏	「信頼と絆」で広がる地産地消の輪 ～生産者主導の販売展開による100%有利販売の実現～

※　鷲頭栄治・洋子夫妻は第４８回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞。

〔平成２１年度〕
開催期日：平成２１年１１月２日
開催場所：東京都文京区湯島　東京ガーデンパレス

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	生駒　一成 生駒　薫	岐阜県加茂郡富加町	酪農	ゆとりある乳肉複合経営を目指して！！
	松崎　隆 松崎　まり子	岡山県岡山市	酪農	今の私たち、酪農家冥利に尽きます！ ～市街化が進む中、土地循環型酪農で目指した地域のオアシス～
	有限会社 金子ファーム	青森県上北郡七戸町	肉用牛 肥育	地域と共存した資源循環型大規模畜産への挑戦 ～『三方良し』（消費者・生産者・地域社会）の商人道精神に根ざして～
	曽山　文彦 曽山　照代	宮崎県西諸県郡高原町	養豚	人工授精技術を取り入れたモデル的養豚経営 ～家族で育てる「我が子」豚～
優秀賞	久保　隆幸 久保　美恵子	北海道紋別郡湧別町	酪農	地域に根ざした家族酪農 ～自然体で高レベル経営を実現～
	髙田　茂 髙田　静子	埼玉県児玉郡上里町	酪農	乳質改善と乳牛改良を求めて ～都市近郊型酪農経営で行う粗飼料生産～
	須藤　裕紀 須藤　陽子	千葉県館山市	酪農	創り出す喜び・まきばライフ ～未来へChallenge～
	神田　豊広 神田　麻子	新潟県阿賀野市	酪農	優れた生産技術が生み出す高品質牛乳の直販を取り入れた酪農経営
	吉井　英之	兵庫県朝来市	酪農	生乳の加工直販主体の新たな酪農経営を切り拓く！ ジャージー牛10頭の牧場で売上高４千万円の酪農経営
	大松　修二 大松　法子	徳島県阿波市	酪農	飼料生産基盤の脆弱な地域における「安定とゆとり」を追求した酪農経営
	株式会社 多田ファーム	愛媛県大洲市	養豚	苦境に打ち勝つ養豚経営 ～枝肉出荷2000㎏を目指して～
	有限会社 鈴鹿ポートリー	三重県鈴鹿市	採卵鶏	低炭素社会に向けた養鶏モデル経営の挑戦

※　松崎隆・まり子夫妻は第４９回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞

〔平成２２年度〕
開催期日：平成２２年１１月８日
開催場所：東京都港区芝公園　機械振興会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	榛澤　保彦 榛澤　恵美子	北海道釧路市	肉用牛 一貫	未利用資源の活用と「土-草-牛」が調和して高い飼料自給率を実現した、環境にやさしい牛肉生産の取り組み
	大井　幸男	岐阜県羽島市桑原町	酪農	データを活用した経営改善　高次元の経営をめざす！！ ～経営改善から生まれた「ゆとり」を地域貢献に活かす～
	株式会社　西垣養鶏場	兵庫県豊岡市但東町	採卵鶏	「本当に美味しい農産物を消費者に届けたい！」 地域農産物の６次産業化で過疎化地域の活性化を図る 山の中の行列店　”たまごかけご飯専門店「但熊（たんくま）」”
	有限会社　黒木養豚	鹿児島県肝属郡肝付町	養豚	高い生産性・収益性の実践と多様なニーズに応えられるかごしま黒豚の生産を目指して
優秀賞	有限会社　リゲルファーム	北海道紋別郡遠軽町	酪農	地域資源を万遍なく利用して、地域に適合して地域に優しい、地域と歩む大型酪農経営の展開
	渡辺　健介 渡辺　恵子	福島県伊達郡川俣町	肉用牛 繁殖	遊休資源を活かした中山間地域における私の「肉用牛繁殖経営」５ヵ年のあゆみ！ ～０頭からの増頭戦略～
	有限会社　三喜鶏園	群馬県高崎市下里見町	採卵鶏	こだわりたまごで挑んだ６次産業化 ～卵価に左右されない安定経営を目指して～
	関　　克史	新潟県長岡市	肉用牛 一貫	新潟県中越大震災からの復興への道のり ～美しい故郷で日本一の牛作りを目指して～
	網野　一雄 網野　喜久美	長野県伊那市	酪農	親から子へ　ゆとりと資源循環型の酪農経営をめざして
	有限会社　河井ファーム肉よし	三重県志摩市阿児町	養豚	美味しさは健康な豚から、安全は基本に忠実な防疫意識から ～地元に愛される豚肉『パールポーク』に夢を託して～
	有限会社　関紀産業	大阪府泉佐野市	養豚	家族・仲間と築くエコブランド豚「川上さん家（ち）の犬鳴豚（いぬなきぶた）」
	永禮　淳一 永禮　明美	岡山県津山市	酪農	改革の序章　粗飼料地産地消への大転換 ～　０　→　１００　（零から百へ）　～

※　株式会社　西垣養鶏場は第５０回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞
※　有限会社　黒木養豚は第５０回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞

〔平成２４年度〕
開催期日：平成２５年３月７日
開催場所：東京都港区芝公園　機械振興会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	有限会社広野牧場	香川県木田郡三木町	酪農	経営管理の徹底による超効率経営でゆとりと地域活性化を実現
	関　克史	新潟県長岡市	肉用牛 一貫	震災を乗り越えた若き牛飼いの道のり ―美しい故郷で日本一の牛作りを目指して―
	有限会社哲多和牛牧場	岡山県新見市	肉用牛 一貫	地域資源フル活用で、地域を支える肉用牛牧場
	横田　清廣 横田　サチ子	長崎県南島原市	肉用鶏	雲仙普賢岳噴火災害で全てを失うが再起を誓い、 家族の経営参画で３億円を売り上げる
優秀賞	株式会社Ｔ・ユニオンデーリィ	福島県本宮市	酪農	Ｔ・から始める酪農 ―原発事故によって浜通りから中通りに経営移転―
	有限会社安瀬平牧場	広島県三次市	酪農	新規就農を支援する酪農経営 ―新たな経営継承にむけての一つの手法―
	高原　和光	長崎県南島原市	酪農	雲仙普賢岳噴火災害から共同で農用地を集積し酪農を再開
	埼玉県武州和牛組合	埼玉県本庄市	肉用牛 グループ	強力なリーダーシップと地域仲間の信頼で作り上げた埼玉ブランド「武州和牛」
	大吉商店株式会社	滋賀県高島市	肉用牛肥育	地域資源を有効活用し、地域から世界に羽ばたく
	有限会社中野目畜産	福島県西白河郡泉崎村	養豚	地域の養豚経営と歩んだ復興 ―自身の農場再建の取り組みや食肉製品販売店舗が直面した課題と被災地域の活性化に向けた活動など―
	新生養豚プロジェクト協議会	宮崎県児湯郡川南町	養豚 グループ	『特定疾病フリー』で新しい産地を目指す『新生養豚プロジェクト協議会』の取り組み
	株式会社会津地鶏ネット	福島県会津若松市	養鶏 グループ	原発事故による風評被害からの脱却を目指す会津地鶏

※　横田清廣・サチ子夫妻は第５２回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞

〔平成２５年度〕
開催期日：平成２６年3月２６日
開催場所：東京都千代田区　日比谷コンベンションホール

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	村山　昭雄 村山　裕子	北海道足寄郡足寄町	酪農	苦農から酪農（楽農）への道のり ―酪農歴50年を目指して―
	佐藤　宏弥 佐藤　博子	茨城県常総市	肉用牛 一貫	水田活用で広がるドリームファームの歩み ―『常陸牛』率100％の一貫経営―
	向　靖弘	広島県神石郡神石高原町	肉用牛 一貫	自分の肥育素牛は自分で造る。肥育経営から始める、和牛繁殖・肥育一貫経営
	有限会社鈴木養鶏場	大分県速見郡日出町	採卵鶏	人・鶏・環境いやさしい経営による地域農業の活性化を目指して
優秀賞	村田　一浩 村田　美幸	北海道広尾郡足寄町	酪農	「草から搾る」をモットーに経営収支を改善 ―既存経年チモシー牧草地へのペレニアルライグラス追播による草地植生改善―
	佐藤　弘	秋田県雄勝郡羽後町	肉用牛 繁殖	耕畜連携による粗飼料生産が経営改善の糸口になる
	有限会社 三重カドワキ牧場	三重県四日市市	肉用牛 肥育	カドワキ流肉用牛一貫経営 ―４本の矢で父の遺志を受け継ぐ６次化への道―
	有限会 社中村ファーム	長野県千曲市	養豚	環境問題に取り組みながらHACCPを取り入れた、私の養豚経営

※　佐藤宏弥・博子夫妻は第５３回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞

〔平成２６年度〕
開催期日：平成２６年１１月１４日
開催場所：東京都千代田区　日比谷コンベンションホール

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	佐藤　匠	秋田県大仙市	肉用牛 繁殖	飼養管理技術の確立と資源循環型畜産への取り組み
	有限会社　星種豚場	栃木県那須郡那賀川町	養豚	消費者ニーズを重視した種豚改良と、そこから派生した六次化への取り組み
	東の匠SPF豚研究会	千葉県香取郡東庄町	養豚	安全安心を届ける新ブランド肉豚で町おこし ー大利根の大地が育んだ豚「東の匠SPF豚」ー
	アルム　株式会社	岡山県赤磐市	採卵鶏	養鶏事業の多様性を切り拓く！　（人とたまごの未来づくり）
優秀賞	有限会社　渡辺ファーム	宮城県角田市	酪農	東日本大震災からの復興、そして次の世代へ...
	合同会社　久井高原牧場	広島県三原市	酪農	第三者継承による安定した酪農経営の継続
	長與　和則 長與　輝代	長崎県東彼杵郡波佐見町	肉用牛 肥育	中山間地域における手作り牛舎による低コスト肥育経営の実践
	有限会社　松葉ピッグファーム	三重県いなべ市	養豚	昭和の庭先養豚から平成の６次産業化への道 ～親から受け継ぎ、子に引き継いだ養豚経営～
特別賞	長谷部将一	宮崎県児湯郡高鍋町	肉用牛 一貫	銘柄牛肉への取り組みと口蹄疫からの復興・再生

※　有限会社　星種豚場は第５４回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞

〔平成２７年度〕
開催期日：平成２７年１１月１２日
開催場所：東京都千代田区　日比谷コンベンションホール

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	株式会社竹信牧場	岡山県笠岡市	酪農	干拓地におけるトウモロコシ二期作生産による大規模酪農への挑戦
	黒木　松吾 黒木　小夜子	宮崎県串間市	肉用牛 繁殖	アンテナ高く、垣根は低く、一歩先を行く攻めの経営
	有限会社コマクサファーム	岩手県八幡平市	養豚	マルチサイトシステム
	農事組合法人 会田共同養鶏組合	長野県松本市	採卵鶏	環境のふるさと作りを目指した養鶏 ―目標：農業を営んで人生の意義と幸福を体得する！―
優秀賞	安達　政弘 安達　敏子	茨城県笠間市	肉用牛 肥育	高度な管理で臨む常陸牛生産 （経営管理で未来を見つめる）
	有限会社細川農興	秋田県横手市	養豚	繁殖技術改善による繁殖成績の向上
	有限会社　一志ピックファーム	三重県津市	養豚	「日本一美味しい豚肉の創造で共に幸せになる」をモットーに
	有限会社大成畜産	鹿児島県曽於市	養豚	地域ブランド認証品目の産地形成確立と信頼される「美味豚の探求」

※　農事組合法人　会田共同養鶏組合は第５５回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞
※　有限会社　コマクサファームは第５５回日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）を受賞

〔平成２８年度〕
開催期日：平成２８年１１月２２日
開催場所：東京都港区芝公園　機械振興会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	守谷　　学 守谷　恵里	北海道宗谷郡猿払村	酪　農	後輩農業者を育てながら、自給飼料を生かした先進的酪農経営に挑むー放牧を取り入れたフリーストール酪農の実践ー
	有限会社　髙秀牧場	千葉県いすみ市	酪　農	中山間地域における国産飼料資源での自給率向上への挑戦（地域農業とともに歩む循環型酪農と６次産業化の中で）
	株式会社　玉牧場	鹿児島県霧島市	肉用牛 繁殖	肉用牛の発育・生理を考慮した施設整備・飼養管理技術が高収益性を実現ー幅広い情報収集・共有化と細やかな心配りで家族の夢を叶えるー
	有限会社　香川畜産	宮崎県児湯郡川南町	養　豚	口蹄疫からの復興と地域貢献
優秀賞	生駒　一成 生駒　　薫	岐阜県加茂郡富加町	酪　農	ゆとりある乳肉複合経営を目指して　PART2 ～全国優良畜産経営管理技術発表会を経験して～
	株式会社　桑原畜産	佐賀県嬉野市	肉用牛 肥育	中核企業としてブランド牛『佐賀牛』の生産と食肉販売等による地域振興への取組み
	種村　繁徳 種村　フサ子	長崎県島原市	肉用牛 一貫	酪農経営から議員活動と黒毛和種の経営内一貫経営による地域振興を目指して
	有限会社　日笠農産	岡山県津山市	養　豚	こだわり黒豚の生産・加工・流通一貫経営、消費者の声で品質向上！

※　有限会社　香川畜産は第５６回天皇杯（畜産部門）を受賞
※　株式会社　玉牧場は第５６回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞

〔平成２９年度〕
開催期日：平成２９年１１月３０日
開催場所：東京都港区　機械振興会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	牧舎みねむら 峯村　誠太郎 峯村　伊世	長野県東御市	肉用牛 一貫	家族と牛の「しあわせ」を目指して 家族経営の利点である、チームワークと各々のスキルを活かした卓越した繁殖肥育一貫経営
	農事組合法人 伍協牧場	岡山県勝田郡奈義町	肉用牛 一貫	三世代にわたって歴史を刻む協業経営 ～地域と連携して協業と個別経営を両立させる多様な取組～
	株式会社 五十嵐ファーム	山形県鶴岡市	養豚	飼料米利用による養豚経営の改善と、堆肥を利用したアスパラガスを主体とした野菜の栽培と六次化による経営改善
	近藤畜産 近藤　武雄	新潟県新潟市	養豚	家族で展開する地域に根ざした養豚６次産業化の取り組み
優秀賞	岩見　智成	大分県日田市	酪農	”牛と人と地域”の能力を最大限に引き出す基本に忠実な酪農経営
	佐藤　綾	山形県飽海郡遊佐町	肉用牛 繁殖	綿密な飼養管理と減反田を活用した十分な粗飼料確保による繁殖成績の向上および堅実な規模拡大を目指して
	有限会社 秋吉台肉牛ファーム	山口県美祢市	肉用牛 一貫	中山間地域におけるエコフィードとＷＣＳを活用した地域密着型国産牛肉一貫経営 ～地域に愛される秋吉台高原牛ブランドづくりを目指して～
	有限会社横山養豚	神奈川県横浜市	養豚	都市型養豚として環境や地域貢献に注力 ３人の後継者と共に更なる規模拡大を目指す

※　牧舎みねむら　峯村誠太郎・伊世夫妻は第５７回農林水産祭内閣総理大臣賞（畜産部門）を受賞
※　株式会社　五十嵐ファームは第５７回農林水産祭日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）を受賞

〔平成３０年度〕
開催期日：平成３０年１１月２７日
開催場所：東京都港区　機械振興会館

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	きもつき大地 ファーム株式会社	鹿児島県鹿屋市	肉用牛 繁殖	肉用牛1,000頭の大規模繁殖経営における分業体制の構築 ～肉用牛繁殖と子牛育成の分業体制による繁殖牛生産基盤の維持・拡大に資する～
	株式会社百姓屋	佐賀県伊万里市	肉用鶏	逆境をバネに“挑戦と工夫”でブロイラー経営 ～百姓屋に夢をのせて～
	有限会社安富牧場	岡山県岡山市	酪農	地域・信頼・思いやり ～消費者に届ける、信頼と安全の酪農を目指して～
	株式会社オーケーコーポレーション	群馬県北群馬郡榛東村	養豚	「むりをしない」「むだをしない」「むらをつくらない」養豚経営の挑戦 ～群馬の中山間地域が育んだ豚「榛名ポーク」～
優秀賞	有限会社中川スワインファーム	大分県豊後高田市	養豚	家畜・地域・消費者・経営に、バランス感覚に富んだ持続可能な養豚経営
	株式会社あずみ野エコファーム	長野県大町市	養豚	エコフィード飼料も活用したブランド肉の 確立と作業効率の向上
	株式会社能登牧場	石川県鳳珠郡能登町	肉用牛 肥育	「能登牛　かわいいよ　能登牛」 ～ニートの僕が牛飼いになって能登牛を全国へ届けたい～
	高橋　正	秋田県横手市	酪農	経営改善に向けて ～飼養規模と個体に合わせた飼養管理の実践～

〔令和元年度（平成３１年度）〕
開催期日：令和元年１１月２５日
開催場所：東京都文京区　東京ガーデンパレス

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	ヨシダファーム有限会社	北海道枝幸郡枝幸町	酪農	計画的な規模拡大と従業員雇用でゆとりある高収益経営 ～家族経営から地域NO.１の酪農法人～
	有限会社花田養豚場	新潟県十日町市	養豚	第三者継承により養豚経営に参画したイケメンTwinsの挑戦 ～仲間とともに広げる地域農業活性化の輪～
	宮崎　陽輔さん 宮崎　　舞さん	佐賀県唐津市	肉用牛 肥育	経営診断が「きっかけ」で儲かる肉用牛肥育経営の実践 ～素牛選定から枝肉出荷まで、全ては肥育成績の詳細分析から始まる～
	株式会社中野ファーム	鹿児島県鹿屋市	肉用牛 繁殖	ICT等を活用した家族で築くゆとりある肉用牛繁殖経営
優秀賞	野脇　広夢	北海道勇払郡むかわ町	肉用牛 繁殖	手間を掛けない飼養管理で高所得を実現 ～繁殖牛１年１産！子牛の早期出荷と高単価販売を実践する経営～
	有限会社小田切畜産	長野県東御市	肉用牛 一貫	地域社会に貢献する愛される牧場をめざして
	荒牧　光博 荒牧　慶子	熊本県阿蘇郡高森町	肉用牛 一貫	阿蘇の草資源を利用した褐毛和種の繁殖・肥育一貫で低コスト経営を実現 熊本県
	末吉　久美 末吉　富美子	長崎県松浦市	肉用牛 繁殖	建設業からの参入による定休型ヘルパーを活用した 「ゆとりある肉用牛繁殖経営」を目指して

〔令和２年度〕
開催期日：令和２年１１月２５日
開催場所：東京都文京区　東京ガーデンパレス

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	久保　拓也 久保　　環	北海道紋別郡湧別町	酪農	Working hours 1920 ～子供たちにカッコイイと思ってもらえる農業がやりたい～
	有限会社飯田養豚場	青森県横浜町	養豚	家族パワーで築く堅実な養豚経営 ―ブランド肉豚「ほろよい豚」の生産拡大をめざして―
	株式会社壱岐ファーム	宮崎県児湯郡新富町	肉用牛 一貫	仲間と共に取り組む黒毛和牛一貫経営の発展 ～肉用牛の新たなビジネスモデルとして～
	森岡　良輔 森岡　恵理香	鹿児島県曽於市	肉用牛 繁殖	両親からのバトン　異業種夫婦の肉用牛繁殖経営への挑戦（取組） ―細やかな飼養管理技術による高収益性を実現―
優秀賞	武熊　俊明 武熊　浩美	茨城県石岡市	養豚	地道なデータ蓄積と、常に前向きにチャレンジし続ける養豚経営
	株式会社渡辺農場	新潟県上越市	肉用牛 一貫	次世代に繋ぐ畜産経営を模索する ～笑顔で働ける、儲かる牛飼いを目指して～
	農事組合法人中国牧場	島根県仁多郡奥出雲町	肉用牛 一貫	地域と共に歩む畜産経営を目指して ―行政と連携した地域への堆肥供給と自然交配を生かした一貫経営を実践―
	有限会社大西海ファーム	長崎県西海市	養豚 肉用牛繁殖	ＪＡ出資法人による「所得増大」、「生産拡大」、そして「地域活性化」への取り組み ～大西海ファームの取り組みは第４ステップへ～

※　森岡　良輔・恵理香夫妻は第６０回天皇杯（畜産部門）を受賞
※　有限会社飯田養豚場は第６０回日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）を受賞

〔令和３年度〕
開催期日：令和３年１１月２６日
開催場所：東京都千代田区　都市センターホテル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	株式会社なごみ農産	山形県天童市	肉用牛肥育	安全で美味しい国産原料 100%飼料の牛肉で地域を活性化 ー地域農家・企業と共に育つ「和の奏（なごみのかなで）」ブランドー
	株式会社小野ファーム	神奈川県横浜市	肉用牛一貫	都市の中での乳肉複合による多角経営 ーゲノミック評価の活用による肉用牛生産の取り組みー
	農事組合法人萩原養豚生産組合	宮崎県都城市	養豚	生き残りをかけた経営基盤の再編 ー進化を続ける「観音池ポーク」ー
	山中 健治 山中 菜美	鹿児島県鹿屋市	肉用牛繁殖	夫婦２人で実現した効率的肉用牛繁殖経営
優秀賞	石田 敦 石田 紀子	北海道別海町	酪農	酪農は天職 ー牛さんにうまい草を腹一杯たべさせたいー
	株式会社鬼や福ふく	新潟県津南町	養豚	フリーストール豚房と ICT 技術による母豚の健康維持と繁殖成績の向上 ー豚の幸せが私たちの幸せですー
	妹尾 始 妹尾 睦美	岡山県岡山市	酪農	これが 家族経営の生きる道
	平川 修 平川 美穂	大分県日田市	肉用牛繁殖	指導員から実践へ、そして、今、家族型肉用牛経営のインフルエンサーへ

〔令和４年度〕
開催期日：令和４年１１月２５日
開催場所：東京都千代田区　都市センターホテル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	農業生産法人株式会社 アイオイ	山形県鮭川村	肉用鶏	ゼロから創めて 40 年、10 億円肉用鶏への挑戦 ～地域の飼料用米を活用したブランド「やまがた最上どり」の確立に向けて～
	倉持ピッグファウム 株式会社	茨城県下妻市	養豚	おいしい笑顔が見たいから ～伝説の下妻金豚～
	株式会社有田牧場	熊本県球磨郡錦町	肉用牛一貫 酪農	地域粗飼料資源をフル活用して資材価格高騰と温室効果ガス削減に挑む
	有限会社髙田牧場	大分県豊後高田市	肉用牛肥育	地域に根ざし、100 年続く経営作り ～伝統的技術の継承と先進的技術の融合～
優秀賞	中野 浩一 様	新潟県新発田市	酪農	酪農を未来につなげる ～循環型農業で地域をひとつに～
	株式会社いちがお畜産	京都府京丹後市	肉用牛繁殖	集落と連携し、景観保全と「丹後牛の里」を実践する法人経営 ～畜産を活かした地域づくり、人づくり、絆づくり～
	守川 仁	熊本県山鹿市	肉用牛繁殖	牛にも人にも優しい！ ～積極的に ICT を活用した肉用牛繁殖経営～
	渕上 浩一 渕上 加奈子	佐賀県杵島郡江北町	肉用牛肥育	がんばる後継者、親父（おやじ）に負けるな！ ～地元での粗飼料調達による低コスト和牛スモール肥育経営の挑戦～

※　株式会社有田牧場は第６２回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞
※　倉持ピッグファウム株式会社は第６２回農林水産祭日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）を受賞

〔令和５年度〕
開催期日：令和５年１１月２９日
開催場所：東京都千代田区　都市センターホテル

受賞種類	受賞者	所在地	畜　種	タイトル
最優秀賞	株式会社蔵王ファーム	山形県山形市	肉用牛 一貫	繁殖から肥育・加工・販売まで一貫体制による安全・安心な牛肉を提供 ー創業から変わらない原点、それは牛への愛情ー
	さかもと養鶏株式会社	奈良県五條市	採卵鶏	若き姉妹が仲間たちと挑戦する「６次産業化」と「ふれあい事業」 ー亡き父が遺した白鳳卵を守るー
	丸山　昭博 丸山　都々子	岡山県真庭市	酪農	日本一のジャージー産地を支えたい ー仲間とともに地に足がついた経営の実践ー
	株式会社上鶴畜産	鹿児島県錦江町	肉用牛 繁殖	夫婦で築いた地域一番の堅実経営 ー夢は後継者へー
優秀賞	成田　芳樹	北海道広尾町	酪農	人も牛もゆとりの放牧酪農
	有限会社福田農場	北海道本別町	肉用牛 肥育	経営中止の危機からの逆転 ー土づくりが生む絶品「美蘭牛　福姫」ー
	有限会社河井ファーム肉よし	三重県志摩市	養豚	豚に真珠で付加価値を！ ー伊勢志摩の自然豊かな中で大切に育てましたー
	植木　俊輔 植木　美和	大分県竹田市	肉用牛 繁殖	大規模化と省力化に向けた三方よし ー牛よし・地域よし・家族よしー

※　株式会社蔵王ファームは第63回農林水産祭天皇杯（畜産部門）を受賞

M E M O

V

令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会開催要領

令和６年度全国優良畜産経営管理技術発表会開催要領

５年度発中畜第5915号
令和６年２月15日

１　趣　旨

公益社団法人中央畜産会（以下「中央畜産会」という。）は、中央畜産会の会員団体等（以下「畜産会等」という。）が行う支援活動を通じて明らかにされた優秀な実績を収めている畜産経営またはグループ（以下「畜産経営」という。）ならびに経営の課題解決に取り組んでいる畜産経営を広く求め表彰するとともに、全国優良畜産経営管理技術発表会（以下「発表会」という。）を開催し、もってこれら畜産経営の成果とそれを支えた経営管理技術の普及拡大に資する。

２　主催者（実施主体）

この発表会は、中央畜産会が主催する。

３　参加資格

１）畜産会等が行う支援活動の対象となった畜産経営であって、以下の条件のいずれか１つ以上を満たすもの。

⑴　優良な実績を収めており、その実績の内容ならびにそれを支える経営管理技術の内容が明確であるもの。

⑵　経営の課題解決のための取り組みを行っており、その取り組みや活動の内容ならびにその過程が明確であるもの。

⑶　個人又は組織の活動における女性の活躍を推進し、又は女性が顕著な貢献をしている取組又は経営管理を行っているもの。

２）当該年度において、他の団体・機関の開催する「農林水産祭」参加行事に出品していないこと。

３）当該年度前２カ年間に農林水産祭参加行事において、出品財「経営」での農林水産大臣賞を受賞していないこと。

４）個別経営における家畜の飼養規模は、以下のとおりとする。

⑴　酪農経営にあっては、経産牛10頭以上。

⑵　肉用牛経営にあっては、繁殖牛・肥育牛５頭以上。

⑶　養豚経営にあっては、80頭以上の経営。ただし繁殖専門経営の場合は、子取りめす豚10頭以上の経営。

⑷　採卵鶏経営にあっては、成鶏700羽以上。
⑸　肉用鶏経営にあっては、年間出荷30,000羽以上。

4　参加畜産経営等の推薦

畜産会等は、参加畜産経営を５の２）の審査の視点に基づき事例を選定し、中央畜産会が別に定める様式により、中央畜産会へ正副２部提出するものとする。

5　審査の方法と視点

１）審査の方法

中央畜産会は、学識経験者等を中心として構成する審査委員会により、畜産会等からの推薦のあった書類に基づき、最優秀事例、優秀事例を選考する。なお、審査委員会が必要と認めた場合は現地確認を行うことができるものとする。

２）審査の視点

審査の視点は、畜産経営の生産性・収益性等の経営実績、それを支える経営管理技術および課題解決のための取り組みや活動の内容、その成果に関する以下の諸点とする。

⑴　経営展開上の合理性、堅実性、普及性、持続・安定性
⑵　地域との融和等に関する合理性、普及性、持続・安定性

6　表　彰

１）表彰の種類

⑴　最優秀事例：農林水産大臣賞　　４点（予定）
　　地方競馬全国協会理事長賞　　４点（予定）
　　中央畜産会長賞（最優秀賞）　　４点
⑵　優 秀 事 例：農林水産省畜産局長賞　　４点（予定）
　　中央畜産会長賞（優秀賞）　　４点
⑶　そ　の　他：審査委員会が特に必要と認める場合
　　中央畜産会長賞（特別賞）　　必要と認める場合

２）表彰の対象

次に掲げる事項のいずれかに該当し、かつ経営主の配偶者の貢献度が高いと認められる個人経営の場合にあっては、夫婦連名で表彰することができるものとする。

ただし、表彰の対象は、農林水産祭参加行事の農林水産大臣賞、農林水産省畜産局長賞、地方競馬全国協会理事長賞、中央畜産会長賞（最優秀賞・優秀賞）および審査委員会が特に必要と認める場合（中央畜産会長賞（特別賞））に限る。

⑴　家族経営協定を締結していること。
⑵　経営主の配偶者の作業分担、経営主の従事日数に対して配偶者の従事日数が概ね５割に達していることが確認できること。
⑶　農業改良普及センターまたは類似の普及指導組織等による意見書が添付されていること。

7　行　事

１）発表会

参加畜産経営者等ならびに畜産会等関係者の参集のもと、令和６年１１月に東京都内において発表会を開催し、優秀な実績および特色ある取り組みや活動内容について普及拡大に資する。

２）農林水産祭への参加

この行事は「農林水産祭」に参加する予定である。

8　費用の負担

この事業に要する費用は、中央畜産会が負担する。

9　告知日

令和６年４月15日

10　その他

本要領に定めのない事項については、中央畜産会会長が別に定める。

協賛団体・企業一覧

全国開拓農業協同組合連合会
全国畜産農業協同組合連合会
一般社団法人家畜改良事業団
一般社団法人全国酪農協会
一般社団法人中央酪農会議
一般社団法人酪農ヘルパー全国協会
一般社団法人日本ホルスタイン登録協会
全国肉牛事業協同組合
日本養豚事業協同組合
一般社団法人日本養豚協会
一般財団法人生物科学安全研究所
公益社団法人日本獣医師会
一般社団法人日本草地畜産種子協会
公益財団法人日本乳業技術協会
公益社団法人日本食肉格付協会
公益財団法人日本食肉生産技術開発センター
公益社団法人全国農業共済協会
公益社団法人畜産技術協会
一般財団法人畜産環境整備機構
一般社団法人日本畜産物輸出促進協議会
日本酪農政治連盟
株式会社農林放送事業団
株式会社イシイ
オリオン機械株式会社
全農畜産サービス株式会社
デザミス株式会社
デラバル株式会社
東西産業貿易株式会社
株式会社中嶋製作所
ヨシダエルシス株式会社
よつ葉乳業株式会社
株式会社コトブキソリューション
株式会社木香書房
京和工業印刷株式会社
株式会社大建情報システム
株式会社日本農業新聞
株式会社博秀工芸
株式会社南日本情報処理センター
日本印刷株式会社

全国開拓農業協同組合連合会

〒102-0093　東京都千代田区平河町１－２－10
平河町第一生命ビルディング６階
TEL (03)6380-8125　FAX (03)6380-8135
http://www.zenkairen.or.jp

全国畜産農業協同組合連合会

〒104-0033 東京都中央区新川2-6-16
Tel 03-3297-5531 Fax 03-3297-5536
東北支所 東京支所 福岡支所
帯広事業所　神戸事業所 南九州事業所
https://www.zenchikuren.or.jp/

畜産の発展に貢献

▶ゲノミック評価で遺伝的能力向上
▶牛群検定の普及・定着と情報発信
▶最新の DNA 型検査と繁殖技術の提供

一般社団法人 家畜改良事業団
〒135-0041　東京都江東区冬木 11-17　イシマビル
TEL：03(5621)8911(代) FAX：03(5621)8917

一般社団法人 全国酪農協会

会　　長　砂金　甚太郎
副 会 長　佐藤　　哲
副 会 長　隈部　　洋
常務理事　三国　　貢

〒151-0053　東京都渋谷区代々木1-37-2　酪農会館５階
TEL03-3370-5341　FAX03-3370-3892

一般社団法人 **中央酪農会議**

会　長　　山野　徹

〒１０１－００４４
東京都千代田区鍛冶町２－６－１
堀内ビルディング４F
TEL　０３－６６８８－９８４１
FAX　０３－６６８１－５２９５
URL　https://www.dairy.co.jp

協会ホームページ

全国の酪農家が
あなたを待っています!!

一般社団法人酪農ヘルパー全国協会

TEL　03（5577）5135　FAX　03（5577）5136
E-mail:　info@d-helper.lin.gr.jp

第16回全日本ホルスタイン共進会
北海道にて開催！！！

JP43813
2025

HP随時更新中……
詳細はこちらから→

JP43813
10/25-26

一般社団法人 日本ホルスタイン登録協会 C.A.J
〒164-0012 東京都中野区本町四丁目38番13号 電話03(3383)2501
北海道支局 〒001-0015 札幌市北区北15条西5丁目1－5 電話011(726)3111

組合への加入を歓迎します！

全国肉牛事業協同組合
理事長　佐々木　信弘

肉用牛及び酪農経営コストを低減し儲かる経営のため、預託、共同購買、福利厚生事業等を実施しています。詳しくはホームページをご覧下さい。

〒１０５－０００３　東京都港区西新橋１－２２－１２　ＪＣビル
ＴＥＬ　０３－３５０３－８３８０　ＦＡＸ　０３－３５０３－８３８２
ＵＲＬ　ｈｔｔｐ／／ｗｗｗ．ｊｃｉｃ－ｆ１．ｊｐ

日本の養豚家を元気にする！日本養豚事業協同組合は生産者による生産者のための組織です。

日本養豚事業協同組合
Japan Swine Farm Business Cooperation
TONJIKYO

〒104-0033 東京都中央区新川 2-1-10 八重洲早川第２ビル６階
TEL:03-6262-8990　FAX:03-6262-8991
URL:https://tonjikyo.or.jp　e-mail:info@tonjikyo.or.jp

JAPANESE
日本豚
JAPANESE PORK

一般社団法人 **日本養豚協会（JPPA）**
JPPA(Japan Pork Producers Association)
会 長 香 川 雅 彦

JPPA

〒 151-0053 東京都渋谷区代々木 2-27-15 高栄ビル 2 階
TEL（03）3370-5473 FAX（03）3370-7937 [URL] http://pig.lin.gr.jp/
「国産豚肉 農場トレーサビリティ」（通称：豚トレ）[URL] http://www.butatrace.com/

RIAS 一般財団法人**生物科学安全研究所**

動物の感染症検査、畜産物の残留検査等を受託しています

★ 牛伝染性リンパ腫、豚繁殖・呼吸障害症候群等の各種感染症検査
（抗体検査、遺伝子検査、細菌検査等）
飼料・畜産物への動物用医薬品等の残留検査、黒豚 DNA 検査、環境毒性試験等
検査の詳細、「料金表」のご要望は、HP の「お問い合わせフォーム」からお願いします

神奈川県相模原市緑区橋本台 3 丁目 7 番 11 号
TEL：042-762-2775(代)　URL：https://www.riasbt.jp

RIAS 検索

いのちみつめる。いのち育む。
公益社団法人 **日本獣医師会**

会　長　藏内勇夫
副会長　砂原和文
副会長　鳥海弘
副会長　栗本まさ子
専務理事　伏見啓二

〒107-0062　東京都港区南青山 1－1－1　新青山ビル西館 23 階
電話　03－3475－1601　FAX　03－3475－1604

飼料作物を地域計画に位置づけよう！

《話題の新品種》

夏ごしペレ	きららワセ	はやまき18	Kyushu1
ペレニアルライグラス	イタリアンライグラス	イタリアンライグラス	イタリアンライグラス

ハヤミノルド	つきはやか	つきあやか	つきすずか
トウモロコシ	極短穂WCS用イネ	極短穂WCS用イネ	極短穂WCS用イネ

一般社団法人 **日本草地畜産種子協会**

〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町８　NCO神田紺屋町ビル

TEL（03）3251-6501　　FAX（03）3251-6507

牛乳・乳製品　おいしさと信頼のために

食品衛生法・登録検査機関

ISO/IEC　17025認定機関

公益財団法人 **日本乳業技術協会**

乳・乳製品の試験・検査、検査技術研修、外部精度管理調査（技能試験）、校正用試料乳の配布などを行っています。

お問い合わせ　：　〒１０２-００７３
東京都千代田区九段北１－１４－１９　乳業会館
TEL　03-3264-1921　FAX　03-3264-1569
Email：info@jdta.or.jp

ホームページ　：　http://www.jdta.or.jp

公益社団法人

日本食肉格付協会

会長　大　野　高　志

〒101－0063
東京都千代田区神田淡路町2－1－2　(NCO神田淡路町 2F)
電 話　03(3257)0220 (代)　　FAX　03(3257)0224
URL:http://www.jmga.or.jp

JAMTI

公益財団法人日本食肉生産技術開発センター
東京都港区赤坂6-13-16（アジミックビル４F）
TEL. 03-5561-0786　FAX. 03-5561-0785

理事長　宮坂　亘

一緒に見つけませんか 農業の明日

安心のネットワーク NOSAI

農業共済新聞

日本全国どんな地方・地域でも
各戸へ郵送される農業専門紙
中央と全国の農家とを
固く結ぶ定期便です

毎週水曜日発行

月ぎめ　四九五円
年ぎめ　五五二〇円（送料共）

ノーサイくん

農業共済獣医師陣唯一の
技術指導専門誌

JOURNAL OF LIVESTOCK MEDICINE
家畜診療

毎月１回・１日発行
頒価　1,000円（送料共）

発行所　公益社団法人 全国農業共済協会
東京都千代田区一番町19番地

E-mail kouhou@nosai.or.jp
☎03（3263）6413

NOSAIの定期刊行物は
こちら

備えの種をまこう。

JLTA 公益社団法人 畜産技術協会
会長　石原哲雄

月刊「畜産技術」
「牧草・毒草・雑草図鑑」
「全国畜産関係者名簿」
「和英・英和畜産用語集」

〒113-0034　東京都文京区湯島3-20-9　TEL 03(3836)2301 FAX 03(3836)2302
https://jlta.jp

ちくかんリースで、日本の畜産を元気に

畜産環境整備機構は、畜産農家の皆さまを機械や施設等のリースで応援しています。また、畜産環境の技術開発や堆肥の分析なども行っています。

https://www.leio.or.jp

一般財団法人 畜産環境整備機構
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-12-1
☎ 03-3459-6300 FAX 03-3459-6315

一般社団法人 日本畜産物輸出促進協会

（認定農林水産物･食品輸出促進団体：認定番号第14号）

Japan Livestock Products Export Promotion Council（J-LEC）

会 長 井 出 道 雄

〒101-0021
東京都千代田区外神田2丁目16番2号（第2ディーアイシービル9F）
TEL：03-5577-5004 HP：http://jlec-pr.jp

牛乳の力・日本の力！

日本酪農政治連盟

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-37-2 酪農会館5F
TEL03 (3370) 1741 (直通) FAX03 (3370) 1779

起源（はじまり）は小さなヒヨコでした

＊ブロイラーひなの生産及び販売
＊ブロイラーの飼養受託及び販売
＊インフルエンザワクチン製造用鶏卵の生産及び販売
＊養鶏機器の輸入・販売及び施工
＊孵卵場機器の輸入・販売及び施工
＊システム鶏舎の建設及び販売
＊ワクチン卵内接種機のシステム契約による技術サービス
＊オーガニックペットフードの輸入及び販売

株式会社 イシイ

〒779-3223 徳島県名西郡石井町高川原字高川原 71 番 1
TEL：088-679-1410 FAX：088-679-1411

受賞者の皆様　おめでとうございます。

がんばる！畜産！8

（公社）中央畜産会の畜産映像情報は２つのメディアでご覧になれます。
（公社）中央畜産会ホームページ　http://jlia.lin.gr.jp/ganbaruchikusan/
BS234ch グリーンチャンネル　毎週月曜～金曜午前７時～７時30分

（株）農林放送事業団

東京都千代田区神田淡路町2-23-2　TEL　03-6260-7617

叶えよう 家族と牛と 豊かな未来

ORION

ORION for DAIRY

哺乳

給飼

搾乳

カーフレールで多回数哺乳を自動化してみませんか？

個体別 自動哺乳ロボット

※カーフレールは、カーフフィーダーとの併用が必要です。

カーフレール

HPでは
導入事例を動画で
ご紹介しています。▶▶

カーフレールは子牛の成長サポートと哺育作業の省力化を同時に実現します。

哺乳頻度や給与時間、ミルクの濃度を自由に設定でき、**増体の促進と健康をサポート**。
哺乳プランを複数設定することで和牛向けの哺乳等にも対応。*1
最大8回/日給与、最大32頭哺乳可能で、自動で多回数哺乳を実施。*2
PCや端末でアプリ（カーフアップGO!）にアクセスし、**いつでも哺乳状況やアラームの確認**が可能。

*1：群飼と個別飼の併用の場合、哺乳プランは制限されます。　*2：機械の最大能力値です。ご使用条件により最大哺乳頭数は変わります。

CalfApp GO!

精密管理　個別のハッチに入った子牛に多回数哺乳でき、哺乳量等も記録できます。

個別哺乳　個体別に哺乳状況を確認できるので、疾病の早期発見に役立ちます。

省力化　ミルクを作る時間や哺乳の時間、哺乳瓶の洗浄時間を自動化できます。

オリオン機械株式会社
www.orionkikai.co.jp

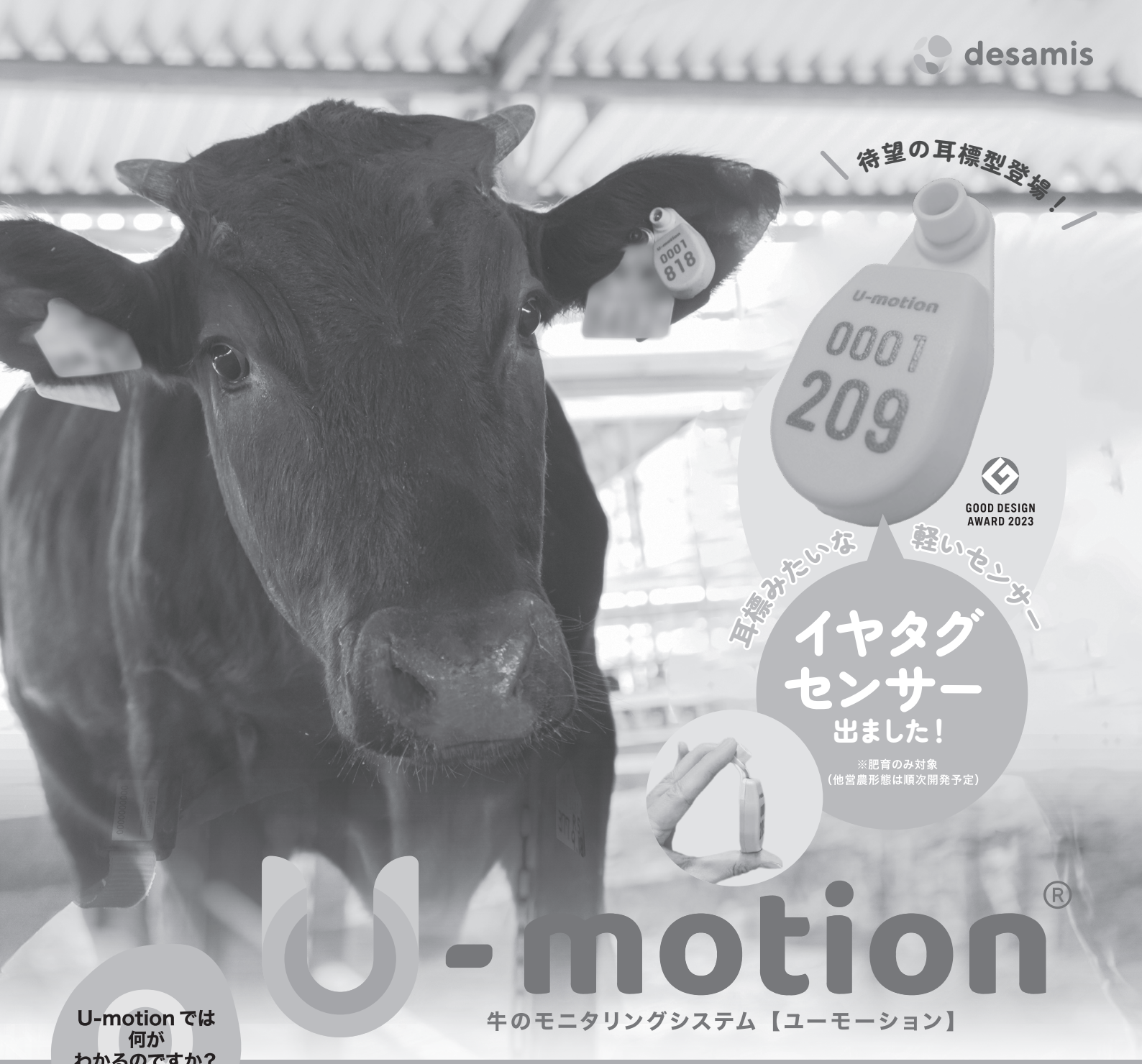
北海道オリオン株式会社　tel.011-865-3111
中央オリオン株式会社　tel.048-522-5395
西日本オリオン株式会社　tel.092-477-8480

Facebook　YouTube

牛乳でスマイル プロジェクト

desamis

待望の耳標型登場！



GOOD DESIGN AWARD 2023

耳標みたいな 軽いセンサー

イヤタグセンサー出ました！

※肥育のみ対象
（他営農形態は順次開発予定）

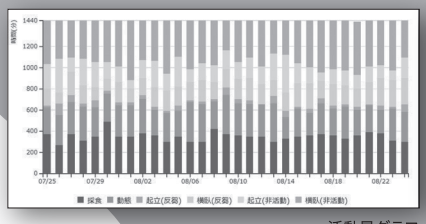
U-motion®

牛のモニタリングシステム【ユーモーション】

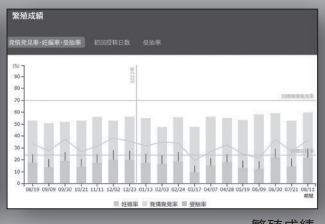
Q U-motionでは何がわかるのですか？

A 疾病傾向・発情兆候 分娩兆候・起立困難 などをおしらせします。

それ以外にも、疾病になりやすい牛をラベリングしてリスト化したり、タイムラインに体調変化やワクチン接種などの記録・コメントを残したりと、牛の観察をサポートする様々な機能を備えています。



活動量グラフ



繁殖成績

タイムライン

牛の１日の行動がグラフで一目瞭然。
餌を食べていない、横になっている時間が長いなどの異変を見える化し、こまめに牛を見る時間がない時の観察をサポートします。

For Veterinarian

U-motion® と情報連携できる獣医師様向けの診療記録・遠隔診療ツールもございます

※発情兆候は酪農、肥育、一貫のみ、起立困難は肥育のみ、分娩兆候はオプションです。

デザミス株式会社
desamis.Co.,Ltd.
〒135-0064 東京都江東区青海 2-7-4 the SOHO 417
TEL：03-6380-7239 Mail：contact@desamis.co.jp
Web：https://www.desamis.co.jp

U-motion をもっと詳しく

U-motion と連携できるサービス

獣医師様の活用シーンも！
U-motion ユーザーの牧場様とのコラボ動画

東西アニマルウェルフェアシステム

東西産業貿易では、お客様のご要望に合わせた平飼いシステムをご提案いたします！

エイビアリーシステム

鶏がシステム全体をフリーに動けるよう、完全にオープンな設計を採用しています。フロアへのアクセスが容易で採餌やスクラッチングといった鶏本来の行動を促します。鶏にとって居心地の良いネストエリアを提供しながら、高い飼養密度を持つリアル・エイビアリーシステムです。

ネストシステム

鶏の習性を十分に考え抜いたネストシステムです。カーテンの色スラットの高さ、産卵スペース等に至るまで、ネスト本来の目的である“鶏の産卵しやすい場所”である工夫がされています。また、商品化率を良くするために巣外卵・破卵・汚卵を少なくする工夫があらゆる部分にされています。

東西産業貿易株式会社
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-17-8
TEL:03-3815-3133　FAX:03-3815-3134
HP ： http://www.tohzai.co.jp
【お問い合わせ】
東日本エリア（盛岡,東京,三重） TEL：03-3815-3147
西日本エリア（広島,熊本） TEL：096-213-4010

Poultry Layer ナカマチック® Pig Beef

想いを集め技術をカタチに

株式会社 中嶋製作所

中嶋製作所 検索

【本社・工場】
〒388-8004 長野市篠ノ井会33番地
TEL.026-292-1203(代表)
FAX.026-293-1611

SDGs REGISTERED PARTNER NAGANO PREFECTURAL GOVERNMENT
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
長野県登録[182]号

私たちは、いのちを育み、豊かな食を創造し、
みんなの笑顔をサポートします。

ZCS 全農畜産サービス株式会社
ZEN-NOH LIVESTOCK CO., LTD.

家畜（種豚・乳牛）と畜産一般資材やICT・IoT機器などを販売する畜産専門会社です。

〒135-0041 東京都江東区冬木11-17 TEL:03-5245-4871 FAX:03-5245-2424
北九州営業所 TEL:092-715-8787 南九州営業所 TEL:099-482-2521
北 海 道 駐在 TEL:070-4422-8092

全自動養鶏システム

ヨシダエルシス株式会社
https://www.yoshida-lsys.com
代表取締役 吉田 卓司

本社・工場 和歌山県御坊市藤田町吉田155
〒649-1342 TEL 0738-22-2111 FAX 0738-22-8885

東京支店 東京都千代田区飯田橋3-4-10
〒102-0072 TEL 03-3511-0033 FAX 03-3511-3400

コトブキソリューションは、2つの事業で成り立っています。

システム開発事業

拠点：本社（呉市）、広島支社（広島市）、東京支社（東京都新宿区）

WEBシステム、データベース、組み込み系開発等々
様々なシステム開発を行っています。

ゲーム事業

拠点：東広島スタジオ（東広島市）、大阪スタジオ（吹田市）

ブランド名 KEMCO（ケムコ）にて、
ゲームの企画、開発、販売
を行っています。

kemco
www.kemco.game

「ケムコ」で検索をしてみてください。
私たちの作品を見ることができます。

株式会社コトブキソリューション

URL https://www.ksol.jp
お問い合わせメール info@ksol.jp

●東京支社
〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-8-1 大橋御苑駅ビル 2F
TEL 03-3225-3515　FAX 03-3225-5445
●本社
〒737-0046 広島県呉市中通 2-6-6 寿工業ビル
TEL 0823-21-4956　FAX 0823-21-8800

養鶏家と共に歩んで100年

鶏の研究は一歩ずつ着実に進みます

国内の情報を海外へ、年4回発行の **Japan Poultry Research**

一つの問題を掘り下げる**別冊臨時増刊鶏の研究・鶏研 Aim**

環境循環型農業を追究する**自然と農業**を発行し、個性ある出版社を目指します。

〒101-0048　東京都千代田区神田司町2-7　福禄ビル3F
TEL　03-3259-2881　http://www.kikoushobou.net

株式会社木香書房

●総合印刷●情報関連●総合企画・デザイン●出版関連

京和工業印刷㈱

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目18番地6号
TEL.03(3356)3591(代) FAX.03(3356)3593
Eメール：kyouwakougyo@ia0.itkeeper.ne.jp

私たちはITで畜産経営を応援します

畜産経営管理支援ツールの開発・提供
予算管理システムの開発・提供
地図情報システムの開発・提供
システム利用に関するご提案・ご支援

株式会社大建情報システム
Daiken Information System Inc.

〒111-0041　東京都台東区元浅草2丁目6番6号　東京日産台東ビル4階
URL　http://www.daiken-system.co.jp
担当：営業部　池田

農業・JA・地域をつなぐ全国メディア

農村マーケットを対象にした広告・PRは日本農業新聞がお手伝いします。

お問い合わせは、日本農業新聞広告部
Eメール koukoku@agrinews.co.jp

THE JAPAN AGRICULTURAL NEWS
日本農業新聞

JA（農協）グループが発行する農業の専門紙です

全国のJAなどが出資している日本農業新聞が発行しています。農家組合員とJAグループをつなぐ農業の専門紙です。

国内最大の発行部数。ウェブ分野にも注力

農業専門日刊紙として最大の部数を誇ります。全国の拠点で印刷し、毎朝、一般紙朝刊と同じように宅配しています。

スマートフォンやパソコンから閲覧できる電子版も創刊しアプリもリリース。いつでもどこでも読める新聞へと進化しています。

詳細は右の二次元コードから▶

購読料

電子版（個人向け）▶▶ 2,403円/月（税込）

紙版 ▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶ 3,100円/月（税込）
※北海道版は日曜休刊で2,980円（税込）
※一部売り180円（税込）

併読申し込み（個人向け）▶ 4,200円/月（税込）
※北海道版は新聞が日曜休刊のため4,080円（税込）
※クレジットカード払いのみ

農家を主体に幅広い層に読まれています

地域のリーダー的な農家やJA役職員が読者の8割を占めており、関係省庁・団体・地方自治体、農業関連企業、生協、市場関係やスーパーなど幅広い層の方々に読まれています。

新しい発想でさまざまな変化を受入れ　素早く適応し
より経験豊富なチームで動きはじめています

HAKUSHU ARTS
株式会社 博秀工芸
代表取締役　村瀬 科博

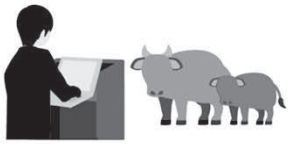
〒113-0034 東京都文京区湯島3-21-4 第1三倉ビル7F
Tel. 03-3836-3680
http://www.hakushu-arts.co.jp/

IS 518517 / ISO 27001

グラフィック（DTP・展示・WEBサイト）
企画・デザイン及び印刷業務、シンポジウム運営業務

MICはICTを通して畜産業をサポートします！

繁殖・肥育　牛管理システム


家畜せりシステム

食肉管理システム

食肉検査システム

MIC Minaminihon Information Processing Center
株式会社南日本情報処理センター
〒891-0115 鹿児島市東開町4-104　TEL: 099-269-9711

M E M O

MEMO

畜　産　映　像　情　報

がんばる！畜産！8

JRA
日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

今、畜産業は担い手不足や国際化の進展など、大きな変化の局面にあります。そんな中、飼料を自ら生産したり、省力化を図ったりと、さまざまな工夫で素晴らしい経営を行っている生産者がたくさんいます。

このサイトでは、そうした各地の優れた畜産経営や、後継者の活躍、おいしくて安全な畜産物を消費者の方々に届けるまでを映像で紹介します。

この映像情報を生産者の方はもとより消費者の方々と共有することで、元気で健全な畜産の発展につなげることを目指しています。

なるほど！畜産現場

このコンテンツでは、畜産物ができるまでや、現場を支える職人たち、馬事文化などあまり知られていない様々な畜産現場を紹介します。

●配信中の内容●

総集編 思いが繋ぐ畜産の未来／総集編 畜産DX 2023／明るい未来へ向けて畜産DXの取り組み／東北一の酪農郷葛巻町の酪農に迫る　ほか

畜産トレンド発見！

このコンテンツでは、生産現場での省力化技術や、飼料用米やエコフィードなどの活用による飼料コスト削減など、「技術」に着目して各地の事例を紹介します。

●配信中の内容●

天皇杯受賞等から見る畜産優良経営／乳用牛改良の取り組み／地域ぐるみで国産飼料生産！／令和５年度全国優良畜産経営管理技術発表会
ほか

グリーンチャンネル
でも放送中

--- 放送日 ---
毎週月～金曜日
朝７時～

「がんばる！畜産！８」
URL：https://jlia.lin.gr.jp/ganbaruchikusan/

（お問合せ先）
公益社団法人中央畜産会　経営支援部（情報）
TEL：03-6206-0846　FAX：03-5289-0890

これからの未来のために

医療の普及

教育施設の充実

畜産の振興

地域への貢献

暮らしのチカラに、地方競馬

地方競馬の売上げの一部は、畜産振興および地方財政の改善に活用されています。

NAR 地方競馬全国協会

https://www.keiba.go.jp/

くわしくは、地方競馬情報サイト「KEIBA.GO.JP」からご覧になれます。